

戦鬼絶響シンフォギア?獣の唄はいのちの鼓動?

アメリカ兎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

認定特異災害ノイズ。その脅威に対抗する唯一の手段、それがFG式回天特機装束——通称シンフォギア。

ルナアタックによって落下してくる月の欠片から人類を守った三人の装者。立花響。風鳴翼。雪音クリス。

それからわずか三ヶ月後の事件から物語は始まる——これは、一人の男が駆け抜けた軌跡。

男の名前は、六道絆。テロ組織「アインフェリアル」に所属する誰よりも奔放なはずの男は、気づけば絆で縛られていた。

——おおきな星に生きる、小さないのちの物語

※06／08 タイトル一部変更しました

目次

Lyric キャラクター紹介及び独自用語解説(06/25追

記)

1

序奏 武装蜂起。 駆ける獣。 新たな出会い

Tr. 1 雑音混じりの歌姫による音楽祭典 | 4

Tr. 2 獲物を追う獣の本能 | 10

Tr. 3 愛想よく気前よく、お近づきの印に | 17

Tr. 4 奮い、狂い立つ戦士達 | 22

Tr. 5 放し飼いの狂犬病にワクチン必須 | 27

Tr. 6 食事に人種制限設けなし | 34

Tr. 7 集うヴァルハラ of 戦士達 | 39

Tr. 8 獣よ、ひた叫べ。 貴方は生きているのだから | 45

Tr. 9 咆哮。 疾駆。 絶叫 | 51

Tr. 10 挑み、護るもの。 挑まれ、護られるもの | 56

Tr. 11 その名は、狂獣・ベルセルク | 62

Tr. 12 人類最高の友 | 68

Tr. 13 そして全ては狂い出す歯車 | 74

Tr. 14 執行猶予待ったなし | 80

Tr. 15 新リディアン音楽院秋桜祭満喫中 | 86

Tr. 16 開戦にして閉幕 | 92

第一節：潜む狂気と挑む勝機

Tr. 17 鮮血の斬姫 | 98

Tr. 18 陸の孤島 | 104

Tr. 19 六道輪廻、冥府魔道は忌み嫌う | 110

T r .	2 0	天網恢恢疎にして漏らさず	115
T r .	2 1	恩讐は、慈悲と共に	121
T r .	2 2	地の果てに、底はない	126
T r .	2 3	畏れよ。我が名は神劍・バルムンク	133
T r .	2 4	拳を握り、道を征く	139
T r .	2 5	混戦激戦区	145
T r .	2 6	食物連鎖	151
T r .	2 7	生命の絶唱こそ我が聖詠	157
T r .	2 8	吼えろ、月まで届けとこの声は謳歌する	162

Lyric キャラクター紹介及び独自用語解説（0 6／25追記）

キャラクター紹介

名前 六道ろくどう絆ばん

年齢 二十四歳

身長 193

シンフォギア ベルセルク

髪型 銀のウルフカット。後ろ髪は伸ばしており、うなじで縛っている。

服装 ワンポイントTシャツに、上から白いシャツを羽織っており下はジーンズ。ベルトに動物の尻尾アクセサリーを着けている

好きな肉 鳥肉

備考 アインフェリアルイレギュラーナンバーの員数外であり、奔放な性格。常に自分の思うがままに行動しており、後述のリードは手を焼いているものの、そんな彼を無二の親友と思っている。風鳴翼のファンであり、ツヴァイウイング解散の知らせを聞いた時は寝込んだ程（なお、ソロ活動復帰と聞いた時は両手を挙げて歓喜した）。

家は極道の系譜であり、祖父は関東最大勢力の菩薩組。六道会の首領をしているが家族仲は一方的に険悪。自分の名前が裏社会に広く知れ渡っている事を不快に思っている。そんな育ちからか、滅法喧嘩に強く、度胸も人並み以上にあるが引き際を弁えており逃げる時は全力で逃げる。気前も良く、響達からすると頼りになる兄貴分。

十年前に両親がノイズ災害に巻き込まれて以来、日本から逃げるように海外で生活してきた。ちなみに偽名は「ロック・ヴァルハルト」

名前 リード

年齢 二十八歳

身長 185

シンフォギア バルムンク

髪型 金のセミロング

服装 白いスーツ

好きな楽劇 神々の黄昏

備考 テロ組織アインフェリアルルのトップを務めている成人男性。物腰柔らかく、穏やかな口調であり誰にでも慈悲深い言葉を投げかけ、手を差し伸べる。日課の一日一善を欠かさない生粋の善良な人間であるが……。

自分達の犯行声明に先駆けて武装蜂起した「フィーネ」達に加担する。なお、リードという名前は偽名である。出生はドレスデン。本名はジークハルト。

名前 ベル

年齢 二十五歳

身長 171

髪型 ブロンドのアップスタイル

服装 男性物の黒のスーツ。あるいはパンツルック

好きな日本食 わらび餅

備考 アインフェリアルル異端技術部門担当。及び、諜報部員兼情報処理担当。六道絆の監視役でもあり、偽名を名付けたのもベルである。各国の翻訳に通じており、アインフェリアルルの働き者。性格は口調こそ厳しくミスを許さないエリート気質を匂わせるが、実は子供っぽい。出生はストラスブル。

ベルは愛称であり、本名は「フルール・ベルモンド」

名前 ヴェオ

年齢 ?

全高 204

毛並み 白と灰の入り混じったもの

犬種 シンリンオオカミに近いが詳細は不明

好きな音楽 ツヴァイウィングの天羽奏のソロシングル（現在はマリア・カデンツァヴァ・イヴのヒット曲がお気に入り）

備考 六道絆が引き連れる規格外のサイズを誇る狼。首輪はしておらず、常に放し飼いとなっているが知能は高い。人語を理解しているのかのように鳴き、またそのように立ち回るが本当に理解しているか

は神のみぞ知る。六道絆にとって一番の家族であり師であり、また恩人（恩犬？）である。ちなみに犬と呼ぶと六道絆ともどもに怒る。

用語解説

アインフェリアル：リードがトップを務めているテロ組織。末端メンバーは数千人及び、その中でシンフォギア装者は三百名。六道絆曰く「これ以上は増えない。減りはするけど」とのコメント。圧倒的な数のシンフォギア装者を保有しているが、その活動は世界中で黙殺されている。

ベルセルク：六道絆の持つシンフォギア・システム。通称『バーサーカー』である。融合症例第一号である響の爆発力や身体機能向上に追従する驚異的な出力を誇るものの、活動時間は九十秒までが限界とされる。装者を選ばないことや聖詠を必要としないという稀な特性から謎が多いシンフォギア。

のど飴：六道絆が常備している飴玉。ハツカやメントールの利くものからお子様向けの果汁のど飴など幅広く所有している。お近づきの印に渡してることが多い。

バルムンク：リードの駆るシンフォギア。アームドギアは長剣ではなく、全身を覆う騎士甲冑の方であり、長剣はあくまでも付属品。闇に葬られたベルの研究していた異端技術が使用されている。

序奏 武装蜂起。 駆ける獣。 新たな出会い
Tr. 1 雑音混じりの歌姫による音楽祭典

一人の青年が歩いている。髪は銀、だが後ろ髪だけを伸ばしたウルフヘアー。うなじで縛っている髪が歩く度に獣の尾のように揺れていた。ワンポイントの柄シャツに、白いシャツ。ジーンズに巻いた革のベルトには動物の尾を模したアクセサリーが付いていた。

鼻歌交じりに歩くかつての生まれ故郷の土を踏み、上機嫌だった青年だったがポケットから取り出した通信機の着信に嫌そうな顔を隠そうともしない。

「ういー」

《ちよつとロック？ 真面目にやって》

「真面目もクソもあるかよ。散歩中だつっうの」

《あのね、知ってるとは思うけど——》

「んじやな」

話をぶつ切りにして青年は通信機をポケットにしまい込んだ。散歩すらもままならない現状に頭を悩ませている。だが、こうする以外に今の自分に許された自由など無い。

日本へ帰国したのも、これが理由だ。十年ぶりに帰ってきたというのにかつての実家も何も残っていないなかった。まあそれは彼にとってしてみればどうでもいいことである。何より大事な理由は、ポケットに忍ばせていたチケット。

今夜開催される音楽祭典「QUEENS of MUSIC」を観に行く。ただそれだけの為に彼、六道絆ろくどうつばんは日本へと帰ってきた。それ以外などそれこそ本当にどうでもいい。

「今夜のライブは風鳴翼が出るんだから生で観てえんだよ」

それまで上の意向など知ったことではなかった。六道絆の信条、理念は「弱肉強食」であり——つまるところ、ノイズに殺された両親は弱者であり生き残った自分は強者。自分より強い相手に臨む理由も

今のところはない。塞翁が馬、なるようになれ。それが六道絆の生き方。

かつて認定特異災害『ノイズ』に両親が殺されたおかげでお国からは保険金が多額に支払われて、それを使って自由気ままに気楽に生きてきた。だが、自分の場合は運が悪かったというべきかそれとも運が良かったというべきなのだろうか？

六道絆は、これまでに人生で「三回」も襲撃されていた。一度は両親が殺され、二回目は世界旅行中に。三回目は——運命的な出会いをした。しかもパスポートも紛失して身分証明書など一切合切なくしている。

ノイズに襲撃される比率は、国連からの見解では、日本都心で通り魔事件に遭遇するかどうかというレベルだ。そうなると六道絆のノイズ襲撃の回数は異常とも言える。人生で三回も通り魔に襲われて生還しているというだけでも異常な生存本能だ。その御蔭で口座には使い切れるか不安な程の金額が貯蓄されていたが、彼は金銭にさしたる興味を示さない。強いて挙げれば、その日の食事に困らないから便利程度の認識だ。

そして——それがまさか今夜で四回目に更新されることになるとは思ってもみなかったが。

結果から言えば「QUEENS of MUSIC」は中止となった。それもマリア・カデンツァヴァ・イヴによる全世界へ向けた宣戦布告によつて。ライブ会場には多数のノイズが出現し、観客達は人質という形で拘束された。それに異を唱えることが出来る程の力を持つ人間など、その場にはいなかったし六道絆もまたそれに倣った。彼の目下の不満らしい不満はライブが中止されたことくらいである。

むしろ、日本のトップアーティストである風鳴翼を目の当たりにすることが出来た。ただそれだけで感無量である。ツヴァイウイング時代から風鳴翼のファンだった六道絆は、目の前に立つノイズが身動き一つしないことに疑問を抱いていた。

認定特異災害ノイズの特性は以下の通りである。

機械的に人間だけを襲う。位相差障壁によってあらゆる物理攻撃を減衰？相殺させる最強の盾を持っている。そして、触れた人間を炭素転換するという最強の矛の両方。触れば炭となり、あらゆる質量攻撃を無効化させる。この両者の特性によってノイズは人類種の天敵として認識されていた。だが、ライブを観に来ていた客を襲わず、ただ包囲しているだけというのが六道絆の眉を寄せる。

その行動がそもそもノイズらしくない——彼の鼻が行き着いた答えは「ノイズ達は操られている」ということだ。

ノイズの出現によってライブは中断させられた。ならばこれ以上、風鳴翼の歌声は望めない。落胆した様子で六道絆は会場を後にする。「つたく、せつかく楽しみにしてきたつてのによー」

会場だけでなく売店でも困惑した様子で店員が狼狽えていたが、六道絆は容赦なくやけ食いに徹した。ノイズが出現したというだけで観客達は怯え、それどころかライブスタッフも職員としての立場を忘れていた。にも拘らず、六道絆はマイペース街道を地で行く。傍から見れば狂人の類だ。

「あ、あんたノイズが怖くないのか？」

「オレの人生でノイズに会うのは三回、今夜で更新して四回目になるんだなこれが」

素っ頓狂な声を上げて信じられない顔をしている店員に釣り銭を要求して、六道絆は両手いっぱい食事を手にして食べながら歩く。そんな時に限ってポケットの通信機から着信が鳴っていた。

「ひゃひ、もひもひ」

《……お願いだから人類に分かる言葉でお願い》

「メシ食ってんだよ、後にしろ」

《ノイズと食事、どっちが大事なのよ！》

「んなもん今日のメシに決まってるだろ」

《バカなの!?!》

「おめーが言うか？ いいから後にしてくれ。話はメシ食ってから聞いてやる」

《大事な話なんだから聞きなさい》

「オレのいるライブ会場でノイズ大量発生。異常事態。他には」
《……さっきの放送、生で観てたんでしょ？ なら分かるでしょ》
「知らん分らんどうでもいいチケット代返せのクレームコール」
《ねえロック。もしかしなくても貴方、バカなの？》
「常識知らねえだけだ。切るぞ」

切ろうとする通信機から心底呆れた声が返ってくる。

《私達の目的を忘れないで》

「勘違いすんな。お前らの、だ。オレと一緒にするんじゃない。そつちの首尾はどうなんだよ」

《あら、失敗すると思ってたの？ 当然ながら順調よ——タイミングは最悪だったけどね》

「あー……」

《あの歌姫様に先を越されちゃったわ。ま、それを見ている私達のボスは嬉しそうにしてるけどね》

「んで？ どうするんだい」

《そうね。犯行声明はキャンセル。彼女達に助力という形で様子を見るみたいよ》

「会場限定のCDとか売ってねえかな、ブロマイドでもいいけどよ」
《聞ってるの？》

「メシ食ってる時のテレビ並には聞いている」
それはつまり聞いていない、ということなのだが。

《——貴方に命令が下ったわよ。オーダーは、彼女達との接触。出来るかしら？》

「握手会でもねえのに米国チャート一位の歌姫とお近づきになれつか？ どうせなら風鳴翼の方がいいんだがね。ツヴァイウィングからファンだつ——」

《訂正するわ。絶対命令に変更よ。マリア・カデンツァヴナ・イヴと接触、交渉に持ち込んで》

「……へいへい、りよーかい。メシ食ってからな」

六道絆は鬱陶しそうに通信機をポケットにしまい込んだ。空にした。パックをゴミ箱に捨てて、今度は一緒に買ったアメリカンドッグと

ホットドッグを両手の指に挟みながら口に運ぶ。

「ふっふーん……♪」

上機嫌で肉を頬張り、間もなくして両手の串を空っぽにするとゴミ箱に投げ捨てる。それからすぐにマリヤからライブ会場の観客を解放すると発表があつた。それに眉を寄せる。

「……テロ、やる気あんのか？　ま、そういうのはお上の得意分野か。オレは知らねーけど」

世界に向けた二十四時間以内の国土分譲。からのオーデイエンス解放。そうなると、すぐに観客の避難誘導が始めるはずだ。六道絆はトイレへと駆けこむ。

スタッフによる避難誘導を聞きながら個室の鍵を掛けた。後は静かになるまで腰を落ち着けるだけだ。再びポケットに入れていた通信機が震えている。

「へいもしもーし」

《ちよつとロツク。今なにしているの？》

「トイレで休憩中」

《最っ低……デリカシーって物が無いのかしら》

「外で済ませないだけ文化的と言つて欲しいんだが」

《人間として “最低限” の文化は理解してるようで安心したわよ……》

最低限、の部分だけを強調して受話器の向こうの女性はただ深い溜息を漏らしていた。

「さて、そこで一つ聞きたいんだがいいか。ベル」

《どうぞ？　トイレの使い方以外でね》

「“本職” からの見解はどうなんだい。あの歌姫の全世界に向けた宣戦布告」

《まるでド素人。やり方が悪いわね》

「お手本は？」

《どうせなら各国で自爆テロくらい威嚇でやるわ。ついでにライブライオンカット辺りもね》

「ハハ、おつかねえ……」

《末端とはいえ、同じ組織に身を置いてるじゃない。他人事じゃないのよ》

「明日は我が身ってか？ おっと、会場の避難誘導が終わったらしい。こっちもそろそろ行動起こすぞ」

外が静かになったのを見計らってから六道絆はトイレを後にする。

Tr. 2 獲物を追う獣の本能

無人となったライブ会場から響くのは、金属音。シンフォギアシステムを纏ったマリアと翼の二人が戦っていた。六道絆はその様子を出るだけシートに身を隠しながら盗み見る。

アイドルとしての風鳴翼しか知らなかったが、これは僥倖だった。歌姫としてではなく、戦場に立つ一人の戦士としての風鳴翼の一面に六道絆は思わず口端が緩む。

(へえ……風鳴翼ってただのアイドルじゃねえんだな。ま、それを言ったら——あのマリア・カデンツァヴナ・イヴもそうか)

聖遺物の欠片を用いたシンフォギア・システムを纏い、戦う歌姫——装者。そして、人類種の天敵、ノイズ。状況は、明らかな劣勢を強いられている翼。一ファンとして次のCD発売が待ち遠しい身分の六道絆は今すぐにも加勢に駆けたいが、今の自分にはそれが許されない。もどかしいものだが、他のファンは知らないアイドルの一面が見れたのは儲けものとしておこう。

会場からバックヤードへ立ち去ろうとする翼だったが、マリアによつて会場へ蹴り戻される。思わず腰を浮かしそうになるが、ライブモニターの中継に自分が映れば、上のメンバーは無視しないだろう。そうなる——少々どころではない厄介事になるのでやはり静観するしかない。

(まったく、ロックじゃねえな……面倒くせえ仕事だぜ。どうやって接触しろってんだ?)

その時、生中継で映していたはずのモニターが全て暗転した。誰かが電源を切ったようで、聞き慣れない歌が六道絆の聞き慣れた声で奏でられる。

「風鳴翼も、装者だったのか……」

約三ヶ月前のルナアタック事変では三人の装者が落下してくる月の欠片を粉碎して世界を救った——その一人が、風鳴翼だった。日本のトップアーティストであり、ファンとしては嬉しい限りだ。だがこ

れを世間に公表するかと聞かれたら、自分は断固として首を横に振る。

ノイズを一掃する様も、普段からは想像もつかなかった。むしろそちらが本性であるかのように。戦場に身を置く事こそが風鳴翼の本性であるならば、六道絆はどうもノイズと切って切れな関係らしい。まあ国連から多額の保険金が支払われて貯蓄が潤う分には文句はないが……この状況は面白くなかった。

（つたく、ヴェオも一緒に連れてくりや良かったかな。ま、いざって時は……）

自分の保身より風鳴翼の新曲の方が重要だ。しかしそれは杞憂に終わった。後顧の憂いは無くなり、今度こそ翼はマリアと一騎打ちになる。果たしてこの状況を眺めているだけで状況を打開出来るか。百も承知の満場一致で答えは「NO」の一点張り。それを強制されれば嫌でもフラストレーションが溜まるものの、祈るしかない。装者同士の戦いに自分が飛び込めばどうなるかなど考えるより先に結果が思い浮かぶ。

マリアの他に、更に二人の装者が加勢に入る。緑の死神と赤い兎とでも形容すればいいだろうか。状況はやはり翼の方が劣勢。果たして今、自分が加勢に行くべきか——足に力を込めて駆け出そうとするのを一喝したのは他でもない翼の言葉。上空を言われるままに見上げれば、かつての英雄たち。月の欠片から全人類を守ってみせた装者が三人揃い踏みとなった。

数の不利は埋まったものの、口論が始まる。それもすぐに決裂して再びアームドギア同士が衝突した。他に注意を向ける余裕が無いのか、自分が見つかる気配はない。

（英雄、ね。あの少女達が……）

年端もいかない少女達にこれまた過酷な運命だこと。他人事のように六道絆は鼻で笑った。そんなの頼まれたって願い下げだ。三ヶ月前の事件を契機に全世界へ開示された桜井理論に基づいた研究・解析も急ピッチで進められている。その恩恵を受けることが出来た国家は現在のところアメリカがトップと言っても良いかもしれないが、

進展は芳しくない。

勝負は互角に続くかに思われたが、オーディエンス席に光が集中したかと思つた次の瞬間。巨大なノイズが出現した。緑色の巨体は見上げるばかりだ。流石にそれは厳しいかと六道絆は胸を押さえる。だが、自分達で召喚したのであろうノイズをマリアが槍のアームドギアで粉碎するとすぐに全身が四散した。

「やべっ」

その肉片、或いは破片がまっすぐ飛んでくるがシートの背もたれに身体を隠して事なきを得る。蠢いて再生していくノイズは、このままでは自分へとすぐに襲いかかるであろう事はノイズの習性上、明らか。六道絆はマリア達をすぐさま探すと、会場を飛び越えて去つて行く姿を目視した。夜の闇へと消えていく背中を追うべく、地を這うようにして身を屈めると残された装者達に見つからないことを祈つて全力疾走で駆け出す。

——マリア達はライブ会場から離れ、ビルの屋上で様子を窺う。世界最後のステージ。自分達は全世界へ向けて宣戦布告を成し遂げた。もう後戻りなど出来ない。

「……マリア」

「どうかした、調」

「……あそこ。人がいる」

「なんですって?」

「こつちに来てるデスよ? 手を振ってるデス」

「マリアのファン……? でも、ここまで追ってくるなんて」

なんにせよ警戒するに越したことはなかった。装者達を三人も前にして手を振っているあの男性は一体何者なのだろうか。

「どうするデスカ」

「……マム」

《今は引きなさい、マリア。不要な接触は避けるのです》

「ええ、分かったわ。切歌。調、行くわよ」

頷いてビルの屋上から飛び去る三人の姿を見て、六道絆は通信機を

取り出した。

「こちらロック、マリアと接触を試みる！」

《失敗しないように》

「オレの心配しろ！ 逃げようってんだな？ 面白え、獲物のケツ追いかけるのは大得意だ！」

六道絆は夜の街を駆ける。目端に付いた先から足場にしてビルの屋上へ人間離れた運動能力で登りつめた。階段を手すりを使って上の階に飛び移りながら、命綱も無しにマリア達の背中を見るなり駆け出す。翻るマントに、暗闇に生える赤いギアと緑の死神。

「マリア！ あの人、追いかけてきてるデス！」

「嘘。そんな!？」

高層ビルを挟んだ跳躍。流石にそれは自殺志願者でもない限りは飛び降りようと考えないだろう。六道絆も流石にそれは踏み止まった——が、一瞬の逡巡の後に柵を飛び越えて地面へと落下していく。「なッ!？」

落下直後に窓の縁に手を掛けて減速、減速。減速。減速。繰り返す都度五回。二階から壁を蹴って地面を転がり、駆け出す。車両が行き交う道路を突っ切ってクラクションを応援代わりに六道絆は駆けていた。文明的な社会にはあまりにそぐわない野性的なパルクール。都会をコンクリートジャングルと蔑称するときもあるが、彼にとってはまだうってつけの場所と言える。

装者は身体能力も向上しているにも拘らずそれに追従しているだけでも驚愕に値していた。このまま振り切ることも出来るが……最悪の場合、追いつかれる可能性もある。あの異常な運動能力では時間の問題かもしれない。

「このまま逃げてでも追いつかれるデスよ！」

切歌の言う通りだ。このまま合流してしまうとまずい事になる。相手は人間。ただの人間とは思えないが、こちらは装者が三人。どのような状況になっても対応は出来る。

「仕方ないわね」

見たところ、熱狂的なファンとは思えない。なにか別な目的がある

ように感じられる。

マリアが足を止めると、それに続いて二人の装者も立ち止まった。六道絆はゴミ箱を足場にして壁を蹴り、三人へと近づく。

「つたく、そんなマジで逃げるなって……」

「息一つ乱さずによく言うわね。何の用？」

「正確にはオレが用事あるわけじゃなくてね。戦うつもりも無い。だからまあー、武器を向けるの止めてくれねえかな？ ほら、オレ丸腰だし」

両手を挙げて近寄る六道絆に穂先と鎌を振り上げて威嚇するマリアと切歌。それ以上の接近は危険と見たのか、ポケットから通信機を取り出す。一言二言、言葉を交わしてから通信機を差し出した。それを調が受け取り、マリアに渡す。

「……もしもし？」

《——ああ、聞こえますか？》

「私達に接触してくる貴方達は何？」

《我々は、アインフェリアル。私はそのトップを務めている……。リード》です》

「アイン、フェリアル……？ 聞いたことがない」

《そうでしょうね。なんと言いますか……そう、武装組織ファイネカらしくみれば先輩という立ち位置でしょうか》

「……つまり、テロ組織ということ。それが私たちに何の用事かしら」
《偶然の一致とでも言いますか。実は我々も今夜を機に全人類へ宣戦布告をしようと窺っていたのですが、貴方に先を越されました》

「少しだけ残念です。憂いを込めてリードと名乗ったテロ組織『アインフェリアル』のリーダーは呟いた。

「それで。挑戦状でも叩きつけよう」と

《とんでもありません。むしろその逆です。折り入ってお願いがあるのですが、聞いていただけますか》

「ひとまず、耳は傾けさせてもらおうわ」

《我々を貴方がたに協力させていただけないでしょうか？ 無論、これはあくまでも私の意思です。是非は貴方の采配に委ねますよ、マリ

ア・カデンツァ・ヴナ・イヴ》

「私達に協力ですって!? なんのつもりで!」

《厚意ですよ。ご迷惑でしたら大きなお世話と断ってくださいませ》

物腰穏やかな紳士的な態度がテロ組織の頭目に相応しくない。正体は一切わからないが、目の前の男性はこちらの様子を見守っている。

「私達の目の前に居るこの男は何者だ」

《ああ、ロックのことですか。彼もまた、我々アインフェリアルの間。ですが非協力的で中々扱いに困るところがありますが、私の大事な親友でもあります。そうですね……答えを急ぐことはありません。まずは彼を貴方がたに貸してあげましょう》

「……」

マリアは改めて目の前の成人男性を見る。歳は同い年か、一つ二つ上だろうか。東洋人は若く見られるが、背丈は自分でも顎に当たるほど。恵まれた身長に、あの異常なまでの運動神経。髪も相まって野性的というか、なんとも獣じみた印象を受ける。

「信用できるのか」

《まずはお互いに歩み寄り、信頼を得る。その一步として私は貴方に親友を差し出した。これでは信を得られませんか？ 彼から私達の情報聞き出すもよし、無理難題をふっかけるも良いでしょう》

「……」

《まだ疑うようでしたら、胸元にある装者のペンダントを二回ノックしてください。彼に見えるように》

マリアは六道絆に向き直り、胸を張って装者のペンダントを二回叩く。それを見て、バツが悪そうに頭を掻くと首から下げて服の下に隠していたペンダントを見せた。

「これでいいか?」

「この男も、適合者……」

《これ以上ない戦力となると思いますが、いかがですか?》

「だ、だがそちらに何のメリットが」

《言ったはずです。貴方が先に先を越された、と。ならば先達に敬意を払うのは当然のこと。何かあれば彼を通してください。協力は惜しみません、それでは》

「待て、まだ話は——！」

通信機が沈黙し、マリアはうんともすんとも言わないそれを六道絆へ放り投げる。片手でキャッチすると、ポケットへぶつきらぼうに入れた。

「んで？　うちのボスはなんだって」

「……我々に協力する。その担保としてお前を差し出す、と」

「は？　マジで言ってるのかアイツ。聞いてねえぞそんなの……別にいいけどよ」

「ママ。聞こえるかしら」

《聞こえています、マリア。ひとまず彼を連れてこちらと合流を》
「了解」

Tr. 3 愛想よく気前よく、お近づきの印に

武装組織ファイネの活動拠点となるヘリキャリアへ六道絆は案内される。半ば連行という形での同伴となるが、本人はさして気にしている様子はなかった。

「貴方のシンフォギアを預かせてもらおうわ」

「ん？ いいぜ。ほれ」

「そんな簡単に渡しちやうデスカ」

「……ぞんざい」

聖遺物の欠片から製造されるシンフォギアシステム。ノイズに対抗できる唯一の手段。人類が取れる対抗策をあつさり手放して六道絆は MARIA にペンダントを渡した。装者としてあまりに無防備すぎる。少なくとも、シンフォギアを纏う者とは思えなかった。

「まー、オレのシンフォギアは癖あるからな。出来ればオレも纏いたくねーし」

武装組織に一人放り出された。組織から当て馬とされても笑みを絶やさない六道絆はむしろこの状況を楽しんでいる。ふと、思い出したようにポケットに入れた手を出すと、切歌と調の二人に差し出す。

「いるか？ のど飴」

物怖じしない性格なのか、命知らずなのかどうかは知らないが絶望的な状況下にあつてこのマイペース。のど飴を受け取る切歌と調は警戒心こそ隠さないが、緊張は解れたようだ。

「私イチゴ味……切ちゃんは？」

「メロン味デース。あむっ」

「アンタもいるか、のど飴」

「えっ？」

「ほい」

「な、なんでそんなほいほい出てくる。のど飴」

「常備してるからな」

MARIA は六道絆からアセラ味を受け取る。

「戻りましたか、マリア。そして……貴方が我々の協力者？」

「テロ組織アインフェリアル。ま、イレギュラーメンバー扱いでね。オレは頭数に入っていないから何かと自由なんだ」

「そう言いながら両手を挙げて抵抗の意思は無いことを示す。車椅子に座った眼帯の女性は目を細めた。

「ママ、これは彼のシンフォギアよ」

「分かりました、預かっておきましょう。私はナスターシャ。貴方の名前は」

「六道絆。輪廻六道に、絆で六道絆だ。歳は二十四」

「暁切歌デース！」

「月詠調……」

「そっか、よろしくな」

自己紹介を軽く済ませてからナスターシャは六道絆を見る。

「テロ組織に名を連ねている者が、何故シンフォギアを持っているのです」

「うちのボスがそういうのに手が回る人間でね。心強い協力者もある」

「アインフェリアルの目的は」

「ま、多少の誤差はあれどフィーネと目的は同じだ。だからこつちもアンタらに協力する」

「……」

「見たところ、装者が三人。他に戦力は」

「ありません。我々だけです」

「なるほど」

「そちらの兵力は、どれほどなのですか」

「今、現段階で協力できるのはオレ一人だ。他のメンツは別行動中。アインフェリアルの構成員は数千。適合者は、三百人。これ以上増えることはねえよ、減りはするけどな」

「三百……!?!」

「デタラメを！ そんな数の適合者を何故一介のテロ組織が！」

「オレが嘘言つてなんの得がある。マジなんだからしようがねえだ

ろ。国家非公認、非公式。明るみに出れば首根っこ締められるのはお国の方だ。だが、ノイズ被害に手が出せない以上はストツプも掛けられない。ま、そんな数に増えたのもこの三ヶ月以内の話だが」

必要なら自分からボスに掛け合う、と六道絆は付け足した。あまりにもかけ離れた戦力差。それにナスターシャは考えこむ。

「いいでしょう、分かりました。我々は貴方を、純粋な一戦力として歓迎しましょう」

「そりやどうも」

「ただし。こちらからの指示が無い限りは勝手な事をしないように」「了解」

ヒラヒラと手を振って見せる六道絆はポケットからのど飴を取り出すと、ナスターシャへ渡した。

「ま、お近づきの印だと思って」

「……ありがたく受け取っておきましょう」

「マムは何味もらったデスか？」

「恐らくはハツカ味です。違いますか」

「正解。といってもそれで最後だけだな」

ポケットの中を広げて見せるが、空っぽになっている。

「オレは基本、そっちの方針に従う。用があれば言ってくれ」

「分かりました。ひとまず私達のアジトへ移動しましょう」

「オーケー、マム。ミスター六道」

「バンでいい。オレもアンタはマリアって呼ばせてもらう」

「そう。変な気は起こさないように」

素っ気ない態度でマリアはナスターシャの車椅子を押して操縦席へと去って行った。

(調。あの人、米国からのスパイってことはないデスよね)

(どうだろうね……でもいざっていう時は)

ヘリキャリアでアジトへの道中、切歌と調は六道絆の監視を命じられる。だが、当人に限って言えばむしろ子守を命じられたように思っていた。お互いにそんな必要はないと思いつつも、不安と警戒心は拭

えない。かと言って、踏み込んだ質問も遠慮していた。

装者のペンダントを握る調の手を取って、意を決したように切歌は六道絆へ声を掛ける。ベルトから下げた尻尾のアクセサリーの中から音楽プレーヤーを取り出していた手が止まった。

「あ、あのデスね!」

「ん? なんだ、キリカ」

「えっと……スパイとかじゃ、ないデスよね?」

「……オレが諜報員、或いは工作員か何かに向いてると思うか?」

「貴方の運動神経は異常だけど……」

「ま、それはそれ。心配すんな。オレはアインフェリアル情報は渡すが、こっちの情報はボスに聞かれても shouldn't 限りは言わねえさ」

そもそもテロリストのトップが国に情報を明け渡しても何の得にもならない。それを聞いてひとまず胸を撫で下ろす切歌だったが、今度は別な興味が湧いた。

「何を聞いているデス?」

「ツヴァイウィング。二年前に解散したユニットの、一番のお気に入りだ」

認定特異災害ノイズによって最後のライブとなった楽曲。そのメンバーである風鳴翼が現在も活動していると聞いた時は諸手を挙げて喜んだものだ。あの時はライブに行ける状況ではなかった。今こそはと足を運んだ結果が——コレである。なんともやりきれない思いが口から深くため息をこぼした。

「ツイてねえなあ……ライブ、最後まで聞きたかったのよ……」

そんな呟きに、申し訳無さそうに頭を垂らす切歌。それを見て六道絆はイヤフォンを片耳だけ付ける。もう一方は切歌に差し出していた。

「聞くか?」

「い、いいんデス?」

「なんなら、二人で聞いてていいぞ」

「……私も?」

「ああ。入ってる曲はオレの趣味だけど、それでも良かったら好きに

聴いてていいぜ」

「ありがとうデス！ でも、どうしてそんなに気前いいデスか？」

「どうしてって聞かれてもな。単に、好きなモノは共有したいだろ。良い音楽は広めたいし、美味しい飯は一緒に食う。そんだけだ」

「じゃあ、のど飴好きなの……？」

「オレはシンフォギア使うと喉痛くなるんだよ。だからいつも持つてるっただけだ」

「フンフンフーン……♪」

切歌はすっかり楽曲に聞き入っているのか、鼻歌を交えてリズムを取っている。それを見て調もイヤフオンを付けて耳を傾けた。気に入った二人は音楽プレイヤーを握って立っていたが、やがて腰を落ち着ける。

楽しそうに音楽を聞く二人を見て六道絆はヘリキャリアから外の景色を眺めていた。

Tr. 4 奮い、狂い立つ戦士達

裏社会と呼ばれる界限があるように、彼らはまた、そんな人間社会に名を馳せる存在だった。自己の利益のみを求めるだけに犯罪に手を染めるのが常となっているはずの裏社会であつても彼らの存在は極めて異例と言える。アインフェリアル——それは神話にあるように、いずれ来るラグナロクの為に集められた戦士達のことだ。それを束ねるトップに君臨している男の名は、リード。

白いスーツに身を包み、落ち着いた物腰で紅茶を口に運ぶ。死臭に溢れ、血に塗れ、破片が散乱している店内は暴虐の限りを尽くされている。しかし、意に介した様子もなく彼はそれが日常であるかのよう
に心中は穏やかな水面そのものだった。

「……………ふう」

吐息と共に受け皿をテーブルに置くと、奇跡的なバランスで保つていた脚がとうとう崩折れてまだ中身の残っていたカップごと床に倒れる。

足元に突っ伏している男性は、彼が交渉を重ねた結果の有様だ。息も絶え絶えになりながら、まだ生きている。

「ベル」

「はい」

「ロックは上手くやれるかな？」

「環境適応能力において、彼を案ずるのは愚問かと」

「それもそうだね。生まれ故郷に戻ると言われた時はショックを受けただけど、ライブの為なら仕方ない」

その時の思いを語るリードは笑みを浮かべていた。ベルと呼ばれる女性はモデルと見紛うばかりの眉目秀麗な長身。だが、その手に握っているのは硝煙を漂わせている自動式拳銃。減音装置を付けているそれをサスペンダーにしまい込むと、ブロンドの髪をなびかせる。

「マリア・カデンツアヴナ・イヴ……残念だ、彼女のライブが終わって

から声明発表するつもりだったんだけどね」

「まさか当人から先を越されるとは思いもしませんでした。ですが」
「それならそれで、我々が彼女達を援助すればいい。その途中に頓挫しても我々が引き継げばいい。結果は変わらない。どちらに転んでも、やることは同じさ」

「次にどう動くか、ですね」

「うーん……それなんだけどね、ベル。どうにも、彼女達はああいったのが不慣れなように見える」

「と、言いますと?」

「現地で彼女達のサポートに回ってもらいたいんだ。当然、ロックの監視も兼ねて」

万一にも裏切るようなことがあれば、その時は始末する。そんな思惑などリードには微塵もない、ただ心配なだけだ。

「では、私に日本へ飛べと?」

「そうなるかな。それとヴェオも一緒にね。日本では特にノイズの被害が大きいみたいだから」

「分かりました」

「二十四時間以内に国土の割譲が行われない可能性を考慮して、こちらで備えておくよ」

「しかし、よろしいのですかリード。我々の存在を世界に知らせる事になりますよ」

「遅かれ早かれ同じことさ。交渉材料はこちらの手に余っている」

足元に突っ伏して虫の息となっていた男が手を伸ばし、リードの革靴を掴む。それを見下ろしながら笑みを浮かべて尋ねる。

「貴方はそう長くない。残念ながら」

「……………の……………狂信者め……………」

「とんでもない。私はただ、救いたいだけです。善意です、慈悲なのですよ。貴方はそれを拒んだ。貴方と、貴方に連なる者達は」

「貴様のような、若造に……………! 誰が、従うものか……………」

「——私は、とても哀しい。なにも従えと言った覚えはないのですが、そのように取られてしまつては仕方ない」

震える手を取り、リードは死にゆく男に傳いた。

「分かり合えないのなら、貴方に価値はない。ベル、彼に慈悲を」
「ご自分でどうぞ。私、本来こういう荒事や揉め事は管轄外なので」
「そうか。じゃあそうしよう」

胸ポケットから取り出したのは、無色透明の液体が入った注射器。男の首元に刺すと、中に入っている液体を一息に流し込む。それに抵抗を試みるだけの体力も気力も残されていない男は身体に注入された液体がなんであるかも知らず、痛みを忘れて安らかな眠りについた。二度と覚めることない最期に、リードは黙禱を捧げる。

「撤収」

ベルが号令を掛けると、待機していた黒服の集団は静かに頷いて車両へと乗り込む。メモ帳を取り出すとリストに載せられている名前に赤い二重線を引いた。

「では、私は日本へ飛ぶ準備を済ませてきますね」

「こちらも手を回しておくよ。三日もあれば日本で生活出来るだけの用意はできるかな」

「どうもありがとうございます。ヴェオ、行きますよ」

「それでは頼んだよ、ベル。ああ、ヴェオの手綱はしっかりとお願いします」

「自信、ありませんけれどね」

F. I. S. がアジトである廃病院に移動してから二日。六道絆はくつろいでいた。こちらから特に動きを見せる事もなく世界の情勢を静観するフィーネを騙る武装組織に、特に意見することもなく過ぎている。

暇があれば音楽プレーヤーでお気に入りの楽曲を飽きることなく繰り返し聞いていた。それを監視していたのは、切歌と調。この数日間、組織と連絡を取る素振りも見せない六道絆が不思議でならなかった。アインフェリアルと連携を取るつもりなど全く見えない。むしろ、何故接触するためにこの男が向けられたのかが不思議でならなかった。もっと適した人材がいたはずだろうに。人材不足は相手も

同じなのだろうか。

ウエル博士との挨拶も程々に、完全聖遺物のネフィリムにもソロモンの杖にも興味を示さなかった。どうにも、そちら方面には淡泊と見える。

「……腹減ったな」

音楽プレーヤーを耳から外して、調に渡すと六道絆は立ち上がった。

「メシでも買ってくるか」

「勝手なことするなデス！」

「見つかったら、大変……」

「とはいえ、此処でジツとしてたつて状況は変わらない。世間様の声に耳を傾けてくる気晴らしでいいだ」

引き止めようとする切歌の手をすり抜けて、外出しようとする六道絆の前に MARIA が立ちふさがる。互いに視線を交わすのも一瞬、MARIA の目はすぐに切歌と調に向けられた。

「二人とも、何か変わったことは？」

「何も無いデス」

「……ずっと、音楽聞いてた」

「そう。ならいいわ」

「メシ買いに出かけてもいいか？」

「協力者が聞いて呆れる。勝手なことをするな」

「悪いがオレは自分勝手に自由奔放でな。ちよいとメシ買ってくる」

「あつ、ちよつと」

引き止めようとする MARIA の手も、これまた簡単にすり抜ける。だが、避けた先でウエル博士にぶつかりそうになっていた。

「おっと、危ないですね」

「ワリいな、ドクター」

「何の騒ぎでしょうか？」

「その男が、勝手に外出しよう」と

「メシ買いに行ってくるだけだ。いいだろ、ドクター」

「まあまあ、それぐらいならいいじゃないですか」

「流石。話が分かるようで。んじゃ、ちよつくらひとつ走り行ってくるわ」

「その前に。こちらを」

ウエル博士がポケットから取り出して六道絆に渡すのは、インカム。

「何かあればこちらから指示も出せますし、何より連絡手段が無いのは困るでしょう?」

「そりやな。ありがとさん。そいじゃ行ってくるわ」

手を振って六道絆は走り去って行った。その背中を見送って、ウエル博士は眼鏡を直しながらマリア達に向き直る。

「さて、それでは彼もいなくなりましたことですし……こちらのお話しをしましょうか」

「どういうこと?」

「ナスターシャが預かったペンダント。彼の使う聖遺物の名前が判明しましたよ。彼の扱うシンフォギア、その名前。それは——ベルセルク」

「ベルセルク……?」

「ええ。軍神オーデインの神通力を受けた戦士達の総称です。我々に馴染み深い名前としては『バーサーカー』でしょうか。とはいえ、どのような性能かまでは分かりませんでしたかね。名前が分かっただけでも良しとしましょう」

名前だけなら馴染みあるものだ。しかし、ベルセルクの聖遺物の欠片を用いたシンフォギアにマリア達は不安が拭えなかった。まともな性能をしていないに決まっている。もし、伝承にある通りならば、彼のシンフォギアはこちらで保有していた方が安全だろう。

Tr. 5 放し飼いの狂犬病にワクチン必須

六道絆は、ライブを観たら一泊二泊で余韻を楽しんで本部へ戻ろうと思っていたが状況が変わった今となつてはF・I・S・と行動を共にするだけだ。そもそも偽名を使って入国している時点でご法度なのだが、そんなことはどうでもいい。時刻は夕飯時より少し前。ショッピングモールには人が溢れている。道行く人々には目もくれず、何か腹の足しにならないものかと軒先の看板を眺めていく。学校帰りの女子高生達も何人か目についてた。

自分がF・I・S・の夕飯の買い出しをしているのは、単に自分が空腹を訴えたからである。それに加えて、マリア達の食生活に若干の不安を感じたからだ。どれほどの計画性を持って行動を起こしたのかはわからないし、口を挟むこともなければ世話を焼くこともない。が、しかしだ。自分だけが好き勝手食べるというのもそれは気が引ける。どうせ食うなら全員で美味しい食事を囲んで食いたい。腹が減つてはなんとやら、だ。

そんなことを考えながらフラフラと歩いていた六道絆が、通行人と肩をぶつける。むしろ相手からぶつかってきた気もするが、そんなことはどうでもいい。

「っと、ワリイ」

「あん？」

敵意も害意も明らか。ついでに言えば人相も悪い、往來の通行人もそれとなく目を背けて見ないようにしていた一団。どこにでもいるような反社会的な勢力に連なる方々だ。六道絆はその顔を窺って「あー……」と声を漏らす。

——新リディアン音楽院では秋桜祭の準備が進められていた。クラスごとの催し物が決まり、その用意に必要な品物の買い出しも生徒達が自主的に行っている。

この日、立花響と小日向未来もまたショッピングモールへと足を運

んでいた。その両隣には風鳴翼と雪音クリスマスも一緒に並んで歩いている。

「いやあー、楽しみだなあ秋桜祭」

「響ったら張り切っちゃって」

「だって文化祭だよ？ 学園生活の華なんだからそりやあ楽しみに決まってるじゃん。未来は楽しみじゃないの？」

「もちろん、私も楽しみにしてるよ」

嬉しそうにしている響と未来。心なしか頬が緩んでいる翼に比べて、約一名。唇を尖らせていた。

「あたしは全然楽しみじゃないね」

「あれあれー？ そんなこと言っちゃっていいのかなあクリスマスちゃん」

「な、なんだよ」

「だって秋桜祭が開催されたら美味しい食べ物が並ぶんだよ。食べたと思わない？」

「そりや、それはそれで楽しみだけどよ。あたしは準備があるのが嫌だって言ってるんだ」

ぶつきらぼうに会話を打ち切るクリスマスに、クラスメイト達に追いかけられていたのをしっかりと見ていた響は笑う。それに機嫌を損ねたのか睨みつけるクリスマスが突っかかろうとして、シヨツピングモールに怒声が響いた。

「な、なに？」

「響。あれ……」

「喧嘩のようだな」

翼の視線の先。派手なスーツを着たリーダー格と思わしき人物に、取り巻きの男たちが一人の男性に詰め寄っている。だが、相手は取り合う気などないのか明らかに面倒くさそうにしていた。それが尚更癪に触るのだろう、男たちは益々語気を荒げている。

ワンポイントの柄シャツに、白シャツを羽織った男性はベルトに動物の尾を模したアクセサリーを付けていた。道行く通行人も巻き込まれないように戦々恐々と避けながら通りすぎている。誰しも好き

好んで首を突っ込もうとは思わない。

「いやだからワリイって言ったろ。つか、ぶつかってきたのテメエだろうが。頭下げる筋合いねえし、つまんねーことで噛み付いてくんなよ」

「はあ？　ぶつかつたのは事実だろうが！」

「はいはいそーっすねーサーセーン」

「舐め腐ってんのかコラア！」

「反省してまーす」

明らかに謝罪の念など欠片も見取れない態度は、火に油を注いでいる。果たしてわざとなのかどうなのか。それにしたって大した胆力だ。どう見ても多勢に無勢。しかも相手はその筋の人間であるのは明らか。そんなのを相手にしてコケにしている。命知らずのバカなのだろうか。

「面倒くせえ事に巻き込まれないうちに行っちゃまおうぜ」

「そうだな。あの男性には気の毒だが、運が悪かったと……」

「あ、響。ちよつと！」

「バカ、お前何しに行つてんだ！」

「やれやれ……これも立花の“人助け”なのだろうな」

見て見ぬ振りなど出来ない約一名が一方的な口論を続けている一団に割って入った。ちよつと両者の間を分かつ壁のように両手を広げる。それに派手なスーツを着た厳つい男性は眉を寄せて睨みつけていた。

「なんだア、お嬢ちゃん」

「喧嘩はそこまでです！　落ち着いて、話しあえば分かり合えると思います！」

一瞬の間を置いて、それから男たちがひとしきり笑う。響の後ろで男性は腰に手を当てて呆れていた。

「バカなのかお前……」

「私、バカなんて名前じゃないです。立花響。十六歳！」

「立花……響……？」

その名前を反芻する男性とは別に、男達は打って変わって響を睨ん

でいる。

「すつこんで——」

恫喝しようとして顔を近づけようとする男の顔面が鷲掴みにされた。締め上げる腕力に言葉が続かず、つまらなさそうにしていた男性は今度は機嫌を良くしたのか打って変わって笑みを浮かべている。

「へえー、そうか。アンタが……」

「ああががが、が……！ テンメエ！ 離しやが」

「つせえな」

ポツリと呟いた直後、男の頭を引き寄せながら逆の手で鼻つ柱を強烈に打ちつけた。後ろに倒れる男性の身体を取り巻きが受け止める。それには目端もくれず、男性は響に顔を向けていた。

「なあ、ヒビキ。ちよつと聞きたいことがあるんだけどいいか？」

「えつ？ へあ、はい！」

状況が飲み込めず間の抜けた返事をする響が横目で見るのは、逆上して掴みかかろうとする取り巻きの男性達。伸ばした手を逆に捻り上げて、関節を折れない程度に殴りつけると蹴り飛ばした。

「テメ、喧嘩吹っかけといてナンパしておぼあつ!」

「この辺りの地理に疎いんだ。どっか美味しいメシ食べる所知らないか？」

殴りかかり、掴みかかろうとする男性達を適当にあしらいながらも響から視線は離さずに会話を続けていたが、背後から忍び寄る男には気づかない。その手には、ゴミ箱に捨てられていた空き瓶が握られていた。

「あ、危ない！」

一部始終を見ていた未来が思わず口を押さえる。大きく振りかぶった渾身の一撃を後頭部に直に受けて碎ける空き瓶の破片が地面に散乱した。その衝撃は流石に無視できなかつたのか、男性も言葉を失っている。だが、まるで頭に違和感でもあるかのように怪訝な表情で後頭部を擦ると指先に血が付いていた。

「背後からの不意打ち、なんと卑怯な！」

その非道に、翼が思わず進み出ようとするがクリスがそれを引き止

める。

「おい、やめとけつて。ただでさえあのバカが首突っ込んで面倒なことになってんだから」

「しかし」

手を振り払おうとするものの、加勢しようとする前に異変が起きた。殴られた男性はため息を一つ吐いて表情が消えている。さも億劫そうに、面倒そうにしていた。

「面倒クセエからこつちから適当にあしらつてたつてのによお」

「あの」

声のトーンを落として殴りかかってきた相手の頭を掴むなり、片腕で持ち上げてアスファルトに叩きつける。振りかぶった足が男性の頭をサッカーボールのように蹴りつけた。そのやり方はまるで、同じ筋の人間であるかのように。

「オレあな、筋を通す」だとか「仁義」だとか、そういうくつだらねえもんでメシ食つてるテメエらが太っ嫌いなんだッ！カタギに迷惑だとか、知つたことかよ」

男性は指先を広げて一人の頭を横から殴りつける。引つ張られるように、広げた指先が手短なベンチに頭を押し付けて、更に襟首を掴んで角へと更に殴打した。

殴りかかる相手の足を払い、仰向けに倒れた相手の顔面を容赦なく踏み潰す。一度だけでなく、二度三度と鼻をへし折る勢いで。胸ぐらを掴みあげて頭突きをすると今度は拳を下顎から打ち上げる。

響が止める暇もなく、取り巻きの一団は揃つて地面に倒れて苦悶に呻いていた。

「てめ……なにもんだ……」

「六道絆。覚えなくていい。それともなにか？ 記憶なくなるまで頭潰されてえか」

「六、道……？ 六道つて、テメエまさか——！」

「ふんッ！」

派手なスーツを着た男性の頭を蹴りつけて、更に踏みつける。それで気が済まなかつたのか今度は身体を持ち上げてゴミ箱に頭からぶ

ち込んだ。両手を叩き汚れを落とすと深々と息を吐く。喧嘩を売られて困っていたのではなく、ただ単に、本当に、真正正銘、徹頭徹尾面倒くさいの一言で済ませられる程度のことだった。相手が頭のおかしい奴だと諦めるまで粘るつもりだったのだろう。

「いや、ワリイ。まさか誰か助けに入るなんて欠片も思っただけじゃなかった。飯屋はいいや、手前の脚で探すからよ」

「えつとー……、頭！ 大丈夫ですか？」

「あー、ちつと自信ねえな。どっちの意味で」

「殴られてましたけど」

「いや別になんとも」

髪に絡んだビンの破片を落としながら、六道絆は改めて立花響を見下ろす。

「響、大丈夫？」

「未来。うん、全然だいじょーぶっ！」

「でも……」

未来が響の袖を掴んで引いていた。先程の喧嘩を目の当たりにしていたのだから、当然の反応と言える。だからこそ、六道絆はこれ以上その場に長居する気はなかった。

「喧嘩があったというのはココですか？」

「は、はい！ あの人が」

「つと、ヤツベ。通報されちゃったか、ワリイなヒビキ。機会があったらまた今度な！」

「あの、名前！」

「バンだ！ んじゃあな！」

言い終わるかどうかの間に既に駈け出していた六道絆は既に手短な足場を踏み台にして建物の屋上へと消えている。

「猿かよ……すげえ運動神経だな」

それを見ていたクリスの率直な感想に、翼は顎に手をやって何か考えている様子だった。

（先ほど、あの男……六道と名乗ったのか？ 輪廻六道……それに）

名前を聞いた途端、あの暴力団関係者の狼狽えよう。もはや、と思

う翼は既に見えなくなった背中を目で追った。

Tr. 6 食事に人種制限設けなし

六道絆は警察を自前の脚力で撒いてからのんびりと買い物を通り過ぎて廃病院へと戻ってくる。そこでは相変わらず待機しているF. I. S. がお腹を空かせていた。

「いや、ワリイワリイ。ちっと面倒事に巻き込まれて遅くなっちゃった」

「夕飯を買いに行くだけでこんなに遅くなるなんて、何をしていたの」

「喧嘩売られてな。ま、軽く殴ってきたから大丈夫だ。おい、シラベー、キリカー。メシ買ってきたぞー」

「待ちくたびれてお腹ぺこりんこデス！」

「お腹空いた……」

「いやー、先にメシ食ってたらどうするか考えてたけど心配なかったな。ほれ」

レジ袋から取り出すのはスーパーで買い込んだコロツケ。個別包装されたまだ温かい二つを調と切歌に手渡し、もう一つは自分の口にくわえる。マリアにも差し出す、気に召さなかったようでそっぽを向いていた。

「いらひえーの？」

「いらないわよ」

「食えるときに食べとかなないとやってけねえぞー、この先」

「貴方に何が分かる！」

「なんも？　ただ腹減ったら人間なんも出来ないってことぐらいはオレにもわかる」

「……」

「これから先、どう立ち回っていくかはアンタら次第だが」

レジ袋とはまた別な袋。ファーストフードチェーン店の袋からハンバーガーを取り出すと差し出す。

「一緒にメシ食う時くらいは、国境も人種も立場も関係ない。オレあそういう面倒くせえの嫌いなんだ。米国トップアーティストでも腹

は減るだろ」

「それは、そうだけど」
くう。

小さく鳴るお腹の音に、マリアが顔を赤くしていた。それに六道絆は笑ってハンバーガーを渡した。セットで買ってついてきたポテトをつまみ食いしながら切歌と調にそれぞれ差し出す。

「おーい、ウエル博士。ハンバーガー食おうぜ」

「僕もですか？ どうせなら日本食を口にして見たかったものです」

「あー……そうだな。やっぱり寿司とか？」

「そうですねえ。やはり一番代表的な物ですから」

「んじや覚えてたら次行った時にでも買ってくる。今は食おうぜ」

「そういうことでしたらありがたかったですよ」

ナスターシャにも身体に配慮したものを手渡して、六道絆はポケットの通信機を手にして着信を確認する。

「もひもひ？」

コロッケを食べつつ、ハンバーガーを手にながら肩で無線機を挟んで切歌と調に飲み物を一緒に渡す。

《ロック。今なにを？》

「めひ食ってる」

《それはすいません》

「手短に済ませてくれるか？ リード」

アインフェリアルトップの名前を聞いて思わずマリア達の手が止まった。その次に出てくる言葉を聞き逃さまいと聞き耳を立てる。

《日本で貴方の行動をサポートするためにこちらから何人かの兵力を送らせていただきました》

「そりやどうも」

《ベルも直にそちらに到着予定です。彼女と上手く連携してくださいね》

「へいへい」

《ああ、それとヴェオも同行しています。こちらも多少落ち着いたらそちらへ移動する予定です。武装組織フィーネの皆様によろしく

言っておいていただけますか?」

「あいよー。それじゃな」

通話を切るなり、手にしていたハンバーガーを平らげる六道絆は余りのコロッケを頬張っていた。ナスターシヤの手にも惣菜パンが握られている。

「それで、アインフェリエルのボスはなんと?」

「サポートとして何人か日本に送ってくれるってよ。本人も近いうちに来るそうだが」

ポテトを頬張りながら六道絆はまるで雑談のような気軽さで流した。だが、マリア達の表情は険しい。アインフェリエルが本格的に協力する形で動くともなると、こうしてのんびりもしてられないのだろう。それはそれで面白くないのは、六道絆の方だ。

「あんまり本腰上げられて動かれてもオレがやりにくいんだけどな」

「どうしてデス? 仲間じゃないんデスか」

「名前だけならな。確かにオレはアインフェリエルのメンバーとして扱われているが、実際のところフリーだ」

「貴方、何が目的なの」

「別に何も? 基本的にその日暮らしでね。その日良けりやそれで良しなんだ。明日のことなんて考えてもねーよ」

「刹那的なんですな」

「まーな。こんなんだからダメなのは分かっただけだな。これでも社会復帰したのはつい二、三年前なんだ。シンフォギア装者になったのはここ三ヶ月以内」

本当にごく最近の話。それにマリア達は驚きを隠せない。

「ちよ、ちよつと待つデス。じゃあ何か特別な訓練とか受けてるわけじゃないんデスか!」

「別に」

「……それで、あの身体能力?」

「数年ほど山奥で過ごしてただけだ」

山ごもりしていた理由については敢えて深く問わないが、それでも装者に追いつくだけの運動能力は明らかに異常だ。特別な訓練を積

んできたわけでもない相手に足取りを掴まれた。自分達の甘さが露呈した結果となるが、マリア達はその現実に目を逸らす。六道絆は腐ってもテロ組織アインフェリアルメンバーなのだと思い知らされる。末端のメンバーであつてもこれだけ心強い戦力を保有しているのだから、あながちシンフォギア装者三百名の話も嘘ではないのかもしれない。

特異災害対策機動部二課仮設本部——リディアン音楽院の地下深くに建設されていた日本における認定特異災害へ対抗する最前線の拠点は、ルナアタック以降、組織としての機能を新型潜水艦へと移設していた。以前に増して秘匿性、機動性が向上した仮設本部では司令官である風鳴弦十郎が三日前の武装組織フィーネによる宣戦布告がもたらす世界情勢の動向を見守っている。

そこへ翼から通信が入った。

「どうした、翼」

《司令。六道という名前に聞き覚えはありませんか》

「六道……？ それがかどうかしたのか」

《実は先日、そう名乗る男性と会ったのです。輪廻六道巡る絆、六道絆と》

「分かった。こちらで調査してみよう」

オペレーターの二人に片手間でも検索させると、すぐにヒットする。それもそのはず。その筋では有名所も良いところだ。

「関東最大勢力の菩薩組……天下泰平、六道会の会長が六道銅玄（どうげん）。六道絆はその孫ということになるな」

「これはまた、とんでもない厄ネタですね。六道絆は言わば裏社会のサラブレッドですか」

藤堯朔也がボヤきながらそのデータを眺めていく。

「十年前のノイズ犠牲者の中に彼の両親の名前が載っていますね」

「それだけじゃありません。海外でのノイズ被害者にも彼の名前が

……八年前と、六年前に。以降は行方不明となっていますね」

《つまり》

「ああ。六道絆は、生まれついでこの極道だ。あまりそんな輩と仲良くされるのは、こちらとしても好ましくないな」

《ええ、分かっています。叔父様》

「六道絆の件はこちらでも追って調査してみる。何か分かったら後ほど知らせよう」

《はい。ありがとうございます》

調査を進めていくと、やはりその痕跡は途切れていた。

「六道絆。年齢は二十四。十年前のノイズ被害において両親の六道願蔵と六道霧江が他界。それからは世界各地を転々としていますね。何度か口座を使用した形跡が見られます」

「ですが、それも六年前から痕跡無し。むしろ、当時十四歳の少年が今までどうやって生きてきたのが気になりますね」

「天涯孤独の身で世界旅行か。大した胆力だ。だが、何故今になって戻ってきた……?」

武装組織フイーネの蜂起を見計らったかのようなタイミングでの帰国。六道絆からすれば十年ぶりの日本。何の意味があるのかと弦十郎は思案する。——それがもしや、ただライブを見たいが為であるとは思ってもよらないだろう。

Tr. 7 集うヴァルハラ of 戦士達

弦十郎は休憩がてら、コーヒーを注いだカップに視線を落としていた。

特異災害対策機動部二課設立が前後する十年前。それより以前、公安局警察として活動していた自身と決して無関係とは言えない組織。

菩薩組——六道銅玄の孫、六道絆。反社会的な組織とすればそれまでだが、やりきれない思いがあった。十年前に両親が殺害されただけでなく、以降も度々ノイズに襲撃されている。被災者のリストに名前が載っているということは国連からも保証金が支払われている事なのだが、裏社会の人間である以上は資金洗浄もお手の物だろう。虎の子は虎でしかないのだから。

(しかし、気になるな……)

六道会唯一の跡取り息子が、世界を放浪して行方不明。のみならず、テロ組織「フイーネ」による武装蜂起とタイミングを同じくして帰国。これが偶然の一致だとすれば、あまりにも過ぎた偶然だ。目を光らせておくべきだろう。

六道絆はインフェリアルからの連絡により移動していた。自分が本来尽力するべきは、こちらの組織。テロ組織「フイーネ」ではない。あまり日本国内を出歩くのは望ましくないもののボスが言うなら従うだけだ。それはあくまでも「組織の人間」ではなく、友人として。上下関係で縛られる友情など願ひ下げだ。

外出して顔が割れるのはあまり好ましくない。自分はその筋で名が知られている。もしも祖父の耳に入ることがあれば——どんな手を使ってでも自分を連れ戻そうとするだろう。それだけは勘弁してほしいが、袂を分かたつ為には良い機会だ。

本人はその気が無くとも、少々近寄りがたい形相になっていた六道絆へ近づくと女性は、上下共に男性物のスーツで固めている。手にはキャリアバッグを引いていた。

「ああ、ちよつとロツク。何よ物騒な顔して」

「あー？ うるせえな」

「ていうか何そのメガネ？ 似合っていないんだけど」

「オレもそう思う」

「クソダサイわよ。何処で買ったの」

「オレが知りたい」

——外出するのは勝手だが、自分達と接点がある人間の顔が割れるのはあまり快くないと言ったナスターシャに、調と切歌の二人が六道絆に渡したのは銀縁フレームのメガネ。度は入っていない伊達眼鏡ではあるものの、効果があるかどうかと聞かれたら首を傾げる。聞けば、この眼鏡には特別な力がこもっているらしく、「つけていれば絶対にはバレないデス！」……そう胸を張って言っていた二人に「いやそんなはずねーだろ」と大人特有の辛く哀しい現実を突きつけるのは非常に憚られたのでありがたく頂戴した。——というわけなのだが、これがまた絶望的に似合わない。どうせならウエル博士の眼鏡が欲しかった。いつそこうやって待っている間にグラサンの一つでも買ってくれば良かったかもしれない。

「オレの事はいーんだよ。それで？」

「私以外にも何人か日本入りしてるわ。これで日本での活動も視野に入ったと言えはいいかしら？」

「あつそ。リードはいつ日本入りするんだ」

「そうね。向こうでまだ『ボランティア活動』が残ってるそうよ」

「胸糞悪くなるほどの慈善家ですこと」

仮にも、組織のトップに対する口の悪さにベルが眉をつり上げるものの、この二人の仲の良さを知っているだけに複雑な心情で吐息を漏らした。

「あれから三日。「ファイネ」はやる気あるの？」

「オレに聞くな。どうだろうと関係ねーだろ。やりたきやそつちで勝手にやりやいいじゃねーか。むしろこつちが勝手に口を出したせいで動きにくくなってるんじゃねーの？」

「……貴方、ペンダントは？」

「預けた」

「預けたあ!? なに考えてるのバカ!」

「うっせえな! いいから行くぞ」

「あ、待ちなさい!」

キャリーバッグを重そうに引きずるベルに、六道絆は引つたくるようにバッグを担ぐと先を急いだ。アップにしてまとめたブロンドの髪を手櫛で整えながら、ベルは周囲を見渡しつつもついて来る。まるで子犬のように落ち着かないベルの様子に六道絆は眉を寄せた。

「キョロキョロしてどうした」

「……日本に来るの初めてなのよ、悪い?」

「お前日本語ペラッペラなのにな?」

「うるさいわね」

唇を尖らせるベルは表情こそクールを装うが、初めて訪れる日本に内心浮き足立っている。それをつまらなさそうに見る六道絆は嘆息しながらアインフェリアルが用意したアパートへ移動する道すがら、黙ってるのもつまらないので有る事無い事吹き込んでやろうかと思っただが、ベルに先手を打たれる。

「ああ。それと、ヴェオも一緒よ」

「ほー。んで? アイツはどうした」

「一人で勝手にどっか行っちゃったわよ。ま、大丈夫でしょ。貴方より賢いし」

「オレより強いしな。ま、ヴェオなら大丈夫か。気が向いたらこっちに駆けつけてくれるだろ」

「……ねえ、突っ込まないの?」

「オレより賢くて強いのは事実だ。それで、これからどうするつもりだ」

「そうね」

考えこむ素振りを見せるベルは、指を立てる。

「まずは拠点に移動」

「アパートな」

「それから当面の物資を確保」

「買い物な」

「余裕があつたら周辺地域の視察かしらね。地理情報は大事だし」

「観光な」

「もー!!」

頬を膨らませて抗議してくるベルを無視して先を歩く。口では真面目ぶっているが、結局は日本観光が楽しみで仕方ないようで安心した。六道絆はズレて落ちてくる眼鏡を指で直しながら本格的にグラサンの一つでもついでに買ってこようかと思悩む。しかし、せっかく調と切歌が用意してくれた眼鏡、その厚意を無下にするのも頭を悩ませてくれる。物悲しそうな二人の顔を思い浮かべると心が痛むものの背に腹は変えられない。

結局、ベルと一緒にデパートでグラサンを購入することにした。

日本での活動を行うための下準備も含めてベルは暫くの間テロ組織フィーネとの接触は控えるらしく、当面は任せるらしい。

——フィーネの武装蜂起から、一週間が経過した。ほぼ、何事も無く過ぎたこの日々は六道絆と暁切歌、月詠調の仲が良くなつたくらいなものだ。同性のよしみとして、ウエル博士ともそれなりに仲良くしているが、取り立てて懐いているのは調と切歌の二人。マリアは相変わらず不信任が拭えないまま距離を置いていた。ナスターシャもまた、六道絆をただの戦力としか見ていない。緊張感のない男ではあるが、何かとアクティブなおかげで情報収集に役立つている。しかし自分達の計画の加担者である一方で、その実態はテロ組織アインフェリアルメンバーだ。あまり計画の全容を明かさすわけにいかない。本人がそれに無頓着であるのは助かっている。

アインフェリアル構成員が既に日本入りしているが、それもまた報告のみに留めて互いの接触は避けていた。と、いうのも六道絆がそれにあまり良い顔をしなかったからである。お互い好き勝手すればいい——とは六道絆の言葉。つくづく自由奔放な男だ。

「ああ、ミスター。ちよつとよろしいでしょうか？」

「ん？ なんだい、ドクター」

「ナスターシヤ達が視察に出向いている間、僕の護衛をお願いしたいのです。こちらに荒事の予定はございませんが、万が一に備えておきましよう」

「オレは別にいいぜ」

何の視察に出向くのか、とは聞いてこない。それにウエル博士は内心安堵していたが、六道絆は目を細める。

「……若干、嘘臭えな」

「はい？」

「別にマリア達が何の視察に行くのかは、まーそちらさんの都合だから聞きはしないけどよ。オレにはどうでもいいか、護衛は引き受けた」

「まさか、嘘を吐いて何かあるとでも？」

「いいや別に？ 気のせいだろうよ。そういう臭いがしたもんでね」

(犬じやあるまいし……)

「それでマリア達は」

「彼女達なら入浴中ですよ」

「そうか」

待機していたナスターシヤにのど飴を手渡し、暴れだしたネフィリムに慌ててマリア達がシャワールームから出てきた。だが、既に隔壁を下ろして対処は済ませている。

「では、ドクター。私達は視察に出向いてきます。時間までには戻ります」

「ええ。こちらは僕とミスターにお任せください」

「そのミスター、って呼ぶのやめてくれねえかな。そう呼ぶくらいならロックって呼んでくれ」

「分かりました」

「おっと、その前に。ほら」

六道絆がポケットから取り出すのは、やはりのど飴だった。毎回毎回よくもまあ出てくるものだと感じしながらマリア達のはのど飴を受け取り、快活に笑う六道絆に手を振って見送られる。調と切歌はそれ

に手を振り返してヘリキャリアへと乗り込んだ。

その姿が見えなくなつてから、六道絆はモニターの向こうでうごくまっつているネフィリムに視線を向ける。

「……完全聖遺物、ねえ？ あのぶっさいくなオオサンショウウオが。何の役に立つんだか」

「アレは、我々の計画に必要な虎の子なのですよ。ロック」

「それで。アンタは何を企んでいるんだ？ ドクターウエル」

「そうですねえ。貴方の装者としての実力を試させていただきましようか」

「ほーん……そういうこと。なら、マリア達を遠ざけたのは正解だ。本当ならヴェオの奴も一緒だと心強いんだがね。で、相手は？」

「ルナアタックの英雄たち……とでも言えればいいでしょうか」

「そりや楽しみだ」

Tr. 8 獣よ、ひた叫べ。貴方は生きているのだから

マリア達が廃病院のアジトを後にして、残された二人は撒いた餌に獲物がかかるのを静かに待っていた。

「ああ、忘れる所でした。こちらをどうぞ。貴方から預かっていたシンフォギアです」

ペンダントを受け取り、六道絆は首から下げてすぐに隠す。

「ドクター。オレのシンフォギアなんだが、癖が強くてな。コイツを使う時は、出来るだけオレから離れておいてくれ」

「もちろんです。ベルセルク——伝承にある通りならば見境なく戦闘を行う狂戦士。名前通り、狂ったように戦うのでしょうか？」

「まあな。オレからすれば、コレは単にノイズに対抗できるだけって代物なんだがね。人間相手に使う物じゃねーよ」

「気は進みませんか？」

「そりゃあな。ま、英雄に殺される化物役がせいぜいいい所だ」

あまり期待しないでくれ、と付け加えながら六道絆はのど飴を取り出して口に放る。もう一個取り出してウエル博士に差し出すと、やりわりと断られた。

警報が鳴り出し、静かにアラートが鳴り出す。監視カメラに映し出される侵入者の中には立花響。のみならず、風鳴翼までもが居た。もう一人、銀髪の少女は確か響達と一緒にいたような気がしないでもない。なんせ、気に留めなかった。

「おや、思ったよりも早いご到着のようだ。では、おもてなしといきましようか」

ウエル博士がコンソールを操作して、謎の気体を散布する。赤錆色の煙幕が侵入者のエリアに充満していく。それを眺めてからウエル博士はソロモンの杖を携えてモニターに背を向けた。六道絆もそれを一瞥してから後に続く。

「さっきの煙幕はなんだ？」

『Anti-Linker』。適合係数を低下させる、僕の発明品ですよ」

「ま、科学者が正面から戦うわけねーわな。うちの口うるさいフランス人じゃあるまいし」

「正確には、生化学なんです。貴方には関係のない話ですか」

へぷちよん！——都内某所のアパートでクシヤミをするフランス人女性が一人。

「アジトが割れてしまった以上、ここに長居は出来そうにありませんね」

「どの口が言うのやら」

肩をすくめながら六道絆は口の中で転がしていたのだ餡を噛み砕いた。

そして、立花響、風鳴翼、雪音クリスの三人はウエル博士と対峙する。その思惑通りに引つ掛かってしまった経緯は六道絆からすれば、特に興味のない話題だった。

「……バン、さん？」

「よ、ヒビキ。また会ったな」

「貴様も「フイーネ」に連なる者か、六道絆！」

「そうおっかねえ顔するなよ、風鳴翼。ツヴァイウィングの頃からアソタのファンなんだ」

シンフォギアを纏った三人を前にしても、いつもの調子は崩さずに歩み寄る。それに響が構えるも、相手が人間というだけありすぐに構えを緩めた。ソロモンの杖によって召喚されたノイズ達を間近で観察しながら、飄々とした足取りで先頭へ出る。

「んでー、あー……そつちのは誰だ？」

「あたしの事はどうだっていいだろ！ テメエもウエル博士の仲間か！」

「彼女は雪音クリス。岩国基地まで僕を護衛してくれた一人です」

「そうか。よろしくな、クリス」

「なに馴れ馴れしく、挨拶してんだ……!」

ウエル博士の散布した「Anti-Linker」が効いているのか、肩で息をしていたクリスがガトリングを向けていた。

〈聞こえるか、翼。響くん。クリス。そこに六道絆がいるのか？ 可能なら確保だ。出来るか〉

「尽力します、司令。立花、雪音」

「はい!」

「くそ、やってやらあ!」

アームドギアを持ち上げるクリスを、響が手で制する。

「待って、クリスちゃん! あの人、普通の人間だよ!」

「だったらなんだよ! こっちは加減なんかしてやれねえぞ」

「いや、銃火器に手加減もクソもねーだろ」

「テメエは冷静にツッコミ入れてんじやねーよ!」

赤と白のシンフォギアに身を包むクリスが、両腰のアーマーを展開した。その台座に装填されているのは小型のミサイル郡。

「死なねーくらいにテメエで、避けやがれえええツ!」

「メツチャクチャ言ってくれんなあオイ!」

白煙を上げながら発射されるマイクロミサイル郡とほぼ同時に六道絆はその場から飛び退いた。すぐ背後にはウエル博士の操るノイズの群れ、当然ながら触れば即死だ。壁に向かって跳躍し、更に壁を蹴って天井を伝うパイプを掴んでノイズ達の背後に隠れる。一発だけ正確に狙って来ていたが、ソロモンの杖によって六道絆を庇って直撃を受けた。

爆風と衝撃、そして震動。間を置いた静寂、廃病院の一面はクリスの『MEGA DEATH PARTY』によって開放的な空間へと様変わりしている。しかし、『Anti-Linker』による適合係数が低下していることにより伴うバックファイアにクリスが悲鳴を上げた。

「いや、ワリイなドクター。助かった」

「真面目にやっていただけですか」

「これでもそれなりに真面目ぶってるんだけどね」

肩をすくめて見せる六道絆に、ウエル博士は眼鏡を直して不信感の色を含ませた目で睨む。

「僕は、貴方のシンフォギア装者としての實力を見せていただきたい。そう言ったはずなのですがね?」

「そう言われた気がするんだがね、どうにもこういうのはオレの主義に反するらしくあんまり乗り気じゃねーんだわ」

「……司令。今の言葉」

《ああ。ウエル博士ともども、何が何でもその男を確保しろ!》

「分かりました」

クリスに肩を貸していた翼がその場にゆっくりと座らせると、刀を向ける。響もまた、それに気乗りしない様子だったが、やはり構えていた。きつと話せば分かってくれる。拳を交えずともに手を取ってくれるはずだと。

「あの、バンさん。私——」

「やりたかねえって言いたいんだろ? オレも正直遠慮したい」

「それじゃあ」

「助けてもらった借りもある。だが、それとこれとじゃ話が別だ」

「ツ……!」

既にノイズは全滅している。残るのはウエル博士と六道絆だけ。それに乗じてその場から離脱を謀らせていたネフィルムも飛行型ノイズによって洋上へと既に退避している。響がそれに気がついた。

「翼さん!」

「分かっている! だが」

「ん? あのサンショウウオ追っかけるなら行っていいぜ、風鳴翼。出来ればアンタと戦いたくねーしな」

「……何が目的だ! 我々の邪魔をする気がないならば退いてもらおうか!」

「強いて言うならアンタの新曲が楽しみみてくくらいか。いいから行けよ、背後から襲ったりしねーさ」

「翼さん。私に任せてください」

「その男は任せたぞ、立花!」

翼が駆ける。六道絆の横を駆け抜けて、ウエル博士の横を通りすぎて——素通りする。天羽々斬の機動性ならば追いつけるはずだ。一瞬だけ背後を盗み見るが、六道絆は後ろ手を振って響と睨み合っている。読めない相手の動きに戸惑いながらも、今は空輸されるネフィリムの奪還が先決だ。

「……何のおつもりですか、ロック」

「何のつもりもどーもこーも。オレは協力者。そっちの不始末拭う理由が無いってだけさ。だけどアンタの望み通りに見せてやる」

肩をすくめて、響に歩み寄る。クリスも加勢に入りたいところだが、まだバックファイアのダメージに膝をついていた。だがそちらに手をかける気など無い。今この状況で戦闘可能なのは立花響だけだ。

「気張れよ、ヒビキ。オレのシンフォギアは、メチャクチャ使い勝手悪いんだ——」

拳を掌に打ち付けて六道絆は肩を慣らす。

「お前がどうなるかなんて、手加減なんてしてやれねえぞッ！」

次いで、咆哮——それは雄叫びにも似た獣の咆哮。開戦の狼煙。当然ながら、そのアフヴァアツヘン波形は二課でも明確にキャッチしていた。

そして、アインフェリアルも同じく反応を捕捉している。

「……ちよつとロック。なんで貴方がベルセルクを起動してるのよ？」

アパートの一室で部屋の灯りを点けずにパソコンとにらめっこしているベルは、キーボードの脇に置いていた緑茶に手を伸ばして一口だけ含む。間髪入れずに現地の仲間からの通信——急を要する事態なのか慌ただしい。

「こちらベル。どうかした？」

《ベル様ですか！ ヴェオを発見したものの、我々では止められず——》

「ああ、いいわよ放っておいて。どうせロックのところに行くんでしょうから」

《しかし……》

「あの二人を相手に止められるはずがないでしょ。私達が。だから好きにやらせておきなさい。どうせリードも同じことを言うわ。いいわね」

《……わかりました》

椅子の背もたれに体重を預けて、テーブルの上に山のように乗せられた日本食を眺めてベルは頬に手を当てた。

「……買い過ぎたかしら」

パソコンのモニターに表示されているタイマーには一瞥もくれず、アインフェリアルノ異端技術の長はどれに手を付けようかと迷う。

Tr. 9 咆哮。疾駆。絶叫

「ガッ、アアアアアアアオオオオッ!!!」

「――!」

荒れ狂う衝撃に、暴風から身を守る響の目の前で六道絆は豹変する。装者のペンダントがエネルギーへと分解されて、再構築。身にまとうフォニックゲイン式回天特機装束として――シンフォギアを纏う。そのはずだ。その、はずであるが……。

黒いエネルギーに身を包まれていく。その内側から形成されていくアンチノイズプロテクターは、四肢の末端にこそ獣のシルエットを髣髴とさせる籠手と脚甲を纏うものの胴体はがら空きとなっていた。しかし、一番に響が目に入ったのは、頭部を覆うヘッドギア。顔の上半分を隠すようなバイザーにピンと立つ二対のアンテナユニット。それは、まるで狼の毛皮をかぶっているかのように。

その様は、シンフォギアに身を包むよりは、内側から形成していく“と言うべきかもしれない。そして、響もまた、その様子を見て既視感に襲われる。

「……暴、走?」

うめき声を上げながらその場に膝をつく六道絆に、響が歩み寄ろうとした瞬間に鼓膜を打つのは弦十郎からの叱咤の声。

《下がれ、響君! こちらで波形パターンの照合が完了した! ベルセルクだ! バーサーカーと言っていい!》

言い終わるか否かの刹那の際、響の直感が僅かに頭を下がらせる。次の瞬間、鼻先の数ミリ先を六道絆の“爪”が通り過ぎていった。

それは自分のように「誰かと手を繋ぐ」ことを否定するかのような、獣の腕――バイザーに覆われていない口元は、明らかに笑みを浮かべていた。

「ッ……!?!」

その場から脚のパイルバンカーを使って即座に離脱する。距離を離して様子を見ようとしたのだが、それよりも先に咆哮しながら六道絆は駆け出していた。愚直なまでの一直線、それに合わせたカウン

ターの正拳。捻りを効かせた一撃は、掠めるだけに留まる。

「暴走、じゃない!？」

六道絆の咆哮は、まだ続いていた。突き出した拳を戻すより先に顔を鷲掴みにされて地面に叩きつけられる。衝撃に呻く暇もなく足を掴まれた響は片腕で振り上げられて再度地面へ投げつけられた。なんとか、道路に拳を打ち付けた事で直撃は免れたものの足を掴まれている状況は変わらない。

宙ぶらりんになっていた響が六道絆を逆さまの姿勢から睨み上げる。それにますます機嫌を良くしたかのように笑みを浮かべると、今度は真横へ全力で投げつけた。そのモーションからクラウチングスタートへ流れるように移行して、「四足」で駆け出す。

爆発的な瞬発力で一度は離れた距離をすぐさま縮まる。

「ツうー!」

脚部のパワージャッキを稼働。脚を掴もうとする腕を蹴り上げると同時に、その反動で空中で回転しながら地面を滑って体勢を整えた。腕を跳ね上げられた六道絆は衝撃に痺れる腕を振ると再び駆け出す。響のようなパワージャッキによる爆発的な加速ではない、それは六道絆の身体能力の延長、それ故に地面に接地した瞬間から慣性をねじ伏せてでも対象への接近を可能とする。だが、整息した響はその一定のテンポに呼吸を合わせていく。

「そおこ、だアッ!!」

完璧な迎撃。六道絆の大ぶりの一撃は敢え無く空振りに終わったかに見えた。正面から頬面に受けた響の崩拳に振り上げた脚を絡ませる。生え並ぶ獣の爪がプロテクターに噛みつき、引っ張りながら不意打ちで体勢を崩した。たたらを踏んだ響の眼前には指を広げた爪が迫る。

顔を引き裂くのは容易であったはずなのに、六道絆は頭部を鷲掴みにするとクリスに向けて響を全力で投げた。傍観していたクリスにしてみれば、完全に虚を突かれた形となって二人一緒に道路を転がる。

「へっ? うおわああああ!？」

「アイ、タタタあ……ごめんクリスちゃん！ 大丈夫!？」

「アタシは平気だけどよ……なんだよ、あのバカみてえな出力」

暴走状態に見えて、響の攻撃を間一髪で見切る回避能力。瞬発力の強化に加えて、ダメージが見られない。爪を鳴らして、口腔からは白い吐息が漏れている。今までに類を見ないシンフォギア——ベルセルクに、響が立ち上がった。

右腕のプロテクターをマニュアルでスライドさせる。

（大体、アームドギア形成してんのかアレ？）

クリスが再び響とぶつかり合う六道絆のベルセルクを観察している一方で、飛行型ノイズを追跡していた翼は急速浮上した二課仮設本部の援護を受けて撃破に成功していた。そのままネフイリムの奪還になるかと翼が手を伸ばした、次の瞬間——どこからともなく黒いガングニールが飛来してあと一步のところで翼を弾き飛ばす。

そして、同時に響のアームドギアの一撃とクロスカウンターになる形で殴り飛ばした六道絆がウエル博士の元まで吹き飛ばされた。

「お、おい大丈夫かよ!？」

「私はへいき、へっちゃら！ バンさんは——」

ベルセルクという爆弾が突然真横に転がり込んできたウエル博士がソロモンの杖を向けるが、立ち上がった六道絆は身体を傾けたかと思っただ次の瞬間、シンフォギアを解除している。その場に膝をついて肩で呼吸を整えていた。

「ハア、ハア——ツ、くっそ。時間切れか……」

「どうされたのですか。今一步のところまで追い詰めておいて、シンフォギアを解除するなど」

「ばっきやろい、これ以上シンフォギア使ったらオレの理性が保たねえんだよ。あと、喉」

「のど……」

素っ頓狂にオウム返しするウエル博士に見せるようにポケットへ手を入れて、何を取り出すかと構えたクリスと響の前で六道絆はのど飴を口の中に放り込む。一転して緊張感の抜けた仕草に間の抜けた響とクリスに、両手を挙げた。

「オレのシンフォギアは九十秒しか使えねえんだよ。だからコレ以上は勘弁だ。白旗上げさせてもらおうぜ?」

「……なるほど。時間制限付きで、あの過剰な出力ですか」

見たところ『LINKE』も使用している形跡はない。のど飴も市販されている品だ。加工の施しようがない。それは四六時中目を光らせて確認している。

流石に分が悪いと見たのか、ウエル博士も両手を上げて降参の意思を示した。

浮上した二課仮設本部の上部甲板では翼と MARIA が戦闘を繰り広げている。それを眺めていた六道絆の頭にクリスがボウガン突きつけた。

「変な真似すんじゃないぞ、テメエ」

「するわけねーだろ。のど飴いるか?」

「いらねえよ!」

「なんでえ。ヒビキ、のど飴やるぞー」

「えっ、本当ですか! ありがとうございます!」

「素直でよろしい」

「オメーは何なんだよ!? どっちの誰の味方でしたっちゃんじゃねーか! っっていうかやつぱアタシにもものど飴よこせよ!」

「オマエは素直じゃねーな」

響にはオレンジ味、クリスマスにはさくらんぼ味ののど飴をそれぞれ渡すが、拘束される。

「ダメか」

「ダメにひまってるんひやろうーが!」

「せめてのど飴舐め終わってから言え」

この生来の緊張感の無さはどうにかならないものかと、甲板で戦っていた翼と MARIA の思惑は一致していたが、六道絆の生んだ気の抜けた場の空気を切り裂く無限軌道。そして死神の刃によってウエル博士とソロモンの杖は再び響達の元から奪取された。

「時間通りですよ、二人とも。さて、ロックはどうしましょうか」

「……私と切ちやんだけじゃ、ドクターが精一杯だけど」

「そ、それはだめデス！ バンさんも一緒が」

「キリカ」

六道絆が切歌に向けて放るのは無線機と音楽プレーヤー。そしてインカムの三つ。

「それ持ってとつとと行け。こっちは任せろ」

「でも！ ……、調」

「うん」

「またな二人とも」

気の抜けた手の振り方に、調と切歌の二人はステルス機能で隠れていたヘリキャリアから垂れるロープを手にして上空へ去って行く。その後を追おうとする響の前に六道絆は立ち塞がり、クリスは過去の遺恨からその脇を抜けてイチイバルを変形させる。長距離狙撃型ライフルのスコープを覗くクリスだったが、そのバイポッドを六道絆が蹴倒した。照準がブレた矢先でヘリキャリアのシグナルをロストする。

「テメ、邪魔するんじやねえ！」

「今はシンフォギア纏えないのはマジだが、それとこれとじや話がまた別でな」

「このヤロウ——」

逆上するクリスが六道絆に銃を向けようとするが、二課がさらなる接近してくる生体反応をキャッチした。その反応はまっすぐに響達に向かっている。

《接近する反応があります！ 接触まで、もう間もなく！》

「次から次へと、なんだってん——だあああ!?!」

Tr. 10 挑み、護るもの。挑まれ、護られるもの

武装組織フイーネは六道絆の妨害により取り逃がし、相手方の消息も不明。二課の収穫と言え、六道絆を確保できたこと。

現在は二課仮設本部の潜水艦に拘束された状態で連行される——のだが。その隣、響と翼、クリスの三人が困惑した表情をしていた。「……」

六道絆を挟んだその隣に並ぶのは、一頭の狼。だが、そのサイズは大型犬の中でも規格外だった。それがあまりにあんまりな巨体であり、クリスは一度襲われている為か警戒している。

「ク、クリスちゃん……」

「雪音、大丈夫か」

「なんでアタシばかりこんな目に遭うんだ……」

さすがにシンフォギアを破壊する程の力は無かったが——というよりは、戯れついてきただけかもしれない——その迫力に気圧されて二課所属の装者達は戦々恐々としていた。今はおとなしく六道絆の隣に並ぶ巨大な狼、その毛並みから犬種がシンリンオオカミに近いものであると分かる。全高は二メートルにも及ぶであろう巨大な狼を従えて、六道絆は二課仮設本部の一室で待機していた。

それから間もなくして、弦十郎を連れて響達が戻ってくる。

「俺は風鳴弦十郎。特異災害対策機動部二課の司令だ。さて、六道絆。お前さんには聞きたいことが山ほどある」

「答えられる範囲で良ければ答える」

足元で伏せている狼が耳を立てて立ち上がった。それにクリスがたじろぐが、響は目を輝かせている。

「わあ。でっかいワンちゃんかわいいなあ〜！」

「犬じゃねえ、オオカミだ！」

「ワオン！」

「ひいッ!? ごめんなさい！」

まるで六道絆の言葉に賛同するかのようにつける巨大な狼は、しかしそれだけだった。隣で座り込んでジッと待機している様を見つめ

る響に、六道絆は名前を呼ぶ。

「ヴェオ。オマエが良けりやしばらくヒビキ達と一緒にいたらどうだ？ オレは司令と話してるからよ」

「わおう」

名前を呼ばれて、答える狼——ヴェオは尻尾を振って響達の前まで歩み寄ると座り込んだ。それに恐る恐る響が手を伸ばして頭を撫でてみる。固い毛並みではあるが、その毛量のボリュームは癖になりそうな触り心地をしていた。特に、首周りはまるでぬいぐるみか毛布のような心地よさに響が笑みを浮かべて目線の高さを合わせてひたすらに撫でる。

「うわあ、すっごいフサフサ！ クリスちゃんも翼さんも触ってみてくださいよー！」

「い、いや私は遠慮しておこう」

「アタシも遠慮しとく」

「ヴェオちゃんって言うんだ。よろしくね。私は立花響、十六歳！」

「わおん」

「ん、いいいいこ！」

小さく一声だけ発すると、響はヴェオに抱きついて頬ずりし始めた。それを微笑ましく眺めながら六道絆は弦十郎を見上げる。

「それで、オレに聞きたいことは？」

「ま、色々あるが順を追っていくか。お前さんのシンフォギア。アレはどこで入手したものだ」

「ドイツだ、詳しい地名までは忘れた」

「シンフォギア装者になったのはいつからだ」

「少なくともここ三ヶ月以内。桜井理論さまさまってところだな」

桜井理論の開示による恩恵を受けた人間。だが、それとこれとは話が違う。あくまでも異端技術に関する理解度が向上しても、適合者を見つけられるかどうかは別だ。それはつまり、六道絆の背後にある組織の影がある。

「なぜテロ組織「フィーネ」に加担している。お前も仲間か」

「協力者だ。ま、正直どっちが何をしていようとオレは興味ないんだ

がね」

「……フィーネの仲間じゃ、ない？」

「ああ。だけどオレみたいな自由奔放で自分勝手、無軌道な奴はそういう組織的な行動つてのに向いてなくてね。おかげで員数イレギュラーメンバー外扱いだ」

「お前が居ても居なくても、計画に支障はない。そういうことか」
「そういうことになる。オレとしては動きやすく助かってる」

拘束具が邪魔なのか弦十郎に見せて取り外してはくれないかとそれとなくアピールするものの静かに首を横に振って断られた。

「なら、お前に首輪をつけているのはどこの組織だ」

「アインフェリアル」

「シンフォギアを入手出来たのもその組織の手引があつてか」

「正確には、シンフォギアをオレに与えてくれたのがアインフェリアルつてだけさ」

（ならばアインフェリアルとは、異端技術に造詣が深いということか……）

こちらも追って調査すべきであろう。頭の片隅に留めて、弦十郎は尋問を再開する。

「お前さんのペンダントはこちらで預かって解析中だ。悪く思うなよ」

「別になんとも思わねえよ。後で返してくればな」

「それはどうだろうな。日本で未確認の聖遺物、それだけでなくフィーネでも無い組織がシンフォギアシステムを所有している事がお前のおかげで判明した」

「所有だけじゃなくて量産もしている。とはいっても、それも一週間かそこらか前に止まっているはずだ」

「シンフォギアの量産、だと——？　だが適合者がいなければ」

「お得意の『LINKER』なんて使ってねえぞ」

「それはこちらでも確認している」

正規適合者として、六道絆はシンフォギアを纏い、ウエル博士の命令に従って響と交戦をした。だが、二課の知る装着とは全く異なる体

系に疑問が生じる。謎はまだ数多く残っているが、答えを急ぐことはない。弦十郎は腕を組んで六道絆を見下ろしていた。戦闘データの解析も別途進行中である。

「……こちらで、お前さんのことを調べさせてもらった」

「——ああ、そうかよ。それで」

それまで協力的で友好的だった六道絆の表情から笑みが消えた。まるで話題そのものから目を逸らすかのように。

「関東最大勢力の極道、六道会。その大本になる菩薩組の組長が六道銅玄。お前の爺さんって事になるが、間違いはないか」

「……………ああ。わかってるならこれ以上言うことも話すこともないだろ」

「いいや。六道会は十年前のノイズ災害で六道願像を亡くして以来、勢力を狭めている。それは直系である息子と、孫であるお前が消息不明になってからだ」

「オレの家の事情とアンタは関係ないだろ」

「そうでもない。俺も十年かそこら前までは公安局警察に身を置いていたからな。あながち無関係でも無い、実際何度か首を突っ込んだこともある」

「昔の話だろ。っていうかまだ生きてんのかよ、ウチのクソジジイ。とつととくたばりやいいものを」

祖父に値する人物の死を願うような言葉に、弦十郎は目を細めた。「特異災害対策機動部二課の司令なら、人んちの事情に首突っ込んでないでノイズでも相手にしてくれ」

「そのノイズを操るソロモンの杖を持った相手がフィーネにいます。そこにお前さんがいた。ならお前も無関係を装うのはやめろ。何が目的だ、六道絆」

「ツ——！」

椅子を蹴倒しながら立ち上がる六道絆は弦十郎と睨み合う。

「オレが何をしようよ、どうしようよツ！ オレの人生だツ！ オレの好きに生きて何がワリイんだ、風鳴弦十郎ツ！」

「お前が好き勝手やって誰が迷惑していると思ってる！」

「ガキのワガママだツ！ それぐれえ大目に見れねえのかツ！」
「限度があると言っているんだツ！」

胸倉を掴みあげて睨みつける弦十郎の気迫に響達が気圧されるが、六道絆は一步も退かなかつた。むしろ食って掛かる勢いで睨み合っている。

「極道がテロ組織と通じている、それが一体どれだけ日本社会を混乱に招くか分かっているのかツ！ それだけじゃない、シンフオギアまでも——！」

「……テメエも、オレを『六道家の人間』としか見れねえ大人かあツ！」

「ツ……!?!」

「ガキの頃からそうだ、いつもそうだツ！ オレの周りはいつだって、オレの周りの大人達はそうだツ！ 極道の息子であるだけでそうだツ！ オレはそういうしがらみが嫌で日本を捨てたんだよ、そうだろうツ!? こうでもしなきゃ何処に行ってもオレの名前が付いてくるんだからしようがねえだろうがツ！」

弦十郎の腕を振りほどき、尚も六道絆は牙をむき出しにして吠えた。

「オレは、六道絆だツ！ どこにでもいる、ただの人間だツ！ オレの家なんて知ったことじゃねえんだよツ！」

「ヴオウツ！」

拳を振り上げそうになるその時、誰よりも先に制止させたのはヴェオの声。弦十郎と六道絆の間に割って入り、互いを庇うように吠え立てる。それに舌打ちを漏らし、六道絆は額に手を当てて椅子に腰を下ろした。

殴り合い手前まで激昂していた感情を落ち着けさせようと深く呼吸を整える六道絆に、ヴェオは頭に前足を置く。それは、目上の者が目下の者を慰める狼同士のコミュニケーションだった。うなだれている頭から前足を下ろして今度は頭を擦りつけた。

「……わかったよ」

「わんツ」

「わかってる、ヴェオ。オレが悪いことくれえ、百も承知だ」

「……バン」

「怒鳴り散らして悪かったよ、弦十郎のオツサン。オレの家の禍根に
関しちや、出来れば触れないでくれると助かる。話題にも出さないで
くれ。それは、オレが自分でケリつけることだ」

それに賛同するかのようにはヴェオもまた、弦十郎を見上げて声を上
げる。

「アインフェリアルのも、武装組織フィーネのことも。オレの意思
でやったことだ。クソジジイに頼まれたわけでも何でもねえ。それ
だけは信じてくれ」

「……」

「必要な情報なら、オレが答えられる範囲で答える。オレからはそれ
だけだ」

黙りこくる弦十郎に、シンフォギアの解析が終了したという通達が入った。

「お前の意思は分かった。だが、すまないが今少しここでおとなしく
してもらおうぞ」

「メシ食えるなら文句はねえよ。なあ、ヴェオ？」

「わおうっ」

それにはヴェオも異論は無いらしい。

Tr. 11 その名は、狂獣・ベルセルク

「ベルセルクの解析が終わったのか」

「はい。ですが、やはり不明な点が多いですね」

朔也がデータを表示させ、友里あおいもまた同様にシンフォギアの解析結果を弦十郎達に見せる。モニターに映し出されるのは装着時の六道絆と、響と交戦している姿。

「響くんの暴走に極めて近いな……どう見る」

「戦った感じだと、多分暴走とは違うと思います」

「では、アレで制御している状態だと」

傍目から見れば、響の暴走状態に極めて酷似している。聖遺物に呑まれている状態に思えるが、実際に戦った側からするとそうではないらしい。

「過剰な出力に振り回されているというか、なんて言ったらいいかわかりませんが……とにかく、あの状態で理性を保っているんです」

それでもなければピンポイントの反撃に合わせたカウンターなどという芸当、出来るはずがない。力説する響に弦十郎は唸り、続けて回収したコンバーターの解析結果に眉を寄せた。

「彼の持つシンフォギア、ベルセルクなのですが———なんといいですか。未知の異端技術が用いられているように思えますね」

「そのせいで、ほとんどがブラックボックス化しています」

「アインフェリアルについての調査は」

「こちらは今やっていますが、望みは薄いでしようね」

痕跡無し。活動経歴無し。名前の候補に上がるのは、やはり神話の死せる戦士達。アインフェリア———名前ばかりのテロリストに、内心をかき乱されていたのはクリス。

「ヤクザもんでテロリストに加担とか、救いようがねーな」

「クリスちゃん……」

「で、どうすんだ。あのヤローは。ムシヨにでも入れるのかよ、オツサ

ン」

「……いいや。しばらくはこちらで身柄を預かる」

「本気で言ってるのか!」

「重要な手がかりだ。我々の知り得ない組織、知り得ない異端技術。それらを用いて作られたシンフォギア。下手を打てば世界のパワーバランスが一気に傾くぞ」

「もしそうなれば、国際問題どころの騒ぎじゃなくなるでしょうね」

ボヤキながら手を動かす朔也とあおいの二人が各国の異端技術と照合させてはいるものの、それはやはりどれにも該当しえなかった。

「ダメですね……もう少し粘ってみます」

「もしかすると、異端技術を独自発展させたのではないでしょうか?」

「……可能性はある、か。緒川」

「はい」

「アインフェリアルのどんな些細な情報でもいい。各国の諜報機関と連携して調査だ」

「わかりました」

「しかし……ドイツ、か」

ネフシユタンの鎧のみならず、ガングニールとイチイバルも第二次世界大戦中にドイツからもたらされたものだ。六道絆がドイツで入手したという謎のシンフォギア、ベルセルク。そしてアインフェリアル。それだけではない。かつてEU連合の経済破綻の一部を肩代わりする形でもたらされたデュランダル。今となつてはネフシユタンの鎧も、デュランダルも消滅してしまっている。

「一体、何が起きようとしているんだ……この日本で」

エアキャリアでの移動中。失態を咎められるウエル博士への叱責も程々に切り上げて、マリア達は別拠点へと向かっていた。

「そういうえば、切ちゃん。あの人から何か渡されていたけれど」

「そうでした」

「何を受け取ったの?」

「これデス」

「通信機に、音楽プレーヤー？ これは私達の使ってるインカム……」
「きつと、悪用させまいと渡してくれたのデス！」

「でも、なんで音楽プレーヤーまで？」

「そ、それは……きつと、あたしと調の為デス！ 一緒に音楽聞くデスよ。また会った時に返せばそれで良いじゃないデスか」

「……マリア」

「そうね。音楽プレーヤーは二人が持っていればいいんじゃないかしら。でも、この通信機は私達が使っている物じゃない。そうになると、アインフェリアルとの連絡手段として渡した可能性が——」

ある、とまで言いかけたところで通信機が着信を報せる。それに目を丸くして、マリアは耳に当てた。

《ああ、ロック。聞こえてるかしら？》

「……え、ええ」

《あら？ ロックじゃないのね。貴方は？》

「私は、マリア・カデンツァヴナ・イヴ」

《ああ、歌のお姫様だったのね。これは失礼——ってちよつと待つて？ なんで貴方がロックの無線持つてるの？ おかしくないかしらこの状況》

「え、えつとそれについてはなんとさえばいいかしらね」

《……まあいいわ。おおかた、あのバカわんこが貴方達を逃がすために残ったんでしよう。ベルセルクの起動もこちらで確認出来ているし》

「貴方は一体何者なの」

《自己紹介がまだだったわね。私はベル。アインフェリアル異端技術部門担当者。よろしくね、お姫様》

気さくな挨拶に比べて、マリア達の間を走る緊張感が高まっている。しかし、通信機の向こうの相手は落ち着いていた。場数を踏んでいる貫禄さえ伺える。

《ちよつと良かったわ。聞きたいことがあったの。こつちからあなた達と直接話す機会は、ロックを通じてじゃないと無かったからね》

「ロック……?」

《六道絆よ。一緒にいたんじゃないの? 銀髪で狼みたいなヤツ》

「え、ええ……」

《あなた達の武装蜂起から一週間が経過、なのにどこも動く気配は無いわ。こちらでも静観していたけれど——いい加減、痺れを切らし始めてる》

「それはつまり」

《そうね。貴方達がこれ以上動かない、というのならアインフェリアは勝手にやらせてもらうわ。少なくともうちのボスに一度相談はしてみるけれど……どう? まだテロはやる気あるかしら》

言葉に詰まるマリアを、調と切歌が不安そうに見上げていた。その視線を受け止めて、マリアは断言する。

「……まだ、私達は負けていない」

《そう。じゃあ、近いうちにこちらからチャンスを作ってあげる。そこであなた達の裁量が決められるわ》

「望むところよ」

《肩に力入れなくても大丈夫よ。うちのボスは寛大で寛容、お人好しだから失敗なんて気にしなくていいわ》

とはいえ、その言葉にどれだけ信頼がよせられることか。チャンスを作る。その言葉に引つ掛かりながらもマリアはおくびにも出さずに続けた。

「そちらの要求は?」

《無いわよ。言ったでしょ? 協力するって。だから貴方達が動かない限り、私達は動かない。動けない。口約束でもね。そういうの大切にする人なのよ。私達のボスは。近いうちに現地で合流予定だけでも、どうなるかしら。あまりこちらの情報を明け渡しても問題になるし、おしやべりはこれくらいしておくわ。それじゃ、また近いうちにでも連絡するわね》

ベルと名乗った女性はマリアからの返答を待たずに通話を終える。沈黙する通信機を見つめて自分の言葉を思い返した——まだ、負けていない。それは一体、何に対して向けた言葉だったのだろうか。

(そうだ。私達は、世界を敵に回した……この悪こそが、私達の正義) 　　こうでもしなければ救えないものがあるのだから。

「マリア。大丈夫?」

「大丈夫よ。近く、アインフェリアルの方から動くそうよ」

六道絆のような自分勝手ではなく、組織の人間として徹底した口ぶりにこちらの緩んでいた気が引き締まる。あの男の奔放さと来たら、調と切歌の二人までも巻き込んでいた。こうして別行動となったのは僥倖と言える。——だけど。たった一人で見知らぬ組織に送り込まれても尚、自分を見失わない強さが自分にはあるだろうか。マリアはそんな問を自分に投げかける。……きつと、大丈夫。大丈夫のはずだ。

もしかすると自分は妬いていたのかもしれない。六道絆の芯の強さに。私の強さに。それに振り回されていた自分に。

(私は、フィーネの器……こんなところで立ち止まってなんかいられない)

アインフェリアルが機会を作ってくれるというのなら、望むところだ。

——ベルは、マリアとの通話を終えてからパソコンと向き合う。そこに表示されているデータは、ベルセルクの交戦記録。

「限界ギリギリ。八十五秒まで起動……撃破ならず、ね。流星は日本。世界を救っただけはあるみたいね」

立花響。風鳴翼。そして——雪音クリス。三人の名前にベルは薄く微笑む。

「だけど。ごめんなさいね、お嬢ちゃん達、私達は——我々は、ノイズを相手にシンフォギアを使うつもりなんてないのよ?」

人類種の天敵は、特異災害ノイズだ。だが、それはあくまでも災害としてカウントされる。それならば、人類の敵は?

それは全て過去の歴史が物語っている。だからこそアインフェリアルは挑むのだ。この世界に刃を向けた「フィーネ」と同じく。

(リードが到着まで、残り三日。私も日本観光はそれまでかしらね)

口惜しく思いながら、ベルは朝食にインスタント味噌汁を用意していた。レンジで温めるだけの白米も一緒に食卓に並べるものの、やはりどこか不満そうに。

「……自分で作りたいわね、こういうの」

だが、それで六道絆を頼るのだけは嫌だった。身近な日本人と言えど、アレに頼るのだけはプライドが許さない。アインフェリアルでも立場はベルの方が格段に上だ。そして人間性で言っても自分は間違いないく上の立場なのだから。あんなのに頼ってたまるか、という思いがベルの中にはある。

Tr. 12 人類最高の友

——特異災害対策機動部二課仮設本部、食堂。改めて尋問をしようとしていた弦十郎だったが六道絆からの申し出により、食堂で話をすることになった。本人曰く「腹減った」とのこと。監視カメラでの様子も見る限り、弦十郎が部屋に来るまでの間眠りこけていた。

「いただきます」

一時的に拘束を解除しているものの、本人は抜け出すつもりなど無いのか食事に手を伸ばしている。毒が入っているなどと疑う余地もなくまっすぐ箸を伸ばす辺り、信頼されているのかもしれない。腕を組んで食事光景を眺める弦十郎は間の抜けた顔をしている。隣でおとなしく座っていたヴェオにも、あおいが用意した食事が置かれていた。匂いを嗅いでから食べ始める。

「……食べながらいい、俺の話を聞いてくれ」

「もぐ？」

「お前の持っていたシンフォギア。アレに使われている異端技術は我々の知らない技術だ」

「モグー」

「一体、誰が作った」

「ベル。フランス人」

短く素っ気なく答えると、ヘタを取ったプチトマトをしばらく見つめてから宙に放る。

「アインフェリアル働きの者。シンフォギアの量産もそいつがやった」

放物線を描いて落下するプチトマトはやがてヴェオの口の中へとまっすぐ落下した。

「シンフォギアの量産？ それは」

「オレのベルセルクさ。アレは、誰でも使えるシンフォギアだ。適合系数があろうがなかろうが関係なしにな」

「そんな物が、有り得るのか？」

「だが、正規適合者はオレ一人だ。数にして約三百。この三ヶ月で量産してきた」

「それは櫻井理論が開示されてからだな」

「その恩恵を受けたのは何も政府だけじゃないってことだな」

味噌汁を啜りながら、六道絆は箸を止めずに弦十郎の疑問に答えていく。

「だが問題なのは、ウチのボスだ。そっち方面に手が回るって事で、本来政府に開示される情報を横からデータだけ掠め取った。櫻井理論はシンフォギアの量産に手こずっていたアインフェリアル最後の一押しだったってことだな」

「……ならば、シンフォギアを量産したアインフェリアルの目的はなんだ」

「人類統一」

「——人類の、統一だと」

バラルの呪詛。人類の相互不和の呪い。それを知っての事だろうか。しかし、お世辞にも六道絆の行動にはそれらを思慮に入れていたとは思いがたい。そもそも知りすぎないだろう。ならば何故アインフェリアルに賛同して行動を共にしているのか益々疑問が浮かぶ。「そ。人類統一。今まではノイズという人類共通の敵がいた。なら、それがいなくなった後はどうなる？ 過去の歴史が物語るように、人類の敵は人類以外に有り得ない。ならば、人類に敗北は有り得ない」ってのがウチのボスの考え。だから人類を一つにする為に、自分達が人類の敵になる」

「……テロ組織「ファイネ」と同じようにか」

「先を越されたもんだからこっちの計画がメチャクチャになって方向修正を余儀なくされたけどな」

そう付け加えて、六道絆は添えられている生野菜をそれとなく避けながらヴェオに差し出すと、匂いを嗅いでから食べ始めていた。どうやら生野菜は嫌いらしい。——いや、それどころではなかった。

「待て、ならばシンフォギアを戦争の道具に使うつもりかッ！」

「そのつもりらしいぜ、ウチのボスは。もちろん、ノイズも敵だ。そっ

ちも進んで片付けるが、本来の目的は全面戦争だ。うちのボスがソロモンの杖なんて持ってたらどうなるかなんて考えたくもねえ」

「そうと知っていなながら、何故アインフェリアルに加担している」

「理由はねえよ。大体知ったこつちやねえ、戦争するなら好き勝手やりやあいい」

それとなくおかわりを催促すると、あおいが替えの食事を用意し始める。ヴェオもおかわりなのか、空にしたトレーをくわえて後を追いかけていた。

「オレはあくまでも、アインフェリアルの『オマケ』だ。言ったら、オレがいてもいなくても」

「計画に変更はない……なら、お前の役職はなんだ」

「同族殺し、とでも言えばいいかい。ウチのメンバーが『暴走』した時がオレの出番。それまで非番だ。ああ、でも勘違いしないでくれよ？ オレは人殺しだけはしない」

「矛盾していないか？」

あおいが持つてきたおかわりに頭を下げ感謝しながら受け取り、再び箸を動かす。ヴェオも尻尾を振って隣に座り込むと再び食べ始める。めていた。

「例えだからな。暴走したメンバーをぶん殴ってでもおとなしくさせるのがオレの仕事だ」

「……シンフォギア装者が総勢三百。それが俺達の敵か」

「人類の敵だ。もつと正確に言えば、ベルセルクが三百。別物のシンフォギアをウチのボスとお付きが一個ずつで合計三百と二つか？

多分オレのも含まれてんだろ」

響のガングニールに、マリアの使う黒いガングニールの事もある。何らかの経緯で聖遺物の欠片が手に渡り、製造されることもあるだろう。しかし——同名同一のシンフォギアが三百も量産できるはずがない。経年による劣化の激しい聖遺物が多い中、それを欠片で使ったとしてもだ。

「誰にでも使えるシンフォギア・システム、か……」

そもそも、ベルセルクは狂戦士の総称。ガングニールは軍神オー

デインの所有していた槍であり、天羽々斬もまたスサノオノミコトの聖遺物。所有者が明確に残されている物だが——むしろベルセルクは、その『存在』その物を指している。ならば道理だ。だがしかし、ならばこそ疑問が浮かぶ。その製造に使われた聖遺物が何か。

「ベルセルクに使われている聖遺物の欠片は何だ。所有者の分からない狂戦士の聖遺物など」

「目の前にあるじゃねーか、完全聖遺物」

「——完全聖遺物だとおツ……!?!」

まさか——!?! 腰を浮かせる弦十郎に、六道絆は行儀悪く箸を突きつけた。

「オレじゃねーぞ、言っとくが。オレはあくまでも正規適合者ってだけの話だ」

「なら一体どこにあるというのだツ！ 我々をコケにするのも大概に——……?」

掴みかかりそうになって、一気に頭が冷めていく。弦十郎の頭の冷静な部分が真っ先に否定していた現実をゆっくりと反芻していた。

六道絆の隣、あおいが頭を撫でている巨大な狼は尻尾を振って食事に夢中になっている。

「……まさか、か…………ツ！」

「見ての通りだよ。ヴェオは完全聖遺物だ」

「友里オツ！」

「は、はいッ!?!」

「今すぐヴェオを検査にかけるんだ！ 絆、お前もだ！」

「メシ食ってんだからもうちよつと」

「いいから早く行かんか馬鹿者ツ！」

「りよーかい……ごちそうさまでした、と。行くぞヴェオ」

「わおうっ」

両手を合わせて席を立ち、六道絆はヴェオを引き連れて検査へと向かった。

それから間もなくして——。

「風鳴司令。検査結果、出ました……」

「どうだった」

「彼の言う通り、ヴェオは完全聖遺物ですよ。いや、驚きましたね」

「六道絆の検査結果は」

「特に異常は見られません。強いて挙げるなら、恐ろしく健康つてことですかね。後は筋繊維の著しい発達くらいです」

ブリッジに表示されているヴェオの検査結果に、弦十郎は目頭を押さえて深く息を吐く。

「今日だけで世界がひっくり返ったような衝撃の連続だ」

「ええ、こつちもですよ。見落としていましたね、ベルセルクのこと」

狂戦士。バーサーカー。それだけではない。軍神オーデインの神通力を受けた戦士達——熊や狼のようになりきって鬼神の如き戦闘を行う。そして、また別な名称としてウルヴヘジンも同一とされている。つまりは、狼男の起源。

「まさか彼の引き連れているあの狼が完全聖遺物だなんて思いもしませんでしたよ」

「ならばベルセルクとは」

「ええ。ヴェオの毛や血、牙などを用いて量産されたと考えるべきでしょうね」

それなら、あの過剰な出力にも納得がいく。

「やあれやれ。まったく……そんな物を引き連れている自覚があるのか、あの男は」

「無いと思いますけどねえ、あの調子じゃ」

メデイカルルームでヴェオと戯れているあの様子では、恐らく自覚などないのだろう。その様子を眺める朔也と弦十郎は深く息を吐いた。

「アインフェリアルにとって、六道絆の価値はヴェオ以下だろうか」

「でしょうね。実際、彼もヴェオより立場は下みたいですし」

モニターを眺めていると二人が取っ組み合いを始めている。しかも六道絆が負けた。喉笛に甘噛みされて降参の意思を示している。

「……緊張感というものが無いのか、あの男は」

「どこまでもマイペースで羨ましいですよ、と」

朔也はボヤキながらコンソールを叩いていた。改めて入手した情報頼りに検索を掛けているが、今だに結果が出ないことに少々苛立っているのかもしれない。だが、六道絆が協力的なことだけは大きいに助かっていた。

「確かにこりゃあ、どこの国も黙殺するわけだ……」

一介のテロ組織がシンフォギアを量産。完全聖遺物を保有している。これを公表した日には世界中大騒ぎで月どころではなくなってしまう。より身近な隣人こそが最大の脅威と国連も発表を控えるだろうに。むしろ国連が率先して取り掛かるべき議題だ。

「自分達にとって都合な真実は、常に世間に隠しておきたいものですね」

「ボヤキが多いぞ、藤堯」

「手は止めてませんよ」

Tr. 13　そして全ては狂い出す歯車

六道絆を仮設本部潜水艦で確保してから、二日——特に何事も無く過ぎた二日間だった。新リディアン音楽院での開催が目前まで迫っている秋桜祭。弦十郎は世界の動向に目を光らせているが、何も変わりはしない。特にこれといった異常は見られなかった。

そんな折、六道絆はブリッジへと呼び出される。そして、両腕の拘束具を取り外されて眉を寄せた。ヴェオもその隣に座り込む。

「お前が言っていた、ベルというフランス人。それはこの女性か？
藤堯」

「はい」

この二日間、ずっと探していた。アインフェリアルに関する情報も、ベルと呼ばれた女性に関する情報も。だがそれは故人としてのデータだった。

「フルール・ベルモンド。年齢二十五。フランス人。異端技術の神童として欧州では十五才から研究に携わっていたみたいですね。ですが……五年前に事故で死亡しています」

「ちようど彼女が異端技術に関する論文を発表しようとしていた時期に重なりますね。恐らくは……」

「何者かに謀殺された、と見るのが妥当か」

「いや生きてんだっつーの」

「表向きはな。俺はお前が嘘を言っているように思えん」

「そりやどーも」

「どうやら、彼女が研究していた異端技術が原因のようですね。データベースからまるごと消去されています。よほど知られなくなかったんでしょうね」

その内容は恐らく、ベルセルク——それに関するシンフォギア・システム。

「六道絆」

「なんだよ、弦十郎のオッサン」

「お前のシンフォギア・システム。その戦闘データの解析を進めさせてもらった結果、判明したことだが——人為的に、何らかの方法で聖遺物と人体を融合させていることが分かった」

「へー」

「それは我々の知る技術ではない。恐らくは、彼女が発表しようとしていた論文に関するモノだろう。だが、それは世界から抹消された。彼女の存在とともに」

しかしその効果は立証されている。六道絆のベルセルクは融合症例第一号——立花響のガングニールに迫った。つまり、彼女が発表しようとしていた論文は間違いなく聖遺物の欠片と人間の間を隔てる壁を乗り越えている。現時点では六道絆ただ一人がそれを証明していた。

苦い顔をしている弦十郎の脳裏に浮かぶのは、櫻井了子——ファイネの面影。ネフシュタンの鎧と自らの肉体を融合させた、終わりの名を持つ者。そして、ルナ・アタックを引き起こした張本人でもある。「それについて、何か知らないか？」

「いやまったくこれっぽっちも」

「……期待しないで正解だったな」

「言っちゃ悪いが、オレなんて中学校中退だぞ？ そんなのに論文とか言われても知るわけねーって」

「ならどうやって世界旅行してたんだ」

「英和辞典片手に、手前の足で」

もしそうなら大した度胸と行動力だ。しかも嘘を言っていない。

「それで？ 他には」

「アインフェリアルについても調べさせてもらった。だが、まったくと言っていいほど情報が出てこない。そこでお前の口から直接聞きたい。単刀直入に聞こう。トップは誰だ」

「それは言えないね」

「なんだと？」

「アインフェリアルは人類にテロを企てる組織だ。だが、そのトップはオレを“友達”と呼んだ。金積みまれようが殴られようがそればっ

かりは言えねえよ」

「それが人類の命運を左右してもか」

「友達は売り物じゃねえ。それだけだ」

「犯罪者を相手に義を貫き通すつもりか」

「オレは仁義、なんてものはクソの役にも立たねえと思ってる。屁理屈だが、こいつは『友情』ってやつだ」

「友人が道を踏み外そうとしているならば、それを止めるべきだとは思わないのか」

「思わねえ」

弦十郎に対して、六道絆は断固として引き下がらなかった。人類統一を掲げ、全面戦争を仕掛けようとするテロリスト。それを止めない理由はない。友と呼ぶのなら、尚更だ。だが六道絆は否と答えた。

「友達がバカやって騒ごうとしてんだ。だったらそれに、一緒になつてバカやって痛い目見るのも『友達』だろう」

「それでどれだけ大勢の人間が迷惑すると思ってる」

「七十億人」

「……………」

弦十郎は目頭を押さえる。一発くらい殴って目を覚まさせてやったほうがいいのかもれない。しかし、六道絆の感性に共感できるところもある。大人では出来ないことを平然と言つてのける。しかも、やってのけるだろう。この男は、たった一冊の辞書を片手に十年も日本を離れて歩いてきたのだから。

「アインフェリアル」の目的を知った以上、我々特異災害対策機動部二課は放置するわけにはいかない。もちろん、各国の政府もな」

「…………」死者は殺せない。何故なら我らは死を超越した者であるが故に」

「———なんのことだ？」

「死んだ人間を、誰が止められる？　なんでアインフェリアルなんて名前なのか、考えてみれば分かるだろうに」

「……………死せる、戦士達」

「末端に至る構成員、数千。装者三百。筆頭、含めて『全員死んでる』」

国連が動くか？ オレですらそうだったのに」

六道絆は行方不明。フルール・ベルモンドもまた故人。ならばインフェリアルとは死者の帝国に他ならない。検索をかけるのはそれこそ無理だろう。

「うちのボスは、懐が広くてね。薄気味悪くなるくらい寛容な心の持ち主だ。人種も国籍も肌の色も、権力も関係なしに慈悲深い。ま、そんなん関係なしにオレは友達やってただけだな」

「……死人が、世界の敵になるといふのか」

「だから探すだけ無駄だと思うぜ。そういう情報管理は徹底してる。オレみたいな奴がべらべら喋っても問題ないくらいにはな」

「我々に出来ることは、何かないのか……！」

それに、六道絆が否と答える。最悪の結果が待っていると分かっている、それが最善の策であり二課の取れる唯一の対策。

「無いことはない」

「何かあるのか」

「ただし条件がある。一つ、オレを解放すること。これは向こうがオレと必ず接触するからだ。二つ、ノイズの出現を待つ。アイツはノイズを敵視してる。三つ——そう遠くない話だ。日本で行動起こすのを待つしかない」

どれが一番現実的か……そんなのは、考えるまでもなかった。

「六道絆。お前は何故「フィーネ」と行動をともしていた」

「単にオレが一番近かったただけって話さ」

運悪くな、と付け加えて。

「お前はインフェリアルではないのか」

「組織の動きは知らん。が、ボスの「お願い」には応える義務がある」

「……我々に協力するというのか？」

「オレも、やらなきゃならんことがあるんでね。シンフォギアはそっちで預かってくれてもいい」

「何をする気だ」

「お家の事情さ。クソジジイが生きてる以上、オレに「自由」はねえからよ」

「……………」

弦十郎は腕を組み、深く息を吐いて悩んだ。悩み、悩んで、悩み続けて、悩み抜いた結果として――。

六道絆を二課から解放した。シンフォギアも手渡し、ヴェオも同行させる。つくづく甘いと思いながらも、風鳴弦十郎は軽快に走り去るその背中を見送った。

「バン君。これを」

「これは？」

「我々の使う通信機です。こちらは、同様にインカムです」

「こりやどうもご丁寧に。サンキューな、あおいさん。んじゃあお返しに、のど飴」

「ありがとね」

「朔也さんも。ホイッと」

「ありがとさん」

去り際にオペレーターの二人と言葉を交わす六道絆は、弦十郎にのど飴を見せる。

「ひとつだけ。オレから個人的に頼みたいことがある」

「なんだ。言ってみろ」

「アンタのこと、弦十郎のオッサンじゃなくて、おやつさんって呼んでもいいか？」

「ハア？ いや、そりゃあ……構わんが」

「そっか。サンキューな、ホイよ」

緩やかなアンダースローからのど飴を投げると、それを片手でキャッチした。それを最後に去って行った男は、今どこで何をしているだろうか。

――そして、同日。日本に降り立つ男がいた。

何の事はない外国人。観光旅行に訪れたのであろう、その人物は白いビジネススーツにビジネスバッグを片手に入国する。手には日本の観光パンフレット。単身、日本へ飛んだその成人男性はスマホに耳を当てる。連絡先は、先に現地に入っていた知人だ。合流場所を決め

ようと思っていたのだが、どうやら相手は先約があるらしい。

《今すぐ、というわけにはいかないけれど夜までには戻る予定よ》

「うくん。それは少し困ったなあ。私一人でニッポンを歩くのは不安なんだけれど」

《大丈夫ですよ。良い人達ばかりですから。拍子抜けするほどに》

「それを聞いて少しだけ前向きになろうかな。それじゃあ、また後で連絡するよ。ベル」

《ええ、リード。また後程》

通話を終えて、歩き出す白スーツの成人男性は金の髪をかき上げながら空港を後にした。

「さて……ここからどっちに行けば良いのかな、私は？」

そして早速、看板を見上げながら小首を傾げる。前途多難ではあるものの、男性の頬は緩んでいた。

Tr. 14 執行猶予待ったなし

新リディアン音楽院秋桜祭が開催されるその一方で、動き出す組織の影。

それは、エアキャリアで待機していたマリアとナスターシャ教授、そしてウエル博士の三人の前へと現れる。

《はあい、どうもお姫様。こうして直接お目にかかれるのは初めてよ》
「……どうやって、私達の場所を」

《あまりこちらを舐めないでほしいわね。世界の裏側に逃げるわけでもなければ居場所の特定くらいやるわよ》

手間は掛かったけど、と付け加えながらフルール・ベルモンドはエアキャリアの前で両手を挙げた。いつものメンズスーツに身を包んで。

《出来れば、中で直接お話ししたいんだけど……良いかしら？》

「マリア。彼女を招きます。万が一の時は、分かりますね」

「分かっているわ、ママ」

「なあに、こちらにはソロモンの杖もあります。大丈夫でしょう」

エアキャリアへと招き入れられたベルは、両手を挙げていたが深く頭を下げる。

「お初にお目にかかります、ナスターシャ教授。それに、マリア・カデントツアヴナ・イヴ。貴方は……ドクターウエルでしたね。死んだものだとはかり思っていましたね」

「——貴方は、フルール・ベルモンドですね」

「知っているの、ママ」

「ええ。詳しくは省きますが、異端技術の神童とまで称された天才の貴方が何故テロリストに……それに、死亡したと聞いていましたね」「流石に知っていますか。まあ、同じ境遇の者同士仲良くしましょう」「それで。私達に直接接触を試みた理由はなんですか」

「インフェリアルトップが今朝、日本入りしたわ。まずは「慣らし」程度にこちらでやってみせるけど……それからどうするかは貴

方達次第」

「ッ——」

腰を下ろし、足を組んでみせるベルはソロモンの杖を見ていた。「それと。天才、なんて呼ばれたところで櫻井理論には勝てなかったのよ？ 私を疎んだ大人たちは私の存在を無かつたことにした。だから、今の私は只のフルール・ベルモンド。ベルって気軽に呼んでくれていいわよ」

「貴方の言う、慣らしとは一体……」

「そうね。軽く一人二人くらい、ベルセルクでも起動させてみるにかしら？ どれぐらいの規模で治まるかは知らないけどね」

その戦闘能力は間近で見たウエル博士がよく知っている。わずか九十秒だけだったが、日本の装者を相手に圧倒していた。だが、そんなものが役に立つのだろうか？ 思わず鼻で笑うウエル博士が眼鏡を直す。

「いや、失礼。たった九十秒で何が出来るのかと思いましてね」

「それはロックの話でしょ？ いいのよ別に。だって最初から暴走させる」のが目的だから」

「はあ!？」

ウエル博士が驚愕していた。

「むしろおかしいのはロックの方なのよ。いい？ 経年劣化して、かつ欠片という状態の本気の出せない聖遺物。それを使っている装者達の身体に掛かる負荷を考慮して。それに引き換え、現代に至るまでなおも健在の、完全聖遺物。それから削り出したシンフォギア、その力を『九十秒も制御して理性を保つ』のがそもそも頭おかしいって言ってるの」

「……じゃ、じゃあ彼はどうなっているんだ!? そんなことが可能なのか!?! まさかそんなはずは、有り得ない!」

「知るわけないでしょ。ベルセルクの適正があるっていうのは、なんとなく分かるけどね」

「どうして?」

「だって普通に考えて、トチ狂ってるでしょアイツ。心当たりない?」

「……………あるわね」

「でしよー？ ホンツト苦勞するわよねー、アレの相手」

マリアの言葉に、途端に親しみを込めた言葉を漏らすベルが間を置いてから咳払いを挟む。

「ごほん。……今の愚痴は、聞き流してね？」

「え、ええ……」

もしかすると親しみやすい人なのかもしれない。だが、聞き捨てならない言葉にウエル博士が髪をかき上げていた。

「いいや、その前に！ 暴走させるということが任意的に可能なことなのか!? 聖遺物と人間の融合！ そんな事が出来るのだとしたら」

「出来たのよ、私の理論上は。……だけど、色々と問題があったの」

「と、言うത്？」

「倫理的に人道的に、道徳的に。大人たちが口を尖らせる決まり文句よ。人間が聖遺物の力を引き出すんじゃない。『聖遺物が人間の力を引き出す』という、私の論文はね。そんな善良な大人達の手によって闇に葬られた。私の存在ごと灰燼に帰した」

左手を見つめ下ろし、感覚を確かめるように何度も拳を作る。よく見れば、左手は右手と肌の質感が僅かにだが違和感があった。

「——だから、絶対に赦さない。絶対に、生かしておかない。ううん、違うわね。生きたまま地獄に突き落とす」

そこに絶対の殺意を込めて呟くベルには鬼気迫るものが感じられてマリアは背筋が震える。まるで冷たく研ぎ澄まされた刃のように、意思の籠もらない鋼鉄の凶器。

「私の全てを否定した世界も、大人も。踏み躪られた私の全てで蹂躪してみせる——これが、私がアインフェリアルに所属する理由ね」

有り体に言えば、復讐。逆恨み。人類統一の為に自らの全身全霊を持って死に物狂いの尽力で立ち向かう。それは故人であるフルール・ベルモンドが突き動かされる怨念でもあった。

「だから。ドクターウエル？ 貴方がソロモンの杖でノイズを呼び出すよりも先に、私は貴方の腕と首を跳ね飛ばすわよ」

「ははは、恐ろしいことを言ってくれますね。ですがどうやって？」

貴方がナイフを取り出して構えるより先に僕が指先一つで炭にして
――」
キユウインツ！ ……何かが、ウエル博士の首筋を掠める。ペンの
ような、小さな物体がベルの左手から――より正確に言うならば、指
先から。

「左手の指が一本足りない」まま、ベルは微笑んだ。

「私は指先ひとつでこの場にいる貴方達の頸動脈、なで斬りに出来る
わよ」

「ハ……………」

極小の鋼糸によって繋がれている「小指」を回収すると、ウエル博
士はその場に尻もちをついて首を撫でる。まだ繋がっている事を確
認してから、引きつった笑みを浮かべていた。

「私から全てを奪った五年前――おかげで私は、自分の身体を半分近
く機械化することが出来たのよ。今度は私が奪う番……………この左腕と、
両足で」

「貴方、もしかして義体なの」

「まあね。左腕と両足。それと内臓がいくつか。自前で直したけど。
足りない部品は機械で補える。いい時代よね、科学技術の発展は」

そう言いながら薄ら寒くなる笑みを浮かべる。

「でも私の仕事は裏方。荒事や採め事は管轄外。そういう手が汚れる
仕事はロックの担当なのよ。私は後ろでせせら笑ってるだけいい」
「……………あの男といい、貴方といい。アインフェリアルは頭おかしいの
しか居ないの？」

「アハハ。言ってくれるわね。でも、私からしたら装者がたった三人
で世界に喧嘩売った貴方達の方がよっぽど頭おかしいわよ？ だか
ら聞きたいの。そうまでさせる覚悟は、何？」

――

「私は復讐の為に。でもね、こんな私でも数千人在る中の一人。アイ
ンフェリアルというテロ組織の後ろ盾があるから立ち上がった。そ
れに比べて貴方達はなに？ なにがそうさせているの。たったの四、
五人ばかりで」

「それ、は……」

自分の足場を崩されていくような感覚にマリアは戸惑った。ベルの覚悟は、本気だ。その目を見れば分かる。水晶のような輝きの底に、どす黒い感情が澱んで見えた。人を人と見ていない。だが、そんなベルの言葉に答えたのはウエル博士だった。眼鏡を直しながら立ち上がり、ソロモンの杖を掲げて。

「英雄、ですよ」

「英雄？」

「そう！ 英雄！ ヒーロー！ 我々が立ち上がった理由など、簡単なこと。人類の救済！ 公転周期の変動した月の落下に備えてエ、一人でも多くの人類を救済するために我々は立ち上がったのですよおツ！ これを英雄的行動と言わずして、なんと言うのですか！」
「十数年もしない内に月と衝突なんて知ってるわよ。国連は発表しないでしょうけどね」

「なぜ、どこでそれを!？」

「ねえ……私ってバカにされてるのかしら」

額に指を当てながら、ベルはため息を吐いた。

「そんなの、察しの良い連中なら気づいている。計算方法はともかくとしてね。それでもなければ私も急ピッチでシンフォギアの量産なんて始めてないわよ。それが偶然、偶々、奇跡的に貴方達とタイミンが被ったっていう最悪の状態じゃなければ今頃世界中大混乱でしようけど」

「……もし、貴方達が行動を起こしていたらどうなっているというの？」

「そうね。主要都市のライフライン断絶。交通機関も発電施設もおじゃん。暴動起こすような連中は片っ端から野犬の餌にしてるでしょうよ。だから、そういう意味なら貴方達の行動は世界を救っているんじゃないかしら？」

まさに英断ね、と。そんな皮肉を言いながらベルは頬杖をついてウエル博士を見上げる。

「そんなことをして、人類が救済出来るとでも!？」

「……頭のネジの吹っ飛びようなら、うちのボスは一番よ」

心底呆れながら呟いて。

「そんな地殻変動に匹敵する人的災害を乗り越えられない人類なら滅びてしまえ、だそうよ」

マリアも、ナスターシヤ教授も、ウエル博士も絶句した。

「月が落ちてくるまでの十数年かそこらの間に、人類一丸となって困難に立ち向かえないのなら “和を乱す命に価値はない” というのが、うちのボス。その為に、まずは自分が人類の敵となる。全世界をスラム化させて、ダメな場所から “消していく” のが私達の計画——の、はずだったんだけどね」

そんなことは、させてはならない。させるわけにはいかない。そんなことをすれば、月の落下よりも先に世界が滅ぶ。いや、人類社会が滅んでしまう。

「テロのお手本を見せてあげるから、見て学ぶと良いわ。『フィーネ？』」

（私は……私は、こんなことのために！）

そんなことを止めるために、立ち上がったのではないのに——自分の足元が崩れ落ちていく錯覚に、マリアは壁にもたれかかった。

Tr. 15 新リディアン音楽院秋桜祭満喫中

秋桜祭は一般にも開放されて新リディアン音楽院は大きく盛り上がりを見せている。その光景を見下ろすのは、六道絆。隣にはヴェオも並んで見下ろしていた。非常階段から登りつめたビルの屋上から眺める屋台や生徒達の顔ぶれを見つめて紙パックの牛乳を開ける。

「特に異常なし、と」

半分ほど飲み干してから、もう残りの半分をヴェオに差し出す。上を向いて顎を大きく開ける口の中に少しずつ注いでいく。時間を掛けて空にした紙パックは潰してレジ袋に放り込む。一緒に買っておいたあんパンも半分に分けてヴェオに差し出すが、そっぽを向かれた。それならば、と――取り出すのは鳥のささみ。それには興味を示したのか、尻尾を振っている。内袋から取り出して軽く放ると、立ち上がってキャッチした。

あんパンをくわえながら眺めるリディアン音楽院の秋桜祭。ビルの屋上から双眼鏡を使うわけでもなくただ眺めている六道絆だが、その中を歩いている二人組の少女に眉を寄せた。

「……もしかして、ありゃあ」

眼鏡を掛けてはいるものの、間違いはない。金髪にバツテン印の髪留め。その隣に並ぶのは黒髪ツインテールの物静かな印象を受ける少女。暁切歌と月詠調の二人だ。まさか秋桜祭に足を運んでいるとは思わなかった。

「ヴェオ。ちよつと行ってくる。なんかあつたら呼ぶ」

「わおんッ」

「んじや、また後でな」

ゴミを入れたレジ袋を持って六道絆は飛び降り防止のフェンスを乗り越えてビルの崖つぶちに立つと非常階段の手すりを掴みながらターザンよろしく、リディアン前のコンビニへ着地する。その一連の流れを運悪く眺めていた一般人が呆然と立ち尽くしていたが、ゴミはゴミ箱へ。六道絆は手ぶらで新リディアン音楽院へと足を踏み入れる。念のためグラサンも掛けておこうかと思ったが、どうせならばと

ベルに「クソダサイ眼鏡」と酷評を受けた銀縁フレームの眼鏡にした。
案の定、あっさり見つけた二人だったが首を傾げている。

「だ、誰デスカ!？」

「……………」

「いや、お前らマジで言ってるの？ オレだよ」

眼鏡一つでそこまで印象が変わるわけでもないだろうに。六道絆は眼鏡を外して見せると、二人は顔を見合わせてしらを切った。

「し、知らないデスね。きつと人違いじゃないデスカ」

「うん、きつとそう」

「暁キリカと月詠シラベだろ」

「な、なんでバレているデスカ!? あたしと調の潜入美人捜査官メガネの効果は間違いないのに……………」

「バレるはずがない……………」

「うわー、お前らの反応が心に痛いわ……………」

大人になるってつれーわー。そんなことを思いながら六道絆はすぐ近くの屋台でチョコバナナを二つ買うと、二人に差し出す。

「ほい」

「ありがとデースッ！」

「……………いいの？」

「ん？ 気にすんな」

なんだかこう、いたいけな少女二人を餌付けしている気分になるが多分気のせいだ。傍から見ても多分そんな風に見られているだろうが、まあきつと気のせいだ。通報しようとしている生徒はちよつと思いを留まってくれ、絶対気のせいだから。

調と切歌の二人とベンチに腰を下ろして休憩がてら話を聞く。あれから自分は二課に拘束されたこと、それから情報提供を元に解放されたこと。今は待ち合わせの相手との合流まで暇潰ししていることも話す。それが何故リディアンのお秋桜祭に来ているかと聞かれたら、偶々そういう話を小耳に挟んだからだ。物見遊山に来てみたもの、まさか二人と会うとは思ってもみない。

「んで？ 二人はなんでここにいるんだ」

「それは、デスね……」

「……ペンダントを奪いに来たの」

「誰の」

『えっ?』

「いや、だから誰のペンダントだ」

「………えっと」

「立花、響達の……」

「ああ。アイツ等この学校なのか」

『えっ!?!』

思わず二度見されて六道絆は首を傾げた。

「ちよ、ちよつと待つデス。えっと……」

「ん? 食うか? お好み焼き」

「いただくデスッ!」

「……ねえ、切ちゃん。もしかしてあの人」

「調。そういうのは思っても言っちゃ駄目デス」

「バカ、なのかな」

「だから言っちゃ駄目デスってば! 思っても口にしないのが良い人

間関係をデスね——」

「ほい、お好み焼き」

「ありがとデスッ!」

会話の途中でお好み焼きを渡されて無邪気に喜ぶ切歌と、いつもの無表情でじーつと六道絆の顔を見る調。アインフェリエルの思惑も、引いては二課に協力しているわけでもない六道絆の考えが読めなかった。もしかすると本当に何も考えていないのかもしれない。

「あなた、何を考えてるの?」

「なーんも考えてねえぞ」

「……お気楽なのね」

「こんな大人になるなよ、二人は」

『ならない(デス)!』

「ハッキリ言えるようで安心した。んで? ペンダント奪いに来たんだろ? 手伝うか?」

「だ、だめデス！ これはあたしと調がやるべき任務なのデスッ！」
「そっか。がんばれ」

『えっ』

「いやほら、ぶっちやけオレって部外者だしな。協力者だったって役に立たねーし。だから、まあなんだ！ がんばれ、二人とも！ メシも食ったし大丈夫だろ」

根拠の無い自信とともにサムズアップして立ち上がる六道絆を慌てて切歌が呼び止めて、音楽プレーヤーを渡した。

「これ、返すデス！」

「ああ、そういや渡してたんだっけな。サンキュ」

「……手伝って、くれないの？」

「オレみたいな唐変木頼ってオシヤカになるくらいなら、二人で頑張った方がマシな結果になると思うぜ？ そりゃあ、ヒビキ達ぶん殴ってペンダント奪えって言うなら簡単だけだよ」

「そ、それはそれで、こう……とにかくだめな気がするデス！」
「だろ？」

装者であるとか以前に、人として色々危険な気がする。主に倫理的とか道徳的に。

「だから、オレみたいな適当お兄さんからはチビッコ達を応援するぐらいいしか出来ない。頑張れよーキリカ、シラベ」

「……言われなくても、頑張る」

「そうデスよ」

適当に後ろ手を振りながら後にして、ついではらばとリディアン音楽院の中を歩く。せっかく一般開放されている秋桜祭。どうせなら食べ歩きでもしたいところだ。

——六道絆が食べ歩くこと十数分。偶然すれ違った相手は、クリスだった。そのまま走り去ろうとして、急制動から綺麗に百八十度ターン。かと思えば眉をつり上げて指を突きつけてくる。

「テンメエ、何しに来やがったッ！」

「遊びに来た」

「えっ、あつ、お、おお……!?!」

即答されて思わずたじろぐクリスに、六道絆はクレープを差し出す
が生唾を飲み込み込みながら首を横に振られた。

「い、いらねえよ!」

「そんなに先急いでるとぶつかるぞ?」

「うつせえ。アタシの事なんてほっとけよ!」

「そんなカリカリすんなよ。のど飴いるか?」

「いらねえつての!」

残念に思いながら、六道絆は屋台で買ったストロベリーのクレープ
を頬張る。背後から生徒達の呼び声に振り返ると、クリスが逃げ出し
た。その足の速さに追いつけないと見たのか、徐々に速度を緩めて六
道絆の前で止まる。

「もおく雪音さん。なんで逃げるかなあ……」

「雪音さんのお知り合いですか?」

「え? あー、まあそんなところか」

戦場で出会ったとはいえ顔見知りには違いない。そういえば、と銀
縁フレームのメガネをかけていたのを思い出した。普段からそうい
うアクセサリとは無縁な生活をしていたので何か違和感を覚える。
だが、素面であまり街の中を歩くのも好ましくないので買ってきたグ
ラサンを用意した。それにクリスのクラスメイト達が少し顔を赤ら
めている。

「もしかして……親戚の方、とか?」

「髪の色とかよく似てるし……そうかも」

「残念ながら違うんだなーコレが。しかし、クリスが妹ねえ……」

去って行った背中を思い出して振り返る。あんな風に小生意気で
素直じゃない妹がいたら、自分も少しは血筋に愛着でも湧くのだろう
か。だが、生憎なことにそこにあるのはただ憎悪だけだった。切つて
も切れない血筋に抱く怨恨は絶やすしかない。

「そうならそれでどれだけいいことか。追いかけるのはいいが、転ば
ないようにな」

「あの、もし良かったら……お時間があつたらでいいんですけどこ

の後コンサートホールに来ていただけませんか？」

「なんかあるのか？」

「はい。実は私達、雪音さんに歌ってもらおうと思って……」

「へえー……そりゃあいいな。モグ」

クレープを食べきってから指先についたクリームを舐め取り、ビルの屋上に視線を見やる。そこではヴェオが欠伸をもらしており、退屈そうにしていた。もうしばらくは放っておいても大丈夫だろう。

「そういうことならお邪魔しようかね」

「じゃあ、私達は雪音さんを追いかけるのでこれで！」

「転けんなよー」

仲良く走り去るクラスメイト達を見送って、六道絆はコンサートホールへと足を伸ばすことにした。

Tr. 16 開戦にして閉幕

——暗いコンサートホールは満席だったので、六道絆は適当な場所
で壁に寄りかかりながら秋桜祭の音楽コンテストの様子を眺める。
どうやら優勝者には生徒会から権限の範囲内で願い事が一つ叶えて
もらえるらしい。景品はともかく、クリスの歌を楽しみに待つ。しか
し、今度はここで見覚えのある顔がこちらへ歩み寄ってきた。響と、
もう一人。廃病院のアジトでは顔を合わせなかった相手だ。黒髪の
少女は礼儀正しくお辞儀してきたので六道絆も会釈に留める。

「バンさんも秋桜祭に来てくれたんですね」

「んー？ まあ、偶々な」

「響。この人……」

「この間私が助けた人。六道絆さん。話してみると意外と良いお兄
ちゃんって感じだから、仲良くなっちゃって」

「すみません。響がお世話になってます」

「いやあ、オレの方がむしろ迷惑かけてるくらいだ」

「私、小日向未来です。えっと、バンさん……でいいんですよね」

「ああ。姓名で呼ばれんのは好きじゃなくてね。それならいつそ、
ロックって呼んでくれた方がいい」

「でも、なんでロックなんです？ まさか六道だけに？」

「かもしれないな。ベルのやつならありうる」

あまりに安直すぎるが、多分半分くらい嫌がらせのつもりだろう。
偽名のおかげで何かと行動が楽なのも事実だがそれにしたって嫌味
がすぎる。

「オレの偽名はロック・ヴァルハルト。どこのなに人だか知らねえが、
確かベルは一応日系イギリス人……って設定で付けてたな」

「ほええー……なんかこう、カッコいい感じの名前ですね。ビジュア
ル重視っていうか、すごくバンさんらしい気が」

「そうかあ？ オレからすりゃあ嫌味にしか聞こえねえんだが。ま、
好きに呼んでくれ」

(というか、偽名って堂々と言っちゃってるけどいいのかな……響が言うなら悪い人じゃないんだろうけれども……)

未来のそんな疑問をよそに始まるコンテスト。席に座る二人に手を振って、六道絆はその様子を見守っていた。

(……そういや、リードはもう日本に来てんのか？ ま、いいか。アイツが来たら狼煙の一つや二つ焚いてくれるだろうし、そんな時はこっちから出向けばいい話か)

アインフェリアルで使っている無線機を切歌に渡したものの、音楽プレーヤーと一緒に返してくれなかったということは MARIA が持っているのだろう。もしそうなるこっちはこっちで身動きが出来ないのだが、はてさてどうするか。

「それでは、歌っていただきましょう！ 電光刑事バン！」
「……………」

ステージの上には残念な感じの衣装でコスプレした三人組がいた。司会の生徒もノリノリな様子だが、それはそれとして。何故よりによつてそれを選んだそこな三人娘。喧嘩売ってるのなら相手が例えいたいけな女子高校生であっても手加減しない。そんな物騒な事を考える六道絆だった。——結果は、まだ一番の途中であるにも拘らず鐘一つという残念な結果に終わっていたが。ともあれ、だ。結果はともかくとしても当人達だけでなく会場が和やかな雰囲気が終わった点は評価したい。

六道絆がコンサートホールで歌唱コンテストを傍観している間に、彼は待ち合わせ場所に到着していた。初めての日本で心躍るものにも多数出会ったものの、それはあくまでも彼の心情を揺り動かすだけに留めた。か

集合場所に集まる一団は、黒人男性が複数名。そして隣に並ぶのは白人男性が僅か。過去の因縁からあまり芳しくない友好関係であっても、同じ組織に所属する彼らは別け隔てなく接していた。それが仮に表面上の付き合いであったにせよ、それは喜ばしいことだ。それは主に組織の頂点に立つ彼の目標であり理想でもある。その点におい

ては彼らは非常に協力的であったと言えるが、果たしてそれが本当に過去の歴圧を払拭した結果であるかどうかは分からない。体裁を取り繕ったところで無駄なのは重々承知しているはずだが……。

「リード様」

「やあ。久し振りだね。どうだね、日本観光は」

「順調です」

「それはよかった。私もここに来るまで二時間ほどかかったよ」

そこは、東京の都心。通常であれば一時間もあれば迷うこと無くたどり着くはずなのだが——それは単に、リードと呼ばれた男性が迷った結果だ。それに苦言を呈するどころか朗らかに笑って済ませる一団は、友好的に手を差し出す。

「無理ありません。この国はあまりに魅力的に過ぎる」

「うん、そうだね。消してしまうのはあまりに惜しい。だからこそ信じたい——そして、私も出来ることならばこの国に手を出すのは後に回したかった」

「ですが——」

「ああ。だからこそこの国が我々の最初の犠牲者だ」

「始めますか。我々の快進撃を」

「そうだとも。我々は人類に他ならない。ならばどのような結果になろうとも、我々に敗北などあり得ないのだから」

「我らの敗北が人類の勝利」

「我らの勝利が人類の勝機」

「^{勝利}Sieg Heil」

「Sieg Heil Victoria」

「では、始めますか。人類の先導者、リード」

「ああ。始めよう、私の全幅の信頼を持って人類に絶望と混沌と恐怖を叩きこもう。死者の怨恨に負けぬほど彼らの生命は満ち溢れているのだから」

それは静かな狂気。慈愛に満ちた凶刃。全幅の信頼を裏切ることはないと知っておきながら彼は人類に敵対する。脅かされる生命を救う優しさがあるのだと信じて。

「仕込みは済んでいるのかい？」

「はい。貴方の入国する、四日ほど前に」

「それはよかった。君たちを先んじて日本へ送り出して置いて正解だったということかな」

「滅相ありません」

「じゃあ始めよう。いいかな」

「無論です。我々はその為に『死んだ』のですから」

「それもそうか。うん、そうだね——そうでなくては我々が死んだ意味が無い」

遍く人類には悉く価値がある。無為を理由に生まれてきた人命などどこにもないのだから——それがリードの心情であり絶対の信条。だからこそ今現在、この星に存在する七十億の人類は『救済されて然るべき』であり『絶対勝者』で無くてはならない。

だから、もしここで。もしもたった一人の死人が執り行うテロ活動で屈してしまうのならば、そこまでということ。死人にすら値しない生命であるならば、死者にも劣る生命であるなら価値などない。死して当然だ。それは生者の足を掴み、地獄へ引きずり落とすだけの無知蒙昧。

「算段は？」

「まず、交通網を遮断します。後に発電の主となる施設の破壊。継いで外部への連絡手段の断絶を試みます」

「ふむ」

「この時、人口密度の低い場所ではなく過密場所であるのが狙いです」「というと」

「人は集団での行動において自意識が低下します。つまり、自己意識が低い。これは『他の誰かがやるであろう』という積極性の低下でもあります。ならば『自分で無くてはならない』という状況を作り出します」

黒人男性の指し示す地図には、都心へ繋がる交通網の破壊が示されていた。

「ですが、これに日本政府は動くでしょう。並びに軍……いえ、自衛隊

も。そちらへの配慮は如何しますか」

「そうだね。外部からの救援が望める状況であるなら、それに随人も多いだろう」

「分かりました。〃排除〃致します」

「察しが良くて助かるよ」

「近隣の駐屯地もすでに調査済です。補給ルートの算段もしておきましよう。可能性として最も高いのはヘリによる空輸でしょう」

「ならそれを目前で墜落させたほうがより効果的だ」

「そのように配慮します」

「〃それでも〃」

「ええ。人は〃それでも〃立ち上がるでしょう」

リーダー格の黒人男性が部下に指示を飛ばし、他に待機している仲間へと連絡を飛ばす。それにすぐ行動を起こす様を見て、リードは目を細めた。

「もし……」

少しだけ悲しそうにしながら、呟いた言葉。その後待ち受けている惨劇を想像しているのだろう。

「もし、それでも彼らが心折れたその時は」

「ご安心ください。私が――」

黒人男性がポケットから取り出したのは、シンフォギア装者のペンダント。

「私が、この命を持って。全身全霊で臨ませていただきます」

「……嗚呼。分かったよ、そういうことなら私も現地で立ち会おう」

「存分に」

互いに背を向けて、歩き出す。だが、すぐに黒人男性は立ち止まった。

「リード様」

「うん？」

「私との出会いを覚えていらっしやいますか」

「当然だとも。キミとの出会いはブラジルだったね。年齢三十六。名前はハファエウ。私と出会ったのは退役後のスラム。麻薬密売人

だった、覚えているとも。忘れはしない」

「……ありがとうございます」

「忘れるものか。キミの命を誰かが代わりに務めるなど誰にも全うできないのでから」

「そのお言葉だけで、私は人をやめる覚悟が出来ました。リード様、貴方に会えて私は救われました」

「……止してくれたまえ。私は、私の手の届く誰かをこれから先、助けなくてはならないのだから」

——そして。その日、戦後最大にして史上最悪のテロが日本で幕を開ける。

第一節：潜む狂気と挑む勝機

Tr. 17 鮮血の斬姫

エアキャリア内で待機していたベルの通信機が震えた。相手は組織の長たるリードからだ。それに何度か相槌を返すと、素っ気なく通話を終える。

「――始めるそうよ、私達のボスが」

「っ……今からでも計画を修正することは」

「出来ると思う？ とつくに仕込みは済ませている。ええ、貴方達が世界を敵に回したその日から。それから一週間も待ってあげたの。じゃあこれから先どれだけ待ちぼうけ食らえばいいのかしら？ 貴方達が各国の政府に交渉を持ち込むまでの間に」

ベルの言葉に、マリアは何も言い返せなかった。彼女はあくまでも協力者という体裁を保つためだけに此処で大人しくしている。もし、ここで手を切るというのなら、それは物理的手段にも応じるだろう。シンフォギアを扱えるのは自分だけ、ウエル博士もナスターシャ教授も言ってしまうばただの人間だ。身体の半分近くを殺人人形と化しているベルに抵抗出来るはずがない。

（マムを守るのは勿論、だけどウエル博士も守りながら彼女と対等に渡り合えるかなんて……）

それだけは自信がなかった。しかし、エアキャリア内のリーダーに接近する反応が捕捉される。相手は米国の特殊部隊。それにベルが眉をつり上げた。

「へえ……」

「こうなった以上、仕方ありません。マリア。貴方に排撃を命じます」

「排撃って……!?! 相手は、ただの人間なのよマム」

「ですから命じているのです」

「ッ……!」

戸惑い、躊躇うマリアを横目で見やると呆れたように肩をすくめる

ベルが立ち上がる。

「つまりは『殺せ』ってことでしょう？ いいわよ、それくらい。私が代わりにやるわ」

「えッ!？」

「仮にも貴方、米国トップアーティストでしょ？ それが人殺しなんて洒落にならないわよ。だから代わりに私がやってあげる。本当は荒事なんて管轄外だけどね」

ぶつくさと文句を言いながら左手の袖口のボタンを外し、上着を脱いだベルは口惜しそうにスラックスを見下ろしていた。だが、靴だけは脱いできつちり両足揃えて置いておく。

「むしろ、そんな覚悟でよくやろうと思ったわ」

吐き捨てるように残して、エアキヤリアを降りるベルを止める暇など、マリアに有りはしなかった。何故なら、彼女の突きつけたその一言は深く心に突き刺さっていたのだから。

米国——アメリカ人。アメリカ人か……。ベルはそう心中で呟きながら舌打ちを漏らす。

「ああ、まったく。ピザくせえ……」

大嫌いな日本人の口調そっくりそのまま真似したような暴言も気にならないくらい、機嫌が悪かった。一人でも二人でも三人でも、とにかく目につく人種は差別なくなます切りにしてやりたい衝動に駆られてフルール・ベルモンドは倉庫の両端を発破を掛けて突入してくる米国の特殊部隊の前に立つ。突撃銃を構える相手も困惑していた。何故なら——そう、何故なら自分は『死んでいる人間』だからだ。

欧州異端技術の神童。齢十五にして研究に携わる稀に見る理解者。だからこそ誰にも理解されなかった。それは、血の繋がった両親でさえにも。

ただ、喜ぶ顔が見たかった。一秒でも多く両親とともに時間を過ごしたかっただけの子供の純粋な思いを誰が咎められようか。それが、大人達の言う倫理や道徳に反する道であったとしても——異端技術の道ですら外れようとも。

フルフェイスヘルメットで顔の窺い知れない特殊部隊は困惑していた。命令には聞いていたであろうが、誰も知らされていないだろう。そこに立つ人物がどこの誰なのかを。あくまでも表向きは武装組織「フイーネ」の制圧であっただろうが、そこに立つのは死人であり、また別の名を――。

「……『レディ・ハーケン』――?」

「バカな、欧州の斬姫がなぜ此処に……!?!」

「理由はどうでもいいのよ、アメリカ人」

“右手”で髪をかき上げながら、フルール・ベルモンドは自分に言い聞かせる。私は機械、裁断機。感情も何もない鋼鉄の凶器。世界を刻む怨恨。

「私がついて、お前達が居る。だから『斬る』――それだけ」

「――撃てエツ!」

そう、私は死んだ人間。死人が死を恐れることなど無い。何故なら私は死人だから。

バシヤンツ――!!

両脚の踵が“展開”する。踏み込むと同時に地面を蹴るのは義足。宙返りしながら左腕がシャツの袖を切り裂きながら拡張された。前腕部へ仕込まれていた短刀状の内蔵武器を展開して、手短な一人の首を風いだ。“逆関節”となった脚が踏み込む、地面を滑りながら両足から突き出すサーベルが特殊部隊の脚を切り落としていく。身体を反転させて、回転しながら舞うように振り回す剣は容赦なく関節を削いでいった。動きの鈍った相手を放置して飛び上がり、脚を広げた先の兵士が首と胴体を切断されて音もなく崩れ落ちる。

狙いを定めた兵士のヘルメットの風防を突き破って射出されるのは、左腕の人差し指。その間を繋ぐ鋼糸を手繰りながらも一人の兵士の首へと巻きつけた。それを外そうと藻掻くものの、肉にまで食い込んだそれを外せるはずがない。

「ごめんなさいね」

「がッ――……!?!」

鋼糸を巻き取りながら呟いたベルの言葉を、果たしてその兵士は聞

き取ることが出来たのだろうか。首から下を鮮血に染めながら崩折れる兵士が事切れるのを見届けることなく、ベルは既に兵士たちの間に降り立っている。同士討ちを恐れて引き金に掛けた指を躊躇っている間に一人、また一人と血飛沫と共に倒れていった。

そして、そこに立つのは一人だけ。――斬姫。通称を「レディ・ハーケン」とされる、現代のジャック・ザ・リッパー。遺体を容赦なく慈悲無く裁断することから裏の世界で忌避されている呼び名の怪異。

鮮血の滴る鋼糸を巻き取りながら、破れた袖口とスラックスの裾を見て深く息を吐いた。

「このスーツ。結構な値段したのよ？ 幾らすると思ってるの」

愚痴をこぼしながら、ベルはポケットからハンカチを取り出すと左手に付いた僅かな血液を丹念に拭き取る。まだ辛うじて息のある隊員は肩口から溢れる血を押さえていたが、そう長くはないだろう。落ちていた拳銃を拾い上げて残弾を確認する。

「何故……貴様、が……！」

「お仕事よ。理由なんて聞くだけくだらなと思わない？ 貴方達と同じなんだから」

ヘルメット越しに銃口を突きつけるベルは、エアキャリア内から出てくる人の気配に手を止めた。ソロモンの杖を手にしたウエル博士と向かい合う。

「なに？ ノイズでも使うつもり？」

「ええ。此処も特定されてしまった以上は移動するしかありません。ですが――」

見やるのは、無残に転がる特殊部隊の亡骸。

「このまま残しておくのもどうかと思ひましてね」

「そうね。でも、ノイズの反応を検知されるわよ」

「どうせ移動するなら綺麗さっぱり何も残さない方がいいでしょう？」

立つ鳥跡を濁さずとも言いますし」

「……」

「日本のことわざですよ。知りませんか」

「悪かったわね……」

「少しだけ機嫌を損ねたのか、ベルは肩を揺らしながらウエル博士の横を通り過ぎる。その後ろでソロモンの杖を掲げるウエル博士をエアキャリアのモニターから眺めることしか出来なかったナスターシャ教授も、マリアに声を掛けることはせずに目を伏せる。

(……アインフェリアル。私達の知らない、大いなる脅威……我々の武装蜂起が新たな脅威の呼び水となってしまった)

「こんなことを望んだ訳ではない。だが、軋轢に一番心を痛めているのは、ただ殺戮を止めるわけでもなく見ていることしか出来なかったマリア。泣き崩れるそこへ、涼しい顔でベルが戻ってきた。スーツの上着を羽織り、靴を履き直している。

「さて、ナスターシャ教授？ 移動の準備した方がいいんじゃないのかしら」

「そうですね……マリア。立ちなさい」

「……分かってる、分かってるわ。ママ」

「切歌と調を回収した後、場所を変えましょう」

「涙を拭い、立ち上がるマリアはベルを睨みつけた。

「貴方もまだ同行するつもり？」

「ええ。貴方達と一緒に行動しないとあのバカロックと合流できそうにないし。人殺し、なんて嫌悪しないでもらいたいんだけど」

「それは、虫が良すぎる話だと思わないの！」

「全然？ 貴方の代わりに私が出張った。それだけだから」

「ッ——」

「でも少し安心したわよ、私」

「何を……」

「私みたいな中途半端に人間辞めたのと違って、貴方はまだ他人を思いやれるだけ優しいから」

「今しがた殺人を犯した自分の左腕を見下ろす。機械の腕。造り物の、血の通わない冷たい義手。そして両足の義足。それでも心の芯まで造り物になったつもりはない。それでも、他人を思いやることなど忘れてしまった。

「だから、これは先輩としてのアドバイスよ。マリア。血に汚れることを恐れるのが当たり前で普通なの。それを呼吸するように出来なきや戦争なんてやってられないわ」

「……役に立つかどうかはともかく、助言はありがたく受け取ってあげる」

「その点、あのバカロツクはある意味才能よ。人殺しだけは絶対にしないと豪語してるし、実際にしてないんだから。本当、憎たらしいわ……」

心底恨みがましそうに呟いて、それきりベルはおとなしく黙りこむ。

移動を開始するエアキャリアの中は沈黙に包まれている。急ぎ、ナスターシヤ教授は別行動中の切歌と調にランデブーポイントまでの移動を促した。どうやらペンダントの奪還まで後一歩のところまで来ていたようだが、そうも言っていられない。今はそれよりもどこかに身を隠す事が先決だ。それに渋々従った二人と無線を切り、操縦に専念する。

ウエル博士はと言うと、完全聖遺物であるネフィリムの様子を見ていた。あれからさらなる成長を遂げて、その体軀は既に成人男性でも見上げるほど。身体を丸めて今は眠っているようだ。

ベルもそれには深く立ち入ったことは聞こうとはしなかったが、しきりに時計を確認する。

「なにか気になることでも？」

「ええ、まあね。そろそろうちのボスが始める頃だろうから、できるだけ都心からは離れた方がいいと思って——」

そうベルが言い終えるか否か、際のタイミングで突如として東京から黒煙があがった。発電所近辺、空港、そして駅。高速道路に高架橋。ありとあらゆる場所で爆発が同時に起きている。

「……始まったみたいね」

「フウ〜♪ 派手にやりますねえ、中々」

「物流と交通網の遮断が目的だからね。なるべく人的被害は出さない方向で」

空港は滑走路が破壊され、電車も線路の一部を爆破されていた。そしてノイズ被害が起きて住民の放棄した区画、空きビルなども同様に瓦礫の山と化している。それは恐怖の助長効果を狙ったものだ。自分達の生活圏に近ければ近いほどその猛威の接近は心を脅かす。特に、普段から通っている学校や馴染みのある場所には。

「ですが、たったあれっぽっちですか？」

「ええ、そうよ。派手なのは最初だけ。後は事態の収束を眺めるだけ」

「そんなのがテロと呼べるんですかねえ？ 自分達の脅威を知らしめて、身の危険が及ぶだけでは？」

「貴方達と同じじゃない？ でも決定的に違う点がある」
「と、言いますと」

「あの爆破が起きて、遮断された都心に、今、うちのボスが居る」ということよ。安全圏に逃げたりしない」

「ハア!? 気は確かなのか!」

「ええ、正気で冷静。あの人は自分の目で見たいそうよ。その苦難と困難に挑む人類を」

一瞬だけノイズが走り、次いで映像が強制的に切り替えられる。電波ジャックによって流される映像は画面に『SOUND ONLY』とだけ表示されていた。

『——あ、あー。これでいいのかな？ ——オホン。ありがとう……』
まるでホームビデオカメラのように開幕する演説は緊張感に欠けている。音声を電子加工されていたが、それでも温和で柔らかな声色の雰囲気だけは消えていなかった。まるで親愛なる隣人のように馴染み良く耳に入ってくる。

『我々は、アインフェリアル。俗に言ってしまうえば、まあテロリスト、或いはその集団。うん、テロ組織だ。突然の挑戦状に驚くのも無理はない。君は、或いは君達の記憶に新しいであろう一週間前を思い出していたきたい。——そう、武装組織フィーネの蜂起。我々はそれに感化された団体であり、同じ志を抱いている同志だ』

「私達に罪をなすりつけるつもり？」

「まさか。むしろ好都合じゃない。後々の保身になるわよ」

睨みつけるマリアに、ベルは軽く答えた。

『この一週間、人類を静観してきた。だが、それはフィーネも同様のことだ。彼女達の挑戦に対し身構えた各国政府の努力は水泡に帰した。しかしそれで終わらせてしまつては、あまりに退屈だろうからこちらから刺激的に動くことにした。手始めに、まずは東京——そう、日本だ。示威行為で人死は出さないように配慮したつもりだが、もし巻き込まれた人がいたら黙祷を捧げる』

どの口が言うのか。だが、その口ぶりが洒落や冗談。或いは挑発目的のものではないのは明白だった。

『——さて、諸君らも疑問に思っているであろう。何故このような行為に及んだのか。それは話してしまえば簡単なことだ。我々アインフェリアルは、人類統一を目下の目標としている。世界は平和だろうか？ ノイズの脅威に脅かされて夜も眠れないだろうか？ 三ヶ月前のルナアタックを他人事だと思っではないか……だが、敢えて言おう。今現在、世界は緩やかな平和に満ちていると。人類の総数、約七十億人が過ごすには些か争いが絶えない状況ではあるが、対岸の火事ならまあ日常的なことだ』

ノイズを操るソロモンの杖をウエル博士が所有している。偶発的に発生するノイズプラント「バビロニアの宝物庫」からのノイズ出現を除けば。

『だが、こう考えたことはないだろうか。人類にとって本当の災害は何か？ 天敵とは、何なのか。私の声に耳を傾けている諸君らは考えたことはないか。——そう、察しの良い方ならばお気づきかもしれない。人類の本当の災害は、人的災害ではないかと。認定特異災害ノイズがいなくなった後、それは顕著になることだろうか』

「なに、を……世迷い言を!？」

『法で裁かれるべき悪は、なんだろうか。誰が引き起こしているものだろう。犯罪者も人間であり人権がある。それを剥奪するということはすなわちモノである。ならば死体はどうだろうか？ 死後の世界へと魂が導かれたソレは、果たして？ 故にこそ我々は、アインフェリアル。死した戦士達。だからこそ敢えて挑戦しよう。私は見たい、死後の世界から。生命に満ち溢れた人類へ反旗を翻させていたたく。苦難と困難と恐怖と絶望を乗り越え、人類一丸となってこの人的災害を乗り越える姿を』

今頃日本政府は大騒ぎだろう。そして、二課もまた情報の特定に全力を注いでいた。

『まずは日本。その都心となる東京だ。爆破しておきながら言うのも変かもしれないが、どうか安心して欲しい。私は人を殺したいわけで

はない。貴方と、貴方の隣人が、困っている誰かに手を差し伸べ、共に困難を乗り越える。その姿が見たいだけなのだから。これ以上危害を加えるというのは本意ではないのだ。だが、平和が長引けば人は生きる力が衰えていく。特に現代ではあまりに利便性に富んでいると思われる。だから、まずは交通機関を麻痺させていただいた」

「貴方のボスはなにが狙いななの！」

「今しがた言ったでしょう？ 人類統一、いずれ来る超常災害に人類が負けないようにするのが我々の目的。そのための障害よ私達」

「ッ、そんなの！ 最初から勝ち目なんてないじゃない！」

「いいえ、違うわ。どう転んでも私達の勝利は揺るがないの。私達の挑戦を人類が乗り越えれば目標達成。それに人類が屈すれば、私達の目標は達成されないけれどもテロの勝利……私達の合言葉はね、マリア。『Siege Heil』なのよ」

敗北などあり得ない。もし、彼らが本当に敗北するというのなら、それは人類絶滅だ。

「なぜ、ドイツ語なの」

「さあ？ 私が決めたわけでも、彼が決めたわけでもないわ。自然とそういう言葉があったからじゃない」

『——さて、話が少々長引いてしまったかな。最後に一つだけ忠告させていただく。もしも、そうもしもの話だ。私の望む結果ではなく、自己保存に帰結した結果。他者から奪い、弱者を虐げる者だけが生き残った場合、私はそれらをこの世界から“排除”させていただく』

「人類から平和を奪い、弱者に脅威を押しつけておきながら本気で言っているのかこの男は！」

「あら、それを助けるのが力を持つ者の務めでしょう？」

『私は、心底願うよ。そのような結果にだけはならないように。それでは——Siege Heil』

そして映像が途切れ、何事もなかったかのように時間が流れる。

「……切歌と調は大丈夫かしら、ママ」

「あの二人なら大丈夫でしょう……」

幸いにも、アインフェリアルボスのボスは今回の行動において人的被害

を最小限に止めたかったようだ。その上、あの二人が今いるのもリ
ディアン音楽院。危険に晒す意味も価値もない学園である。そうい
う点では、非常に人道的であると言えた。

(こうなった以上、見過ごしておくわけには)

「ああ、言っておくけれども変な気は起こさないでね」

「まだ何かあるっていうの？」

「どうしてわざわざ交通網を麻痺させて、連絡手段を奪わなかったと
思っているの？」

「外部との連絡手段を残しておいた、理由？」

あれだけのことをしておきながら、通信設備だけは無傷だった。発
電所も、その付近の道路などの被害に留めている。

「ま、見ていれば分かるわ。良かったわね、このへりが超常のステルス
性を有していて」

「——まさか!」

「そのまさかよ。外部への連絡は許可する。だけど、外部からの干渉
は一切許さない”。空からの侵入なんてその最たるもの。だから被
害状況を伝えるために報道へりなんて飛ばした日には」

言っている側から、テレビ局から飛び立つ報道へり。それはエア
キャリアとすれ違い、黒煙のあがるビル群へと向かい——そして、撃
墜された。

「ああなるわ」

「……助け合う、人類が見たいんじゃないの」

「そ。放っておけばそのうち食料も尽きていくでしょうね。だけどそ
の危機感を忘れたら私達があんな派手なパフォーマンスした意味が
無くなる。取り残された人達だけでどうにかしろってことね。助け
合えば、何でも出来るでしょうから」

「だけどそれでは、力のある者だけが生き残る!」

「そんなことさせると思う? うちのボスが。むしろそういう兆候や
傾向のある組織や個人を潰して回るわよ」

「ッ——!」

歯を食いしばるマリアはエアキャリアの操縦に専念することにし

た。
どこまでも、話の通じない狂人達だ——そう嫌悪しながら。

リディアン音楽院を後にして急いでいた切歌と調の二人だったが、街のスクランブル交差点で足を止めてその一部始終を聞いていた。手を繋いで、何事もなかったかのように緊急報道に勤しむニュースキャスターを見上げながら。

「……切ちゃん」

「調……あたし達、違うデスよね。あんな怖いことがしたかったわけじゃないデスよね？ マリアだって」

「うん……そうだよ。こんな事、したいワケじゃない」

アインフェリアル——それじゃあ、あんな風に気前よく自分達に食事を振舞っていた六道絆も同じ事を考えているのだろうか。そう思うと、切歌は少しだけ胸が痛んだ。

そんな事を考えて立ち止まっている暇などなくて、二人は再び走り出す。

そして、リディアン音楽院でもまた、響達の元へ弦十郎から連絡が入っていた。まず廃棄されていた運送会社の倉庫からノイズの反応検知。そこらはすぐに収まったが、間違いなくソロモンの杖だろう。そして、今の放送。二課でも場所を特定しようとしていたが無駄に終わった。音声からのデータ抽出も何層にも重ねられた電子加工によつて判別が難しいとのこと。それに六道絆は適当な相槌を返していた。

それにクリスが掴みかかる。

「お前……！ 自分が、何してんのか分かってんのかッ!？」

「あー？ オレが何してるって秋桜祭でメシ食ってただけだろうがよ。何もしてねえじゃねえかよオレ」

「そうじゃねえ！ こんな、あんなテロやっというて知らんぷりしてんじゃねえぞッ！」

「んじゃどうしろと。何か？ うちのボスを殺せと？ ワリイがオレ

は人殺しだけはしねえって決めてんだ。どんな理由があろうとそれだけはやっちゃならねえってな」

「そんなお前の理念も信念も知ったことじゃねえんだよッ！　なんで——！」

クリスの脳裏に甦るのは、幼少の心的外傷。両親と赴いた南米、そこでテロに巻き込まれた。今、日本で再び同じようなことが起きようとしている。その仲間が目の前にいる。腸が煮えくり返って沸騰しそうな勢いで怒鳴りつけるも、六道絆は涼しい顔で面倒そうにしていた。

「んじや、テメエが殺せよ」

「えっ——」

「そう遠くないうちにボスと会うから。そんな時に殺しやいいじやねえか。別にいいぜ、オレは。友達に違いはねえが、生きてりや死ぬもんだ。遅かれ早かれな」

「……」

「二番手つ取り早い方法だろ。アインフェリアルメンツが何千人と死のうが知らねえが、頭潰さなきゃいくらでもやり直せる。少なくともあそこまで本気で言ってるのはうちのボスだけだ。生身のオレにミサイルぶつ放した時と同じように、撃ちやいいだろ」

「っ——」

あの時は、ノイズがいた。ウエル博士もいた。ソロモンの杖もあった。だけど、それは過去の過ちを繰り返すのと同じだ。

力を持つ奴らを潰せば平和になると思っていた、あの頃と。

「で、やんのか。やんねえのか。どっちだ」

「……アタ、シは」

「人を殺して、また友達と手を繋げると思うなよ、クリス」

「——」

その一言だけで、クリスは何も言い返せなくなった。面倒そうにしていた六道絆も、真剣な面持ちで見下ろしている。

「お前が何をどう良く思って、不満なのかオレは知らねえ。知るつもりもねえし過去を詮索する気はねえよ。だけどお前のそのただなら

ない怒り方から察するに、ワケありみてえだな。過去にテロに巻き込まれでもしたか？」

「ッ!？」

身体を竦ませて見上げてくるクリスの目尻に涙が溜まる。だが、六道絆はそれでもやめない。

「殺されたから殺して、それで終わりになると思うなよ。一度道を踏み外せば、後はとことん墜ちてくだけだ。人殺しはどこまでいっても人殺しだ、どんな理由があろうと」

「じゃあ、アタシはどうすりやいいんだッ!? 泣き寝入りしろつてのかよ!」

「んなもん知らねえよ! テメエで決めろ! それが嫌なら、死なねえ程度にぶちのめして裁判所に突き出してやりやあいだろうがッ! それで気が済まねえようなら二度と病院から出てこれねえくらいにぶん殴れ!」

「そんなのただの暴論じゃねえかよッ!？」

「実際にオレはそれで何人か病院送りにしてるし、一生出てこれねえ身体にしてやった。その代わりにオレは何回かムシヨ送りにされてるが、この通りだ」

自慢でも何でもないが、それに何も言い返せない。六道絆は殺人を忌避している。それがどのような理由であるかなど響達には分からない。それでも、何処か違った。アインフェリアルボスの掲げている目的から大きく外れた意思を感じる。

「いいか、これだけは言っておくぞ。死んだ人間は何やつても生き返ったりしねえんだよッ! 死んだらそこまでだ。葬儀で冥福祈つて来世の幸福でも祈っとけ」

「——アタシの、パパとママはテロに巻き込まれて死んだんだぞ!? それでも同じこと言えんのかよ!」

「手前の不幸を振り回すんじゃないやねえッ! だからなんだ、それがどうした、オレが知るかッ! だったら尚更だ! お前は、お前の両親殺した連中と同じになりてえかッ!」

クリスの胸倉を掴みあげて睨みつける六道絆の怒りも、憎悪も尋常

ではない。今すぐにも有無を言わず殴りかかりそうな手を響が止めようとしていた。だが、六道絆が怒っているのはそうではない。殺されたから殺して、報復しても両親は帰ってこない。そして、その手を血に染めて残るのは自分もまた同じ道を歩んでいく現実だけ。そうならないようにクリスを叱っている。

「六道、お前は何故そこまでして殺人を忌み嫌う」

「オレを六道と呼ぶんじゃないよ」

「……なら、ロック。雪音に対する怒りもそうだが、それ以上に殺人に対する嫌悪感の方が強く窥えると私は見た」

「んなもん言わせるんじゃないよ。物心ついたガキの頃からそんなもん見せられてみる。嫌悪通り越して胸糞悪くて反吐が出らあ。だからオレあゝそれ〃だけはぜってえやらねえって決めてんだよ。酒も、煙草も、博打も、クスリも。全部だ」

六道絆は極道の血族だ。だからこそ、それを最も忌み嫌う。自分も同じになるのだけは嫌だと生まれついた血に逆らって。それでも気性の荒さと喧嘩っ早さはどうしようもないのに、薄々感づいているのかもしれない。

「蛇の道は蛇って言うが、だからオレは嫌なんだよ。オレだって好きで生まれたわけじゃねえんだ。オレがどう生きるかまで他人に決められてたまるか。親だろうが何だろうが」

「……………」

「分かったらいつまでも泣いてんじゃないよ、クリス」

「うるへえッ！ 余計な、お世話だッ！」

袖で目を擦りながら、鼻を吸って六道絆を睨む。

「こっから先、カタギの連中に睨み効かせて幅を利かせるのは裏社会の連中だ。そらそうだな、善良な市民になれねえからそっちに身を落としてんだ」

「……………」

「ああ。クソジジイの事だから躍起になってテロの主犯——まあうちのボスだが。そいつの素っ首切り落とす気だろうよ。当然だよな、突然人のシマに上がり込んでやりたい放題メチャクチャにしてんだか

ら放つといったら面目丸潰れだ。目立つ奴らは、つまり『そういう事だ』

「つてことは、お前……まさか自分の家に喧嘩売ることかよ!？」

「そのつもりだ。だからオレの邪魔すんじゃねえぞ。そんな時はぶん殴るからな」

ポケットからのど飴を取り出すと響にはオレンジ味。クリスマスにはイチゴ味。翼には青りんご味のど飴をそれぞれ渡し、六道絆はリディアン音楽院を後にした。

「生まれついた自分の血に逆らう、か……私には到底出来ないことだな」

「翼さん？」

「いや、何でもない」

「……なんで、あの野郎はアタシをあそこまで止めたんだよ。わっかんねえなあ……ボスを殺すかどうか聞いておきながら」

「それは、多分クリスマスちゃんに人殺しなんてさせたくなかったからじゃないかな？」

「だからそれがわかんねーって言ってんじゃねえか」

問答している二人の横で翼は考えこむ素振りを見せる。ある程度の情報は弦十郎から聞いていたが、あそこまで自分の家を憎悪しているとは思わなかった。なら、何故日本に来て早々に行かなかったのか。このタイミングで――。

「なに考えこんでんだよー？」

「……いや。妙だと思つてな。それならそれで、帰国してから動けばよかつたものを」

「確かにそうかもしんねえけど、アタシ達には関係ないことさ」

「でも、これから先……どうなっちゃうんだろう」

響の不安に、翼もクリスマスも無言を押し通した。

——アインフェリアルルのテロ活動によって封鎖された都心を六道絆は歩く。混乱する市民もいれば、まだ事態を飲み込めていない市民もいた。これから先、取り残された市民たちの手でどうにかこの包囲網を抜けださなければならぬ。とはいえ、それもそう時間の掛かるものではないのだが……「現時点」では。

外部との連絡を取る市民には目もくれず、六道絆は街の様子を空気で感じ取る。それからしばらく歩いて、公園のベンチに座って読書に勤しむ外国人男性の隣に腰を下ろした。

もの優しいな雰囲気、やや垂れた目尻が温厚な人柄を語る。白いスーツも一点物だろう、シワ一つ見受けられない。不遜に腰を下ろした六道絆に不快感を見せるどころか薄く笑みを浮かべていた。

「やあ、久しぶり。ロック」

「十日ぶりか？」

「そうなるね。この国の人達はどう出るかな」

「さあな」

「興味無さそうだね」

「ああ」

「君は、そういう人だ。自分以外の人間に興味が無さそうだ」

「赤の他人が百人死のうが知ったこっちゃやねえ」

「ロック。君が思うほど、人は強くない。君のように」

「だけど——そう続けて、男性はページを捲る。」

「だけど、君は他人の死生に興味が無い振りをしておきながら理不尽な状況を前にすると自他問わずに自分を犠牲にする。その理由は？」

「気に食わねえ。そんだけだ」

「そんな君だから、私はいたく気に入っているんだけどね」

「これから先、計画はどう進めていくつもりだ。リード」

「そうだねえ……」

まるで今日の献立を決めるかのようになりードは考える素振りを見せた。

「二、三日。様子を見るよ。それから決めよう」

「『野犬』の用意は」

「手筈は整ってる。日本は特異災害対策に一役買っているからね、そのお手並みも拝見したいところだ。ところで日本の装者には会ったのかい？ マリア・カデンツァヴァ・イヴとは接触したようだけど」

「ああ」

「どんな人達なのか聞かせてもらえると嬉しい」

「何の事はない、普通の女の子だよ」

「……ふうん」

それにリードは少しだけ興味深そうに頷くと、目蓋を閉じる。

「会ってみたいな。戦場ではなく、普通の彼女達に」

「やめとけよ、人間不信に陥る」

「酷い言い草だなあ」

冗談とも本気ともつかない六道絆の言葉に、笑って返す。誰が思うだろう。この人畜無害な一見して人の良いドイツ人がテロの首謀者であると。その根幹にある信念もまた、世のため人のためと思つてのことだ。とても正気の沙汰ではないが、彼は狂ってなどいない。

「WWⅡから、どれだけ月日が流れただろうね」

「知らねえよ。ジュニアハイスクール中退のオレに聞くな」

「私は学がない人間も嫌いじゃないよ。知識を必要としない人生を送れるのは実に羨ましいものだ」

「嫌味かテメエこんにやろう」

「実際、君はそうじゃないか。私はね、思う時があるよ。人の罪は賢すぎるといふ事なのではないかと」

「無知とは罪なんてどこの誰が言った言葉なんだろうな」

「ソクラテス。正しくは、無知は罪なり。続く言葉は、知は空虚なり、英知持つもの英雄なり。哲学の言葉さ」

「そりやどうも。腹の足しにならねえ知識ありがとよ」

「どういたしまして」

お互いに視線を交わすことなく言葉を交わす。リードはそんな時間を尊いと思っっている。六道絆もまた、そのような時間はかけがえの無いものと思っっていた。アインフェリアルというテロ組織であつても、上下関係など抜きにしてこうした語らいは二人の仲を物語る。

「ロック。君は本を読んで知恵を学ぼうと思わないのかい？」

「思わねえよ。人間、飯食つてクソして寝てりや十分だ」

「その食事を作るための知識も必要と考えたことは？」

「煮て、焼く。火の起こし方が分かれば人間飢えて死ぬこたあねえよ」

「それは体験談かい」

「実体験だ。オレが何年、身ひとつでイギリスの山奥で過ごしたと思つてやがる」

「普通は野垂れ死ぬと思うんだけどねえ……」

「ハングリー精神足りてねえ証拠だ」

それだけで生き残れたら苦労しないのだが、六道絆に言つても通じないのがこの男の恐ろしいところだ。

閉鎖された島国独特の死生観、精神論、そして何より恐ろしいのが、それらを「敢行」するという行動力。胆力、度胸。心臓に針金でも巻いてあるのではないかという麻痺した無謀。世が世ならば、英雄と賞賛されて然るべき男だ。何よりも生存本能が突き抜けている。闘争本能もまた然り。まさに「文明社会の野蛮人」である。悲しくは、生まれる時代を間違えたことか。現代社会においてそのような物は本来、不必要だ。戦乱の世であれば彼のような人間は一国一城の主に成り得たかもしれない。だが現代においては、残念なことに「野蛮人」でしかないのだ。

ベンチの背もたれに体重を預けて、空を見上げる。

「人間は我儘なんだよ。自分勝手な生きもんだ」

「その代表格の君が言うと言得力が違うね」

「殴んぞ。見ろよこの街」

リードはそこで、ようやく読書を中断して顔を上げた。

日本には初めて訪れたが、日本人らしい和洋折衷の成し得る街並み。奇妙なものだが、それが一つの文化として形成されている。それ

を当然と受け止める街に溢れかえるのもまた、諸外国からの知識。だが、それらを前にして不満を漏らしているのは、まさにこの島国の生まれその人。

「造り物が多すぎる。どこ行っても同じだけだな、此処は特にそう思う。山の中で生きてたオレが言えた義理じゃねえけどよ。〃此処で何が食える〃と思う？ 答えは何もねえ」

「……」

「人口過密の割に、その腹を満たす為に必要な食料はどっから出てくる。畑もなけりや田んぼも無え。仮にあっても、ほんのちっぽけな場所だ。オレの生まれた国は弱い。ハッキリ言っちゃまえば弱小で脆弱だ。手前の力だけで生き残れる気がしねえ」

六道絆は、口こそ乱雑だが憂いている。自分の生まれた国を恥じていた。

「なーにが情報社会だ。文明社会だとか高度経済成長だとか、知らねえよ。知ったこっちゃねえし。それでメシ食っていける奴らはいだらうよ。だが、それらが全部無くなってからどうやって生きていく気だ？」

「無くなることはないだらうね。よほどのことが無い限り」

「その、〃余程の事〃が起きたのが三ヶ月前の話だらうがよ。未然に防がれたおかげで今日もオレたちは元気に生きていられる。やりきれねえよ」

「ロック。君は、月の欠片が落下してくれていた方が良かったかい？」
「例えそれでオレが死んだとしても、人類にはキツツイ目覚ましになつたらうな」

世界の滅亡より、人類社会の崩壊を願うような言葉。彼個人が野蛮人である、と言ってしまうえばそれで帰結してしまうだろう。しかし、リードはそれに思うところがあつた。

「結局、最後に頼れるのは自分だけだ。手前の事どうにかできねえならくたばれ」

「そんな世界になったら、私は悲しいよ。人が自分の事だけで帰結してしまう世界はあまりに悲しい」

「だが苦難と困難が降りかかったその時、誰が助けてくれる？ 他人に期待するだけ無駄だ」

「〃それでも」と、私は声を挙げるだろう。私は人を信じたい。その為、に苦難と困難と絶望と地獄を与えるのだから。それに心折れてしまふ人がいたならば、手を差し伸べる。それが人の本質ではないか」

「寝言を言うなよ、リード」

「ロック。私は本気だよ」

「人類なんざこれ以上増えてたまるか。人が生きるためには地球の寿命削らなきゃならねえんだぞ」

「それでも私は人を救うだろうね。人の命は価値のあるものだと思っている。裏切られる時もあるが、諦めない」

「人が人を救えるはずねえだろ。罪を償う為に死後の世界がある、輪廻転生に喧嘩売ってんのかテメエ」

「私は死後の世界の住人だよ。君こそどうなんだい？ 現在いまを生きる人を冒瀆するのもそこまでにしてもらえないか」

「命の価値はテメエが決めるものじゃねえ」

「蔑ろにしている理由も君にはない。人の命は理不尽に平等に価値のある物なのだから」

——それからしばらくの間を置いて、二人は笑い出す。

「いやあ、ハッハッハ。ロック、君は本当に頑固だな」

「つたりめえよ。オレを懐柔できると思うなよ、リード」

「うん。安心した。君が私の思うように強い人で」

「ああ、オレも安心した。オマエの決意が揺るがないようすで」

ひとしきり笑い合ってから、リードはしおりを挟んで本を鞆の中に入れた。その代わりに取り出すのは、一本のカランビットナイフ。六道絆はそれを受け取り、ポケットの中にしまい込む。

「……もし、この世界が——何も無い荒野だったら、どうだろう」

「〃それでも」と、オレは言うね。だが……今よりもちよつとはマシな世界なんじゃねえかな」

「そうだといいね」

「ああ。だといいいんだがね」

どちらともなく、ベンチから腰を上げる。

「気が変わったよ。少しだけ計画を変更する」

「そうかい」

「それで？ 君はこれから、自分の家に帰るのかい？ 十年ぶりだろう」

「オレの顔知ってるやつなんか全員くたばっちまってるだろうな。もちろん」

「ああ、もちろん。『ご挨拶』に伺わせてもうよ。手土産もあることだし」

両手をポケットに突っ込んだまま、六道絆は歩き出す。それに肩を並べて、リードも歩き出した。向かう先は、六道絆の実家にして六道会の本家本元、菩薩組。実に十年ぶりの再会となる家族との対面は、同時に決別でもある。

それは、覚悟していた。後悔もない。あるのはただ、憎悪だけだ。

Tr. 21 恩讐は、慈悲と共に

実に——そう、実に十年に及ぶ歳月を挟んだ帰宅。今、六道絆はアインフェリアルスのトップと共に実家への門を前にしていた。当然ながら、そこには門番が並んでおり周囲を見張っている。だが、勝手に知ったる人の庭。六道絆はいつもに比べて不機嫌さを隠そうともせず、睨みつけながら歩み寄った。相手からすれば二人組の怪しい人物に間違いない。方や白スーツのドイツ人。そしてもう片方は、日本人と思えない銀髪のアウトロー。国際マフィアかと思われても仕方のないことだった。

「おう、待てやアンちゃん！」

「あ？」

「此処がどこだか分かって来てんのか」

「オレン家だよ。それがどうした」

「はあ!? 寝言のたまつてつと殺すぞ！」

「おー、やってみろ三下? 六道銅玄の孫、六道絆に傷一つつけて指詰めるだけで済むと思つてんじゃねえぞ」

顔見知りと思われる黒服は誰ひとりとして居ない。それも当然だ。極道の敵は何も他の組だけではない。人類種の天敵もまたそうなのだから。ノイズによって殺される者も少なからずいる。特に、かつては御仏の南無八幡大菩薩と騙った暴力沙汰など精力的に取り組んで勢力を広げていた。

胸板がぶつかるほど間近にまで接近してくる黒服の男性を正面から見据えて、六道絆は黙っている。ただでさえ平均身長を上回る恵まれた体格でいて、鍛え方が違う。相手方もへ々な喧嘩は売ってこない。度胸だけで言うなら天下第一だ。

「テメエがオヤジの孫だつてどこに証拠がある」

「言つても分かるツラも頭も無さそうだな」

「んだとコラア!? やんのかコラア！」

「やっつたろうか? 暇してんだろ」

怒鳴り声を上げられても眉一つ動かさず、六道絆は相手を睨んだまま動かない。何事かと集まってくる他の組員達だったが、その頃には既に喧嘩を打ってきた相手は地面にのされて六道絆が頭を押さえつけていた。

「十年ぶりに人が帰ってきたつてのに大した歓迎だな」

「コレがジャパニーズマフィアか。実に趣あるね」

「テメーは緊張感つてのがねえのか？」

「それは君の方だろう」

「〃何処の組〃のものかは言うまでもねえ！ クソジジイの所まで邪魔あすんじゃねえぞ！」

声を張り上げる六道絆に、組員達が睨みを効かせても一步も引かない。隣に並ぶリードもまた、そんな威勢を流していた。この殺気と緊張感の只中にあつても温厚な笑みを絶やさないのはある種、異常と見てもいい。

しかし、そんな事態に顔を覗かせた刀傷のある中年男性が六道絆の顔を見て驚愕していた。

「まさか——!? おいオメエら！ 馬鹿野郎、通せ！」

人混みをかき分けて六道絆の前に立った男性は、背丈こそ敵わなかったが横幅で言えば一回りは大きい。だが、頭のとっぺんからつま先まで観察してから深く頭を下げる。

「俺をお忘れですか！ アンタが赤ん坊だった頃から世話してた」

「忘れるかよ。つか、まだ元気してたんだな。神無月かみなづきのとっつあん」

「へい、そりやあもう！」

通称『カミさん』と呼ばれる古株の男性が頭を下げた事で組員達の間にごよめきが走った。それを見苦しいと一喝して、六道絆を指す。

「この方はな、真正正銘オヤジのお孫さんだ！ 俺が言うんだから、間違いない！」

「オレの紹介なんぞいいから通せつつの、とっつあん」

「いや、しかし……今までどこで何してたんですか」

「あー？ 英和辞書片手に手前の足で世界旅行だつっうの」
「日本にはいつ」

「だあーもう！ さつきつから言っただろうが！ クソジジイン所行かせてもらおうぞー！」

「へい！ いやあしかし、立派に育ちました」

「オッサンくせえぞ」

もうそんな歳なもんで。そう返されては六道絆もそれ以上にも言えない。リードもカミさんの案内に続いて敷地の中に足を踏み入れる。

中は、古くから続いている和風の館。武家屋敷を模したものであるものの、そこには現代の技術も密かに盛り込まれていた。それらを目の当たりにしてリードも興味が惹かれつつあるようだが、自粛している。観光に来たわけではないのだから。

「ここで待っててくださいえ」

「あいよ」

案内されたのは、大広間。畳の質感にこれもリードは不躰とは知りながら手触りを確かめていた。

「初めて触れる文化というのはやはり年甲斐もなく心躍るものだね」

「そうかい。茶の一つも出せなくて悪いな、リード」

「気にしてないよ。お茶は後で君からごちそうになるから」

「苦い顔するなよ？」

半ば冗談交じりに言い、それから五分としない内に六道絆は十年ぶりに祖父と再会を果たす。十年、あまりに長い歳月を経て再会した家族との邂逅に六道絆は感動もクソも無かった。あるのはただ、血縁者に対する怒りと恨み。それと知らずに祖父はまるで亡霊でも見たかのように震えていた。

「……絆、オメエなのか」

「ようクソジジイ。まだ生きてやがったか」

「この馬鹿野郎ツ！ 連絡一ついれねえで何してやがった！」

「勝手に殺すんじゃないよ。見ての通りピンピンしてらあ」

開口一番、怒鳴り散らす六道銅玄に心底嫌そうな顔をする六道絆はあぐらをかいている。震える指先で本物かと何度も尋ねる祖父にはとほと嫌気がさして呆れていた。

「テメエの孫の顔もわかんねえのか、もつろく耄碌ジジイ。ガキの頃から人の顔見るなり怒鳴り声あげてうるせえんだよ」

「あれからどんだけ経ってると思ってるんだ！　んなデケエ口叩けんのも——」

「だあからうるせエつつてんだろがッ！　頭の血管切れて勝手にくたばれジジイ！　ワーリイなりリード。見ての通りやかましい家で」

「いや、いや。気にしてないよ。見たところご老体に負けぬ活力の方。私としては健康の秘訣が知りたいくらいだ」

「たらふくメシ食ってクソして寝てろ、リード」

親しげに話している外国人男性をようやく視界に入れたのか、六道銅玄は眉を寄せる。厳しい顔つきがますます厳しくなり、まるで阿修羅像の如く。

「で、オメエさんは誰だ」

「初めまして。私は、ジークハルト。彼の友人です」

「一応言っておくがマフィアのボスだ。見てくれは若いけどな」

「ほっ、お前さんみたいな若造が！　絆、流石は俺の孫だ！　しかもお友達と来た！」

その黄色い声に、それこそ辟易しているのは六道絆だった。舌打ちをもらし、とても付き合いきれないとばかりに明後日の方向に視線を逸らす。

「彼と出会ったのは今から約三年程前。イギリス山中、奥深くで獣同然の生活をしていたところで偶然。それからというもの、彼とは行動を共にしています。今では良き隣人、かけがえのない戦友です。彼の勇氣ある行動には助けられています」

「隣で聞いてて恥ずかしいからあんまり褒めんな」

「本当のことじゃないか。そこで是非、ご家族の方にご挨拶をと思いまして」

月並みな言葉ではあるが、それはリードが感謝の言葉を日本語で伝えたいと努力した賜物だ。懐から取り出すのは、見慣れないペンダント。だが、リードや六道絆には見慣れた代物でありこれを手渡したいという意思の元、危険を冒してまで菩薩組にまで足を運んだのだ。

受け取り、まじまじと眺めるものの眉を寄せる。それにリードはやはり笑みを絶やささない。

「三ヶ月前に起きた事件を覚えていらつしやいますか」

「月の欠片が落つこちるなんてぶったまげたアレか。当然」

「それを止めたのが。シンフォギア。聞き慣れない言葉かと思いますが、それが一役買っているんですよ」

「ほお？ そのしんぷおぎあつてなあ、こんなちっこいやつで……あんな月の欠片を」

「ええ。本来であれば、誰にでも使える物ではないのですが。我々が開発した物は、その点を改良した物です」

「これがあれば百人力ってか」

「百人力？ とんでもありません。お伽話に出るような英雄の力の一端を垣間見れますとも」

「おう、神無月。適当なわけえもん連れて来い。そいつで試そうじゃねえか」

「へい、オヤジ」

「ああそれで思い出した。クソジジイ。表にいたバカ一人ぶん殴つていたぞ」

「オメエは相つ変わらずだなあ。ちったあ進歩しねえのか、ん？ 誰彼構わず喧嘩吹っかけんなって言つてんだらうが」

「忘れたね、ガキの頃の話だ」

それでどれだけ周囲が迷惑しようとも、知ったことではない。

「もしよろしければ、使ってみては如何ですか？」

「そいつあ面白え。おい、組の奴ら集めろ」

「へい、オヤジ！」

その一言に、六道絆はようやく笑みをこぼした。聞いていて笑いを堪えるのが精一杯だった。

Tr. 22 地の果てに、底はない

リディアン音楽院を後にした切歌と調は街の混乱と喧騒には目もくれず、マリア達との合流地点へと到着する。そこは東京指定閉鎖区域——カ・ディングル趾地。ステルスで隠れていたエアキャリアからナスターシャ、マリア、ウエルの三人が出てくるのを確認して、二人は駆け寄る。だが、その後にもう一人。見慣れない女性が出てきて首を傾げた。

「誰デスか？」

「私はベル。よろしくね、お嬢ちゃん達」

「二人とも、大丈夫？ 怪我はない？」

「うん。でも、装者のペンダントは……」

それも後一步のところまで来ている。此処で引き下がるわけにはいかない。マリアの為を思っって行動する二人だが、その頬をナスターシャ教授が叩く。

「いい加減にしなさい二人とも。これは遊びではないのですよ」

「まあいいじゃないですか、ナスターシャ教授。二人もマリアの為を思っって頑張っているのですから」

「しかし……」

「それに、二人も煮え切らない模様。どうです？ ここはいつそのこと、こちらから仕掛けるというのも面白いと思いますよ。今は協力者もいることですし」

ウエル博士の視線に、ベルは考える振りをした。まあ、そちらが動くのであれば別に構わないだろう、と思っっている。特に不都合もない。今は混乱している都心でも、逃げ道は残してある。それは温情などではなくリードに考えがあつてのことだ。それに食いつくのも時間の問題だろう——もし、食いついたその時は計画が更にもう一段階進むだけの話。ベルはそれに何の感慨も無い。確かにこの島国の文化はとても興味深い。食事も。それも自分達の目的のためならば次の次だ。

「そうね。何かやるって言うなら協力は惜しまないわ」

「彼女もそう言っていますし」

「そ、そうだ。マリア、知っているデスか！ アイソフェリアの――」

「ええ。知っているわよ。さっきの声明はこちらでも聞いていたわ」

「私達は、あんなこと」

「……」

あんなことがしたいわけじゃない。人類を一人でも多く救うために我々は立ち上がった。そのはずなのに、そんな思いなど無視したように世界は混乱していく。世間の静寂に一石を投じたアイソフェリアルは人類の統一を掲げ、その目的の為に試練と困難を与えると宣言した。それが、黒煙をあげている都心という形で。

「ベル。これが貴方達の為すことなの？」

「ええそうよ」

「こんなことで、人類が一つになると本気で思っているの！」

「少なくともね。和を乱す者がいれば排除する。それはある種、優しさの脅迫みたいなものよ。だけど仕方ないじゃない。こうでもしなきゃ人類はまとまらないのだから。私達が人類共通の敵として認識されないという意味が無いのよ」

「貴方達がノイズの代わりになると？」

「人類史で言えば、何も変わりはないと思うのだけれども。この世界に神様がいたとしても、何が出来るの？ 人間のことは人間がどうにかするしかない。神々の黄昏ではないけれど、これは人々の明日の為なのよ。人が生きる力を取り戻さないと、月が落ちてくる前に世界は人の手で滅ぶことになるんだから」

「事を性急に運びすぎるッ！」

「悠長に構えていられないって言ってるの。そちらも同じこと」

もしそれが本当ならば、リードという男は何を考えているのだろうか。

「この困難を苦難を、自分達の力で切り抜けられる人類が果たしてどれだけいるかしらね。あそこに」

黒煙に包まれる都心を眺めて言葉を漏らすベルは、どこか恨めしげにしていた。ポケットから通信機を取り出すと、応じる。

「もしもし？ どうしたの？」

『ベル様。ベルセルクの反応が検知されましたが、どうにも安定していません』

「……なら、選定者じゃないでしょうね。恐らくはリードの考えでしょう。詳しい場所は分かるかしら」

『至近に別なベルセルクと——バルムンクの反応があります』

「なら問題はないわ。万一、巻き込まれないように注意しておきなさいな」

『わかりました』

ベルのその会話に、マリア達が視線を向けていた。

「別になんでもないわ。うちのリーダーが、テストしてるだけよ。どうやらロックも一緒にみたいだし、どうやら前々から言ってた事を実行してるだけ」

「前々から？」

「そうよ。ロック、自分の家が嫌いなもの。この世で一番憎んでる」

「……だから、どうするっていうの？ 家族なのよ」

「殺すに決まってるじゃない」

——六道絆は、殺人を忌み嫌う。それは人道から反した行為である。だからこそ、自分の手は汚さないと心に決めている。だが、言ってしまえばそれだけなのだ。

生まれた頃から極道で、物心ついた頃から暴力沙汰が日常茶飯事だった。それは小さな喧嘩であったり、大人達の喧嘩に巻き込まれたり。とかく喧騒に塗れた日々。流血などして当たり前。暗黙の了承だった。『これは悪い事なのだ』誰に教えられるわけでもなく。しかし、六道絆はそれ以外の生き方を知らなかった。殴って蹴ってぶっ飛ばす。ただそれだけが彼の生き方、弱肉強食の掟。……ヴェオと出会うまでは。

身一つで大自然に投げ出され、何が出来るのか。それまで人間社会

で培ってきた経験の数々は全て無力だった。求められるのは、ただ生きるチカラ。獲物を捕らえ、糧にしてその日を食い繋ぐこと。そんな生活を当時、十六歳の少年が強いられれば餓死は免れられない。だが、六道絆は生き延びた。有り体に言えば、自然に還ったというべきか。

そんな日々を送り続けた六道絆は、人間である自分に嫌気が差した。正確には、人間社会に馴染めない自分に。それを強要してくる社会の枠組みに。だが何が出来る？ 当時十八歳の少年は世界を変えられる力など持たなかった。当然だ。——そう、三ヶ月前までは。

六道会、菩薩組は凄惨たる有様と化していた。酸鼻極める地獄絵図。組の抗争などではなく、その日の訪問者は僅か二名。組長の孫と、その友人。たった二人を招き入れただけで六道会は壊滅状態となっていた。

大広間に集まった組員達は誰も息をしていない。手には短刀や拳銃など、彼らが暴力団と呼ばれる象徴とも言える武器が握られている。だが、それらの文明の利器をもともせず、地に地獄へ追いやったのは——黒い獣。

頭のとっぺんから爪先までが黒いエネルギーで包まれた成人男性ほどの背丈を持つ肉食獣は、二足歩行で立っていた。だらしなく涎を垂らし、口腔から白い吐息を漏らしている。人とも獣ともつかぬ唸り声をあげながら、大広間の中心に立ち尽くしていた。

まるでこの世の終わりでも目の当たりにしたかのような光景に、六道銅玄は頭を抱えている。それを爽やかな笑みで一部始終を見守っていたのはリード——ジークハルト。そして、ただつまらなさそうに見ていたのは六道絆。止めるでもなく、何をするわけでもなくただそこで突っ立っていただけだ。見境なく暴れる凶獣の凶行を止めようとした者たちがどうなったか等、モノ言わぬ神無月の死骸が語っている。

「どうです？ 素晴らしい力でしょう」

「アレこそがシンフォギア。英雄譚に出てくる聖遺物。その力を用い

た現代の奇跡です。現代兵器を凌駕する性能を一人の人間が手にすることが出来る。これ以上、人が何を望むというのか」

鼻を鳴らして獲物を探す凶獣の赤い瞳がジークハルト達を捉える。それだけで竦み上がる六道銅玄と違い、六道絆は腕を組んでいた。

「えーと、こちらの国ではなんと云えばいいのでしょうか」

「鉄砲玉」

「中々粋な喩えをする。なるほど確かに。放った矢は戻らず、弾丸も然り。うん、その通りだ——とはいえ、現状がこれでは使い物にもなりませんか」

「俺の、家族が……!」

「彼らは無為に死んだわけではありません。犠牲でもない。何故なら、そう。シンフォギアの威力がどれほどのものなのかを立証してくれたではありませんか」

「狂ってやがんのか!? 絆、オメエどうしちまったんだ!」

「あ?」

声も聞きたくないと言いたげに、耳の穴を掻いていた六道絆は祖父の言葉に片眉を上げた。

「トチ狂ってやがる! 自分の家だろう。家族だろう! 血の繋がった肉親を——」

「『親殺し』は箔がつくつてなあ——テメエがオレに教えた言葉だ。ガキの時分に」

聞いていられないとでも言うように、祖父の顔を蹴り飛ばす。親不孝? ああ、大いに結構だとも。地獄へ落ちる覚悟ならとつくに出来ている。畜生に堕ちても、餓鬼になってもいい。獄卒相手に喧嘩を売る度胸も足りている。

「オレは普通でありたかったよ。そこら辺のガキみたいにはしゃいで、普通に学校に行つて、普通に友達作つて、そんなどこにでもありふれた毎日が送れたかった。だけど実際はどうだ? オレの毎日なんてアンタらの血と汗に塗れた日々だった。ウンザリだった。人間社会その物が嫌になった。だからこつちから願ひ下げだ。オレは、オレの好きに生きる」

それだけで生きていけるほど楽ではない。そんな月並みな言葉を笑い飛ばす。知っているとも、だがそれで苦勞するのも全部自己責任だ。

六道絆は祖父に背を向けて凶獣へと向かう。獣相手は慣れている。つまりは、これが自分の仕事だ。

「絆！」

飛びかかる獣の頭を無造作に掴んで力任せに地面に押しさえ込み、カラビットナイフで胸元の赤いペンダントを破壊する。

「残り二九九」

たったそれだけで相手は抵抗する間もなく動きが止まった。唾然とする六道銅玄にジークハルトは嘆息する。

「ええ、彼は実に有能です。素晴らしい人材です。彼から聞いていた貴方がたの素性や振る舞いは弱者への脅威となる。そうでなくとも、私は彼の力になりたい。なので、非常に心苦しくはありますが——消えていただきます」

「テメエエエエ——ッ！」

六道銅玄が手を伸ばした先は、日本刀。だが、ジークハルトが拾い上げたのは拳銃。鞘から抜き放つよりも先に足を撃ち抜かれ、胸を打たれて六道銅玄は苦痛に動きが鈍る。しかし、老齢を押しして気迫で迫る姿にジークハルトは、やはり笑みを浮かべていた。

「ツェアアアアッ!!」

「実に素晴らしい」

賞賛とは裏腹に、無慈悲なまでの正確さで右腕を押しさえこんで居合を止める。そして、畳に突き立つ短刀を横目で見ると六道銅玄を投げ倒す。拳銃を捨てて、拾い上げると右手を畳に縫いつけた。懐から取り出すのは、透明な液体の入った注射器。

「貴方の気迫は、鬼にも勝る。成る程、道理です。彼は確かに貴方の血を継いでいる。しかしながら彼はそれを快く思っていない」

左腕を折り、身動きを封じてからジークハルトは六道銅玄の首に注射器を刺すと中の液体を一息に押し込んだ。もがく姿を無感情に見下ろして、空の注射器を胸ポケットにしまい込む。

そして——首を踏みつけると、そのままにへし折った。六道絆はそれに一瞥もくれない。

「リード。さつさとずらかるぞ、二課でなくても警察に嗅ぎつけられたら面倒だ」

「ずらかる、ってなんだい？」

「逃げるぞって意味だ」

「なるほど。また一つ知識が増えた。そうしよう、夜にはベルとも合流したいからね」

Tr. 23 畏れよ。我が名は神劍・バルムンク

その日の夕方——公安警察からの通達によって踏み込んだ緒川から二課への報告内容は奇妙なものであったが、それに弦十郎は苦い顔をしている。

六道会本家本元、菩薩組が壊滅。組員は全員死亡。その死因は、いずれもがまるで猛獣にでも襲われたかのような有様。そして、二課でもベルセルクの反応を掴んでいた。それも間もなく消失している事から、何者かがシンフォギアを起動。虐殺したと見るべきだろう。

『風鳴司令』

「他になにかあるのか」

『はい。組長である六道銅玄の遺体ですが、死因が異なります』
「なに?」

『直接的な死因は、毒殺です。しかし、手に突き立てられた短刀。それに撃たれた痕があることから、何者かと交戦したのではないかと……』

「……」

もしそうであるなら、そこに誰かが居たということになる。

「まさか、バンのやつが……?」

『……可能性は薄いでしょうけれども、彼が絡んでいる可能性は高いでしょうね』

「他にはなにかないか」

『はい。もう一つ……一人だけ無傷の死亡者が見られます』

「無傷だと? ならば死因はなんだ」

『分かりません。ですが、かなりの高齢と見られます。こちらの検死が終わり次第、改めて報告します』

「頼んだぞ、緒川。——友里、バンに連絡はつくか」

「こちらからの呼び掛けに一切応じる気配はありません」

「くそッ!」

毒づく弦十郎の怒りは尤もだ。

「もしかすると、こちらからの呼び掛けに応じることが出来ない状況だとは考えられませんか」

「そうだとすると今アイツは……」

リードは六道絆と共に東京指定封鎖区域、カ・デインギル陞地へと移動していた。既に日は暮れており、すっかり夜になってしまっている。エアキャリアはステルスで隠れている為、目視こそ敵わないが「ファイネ」からはウエル博士が顔を覗かせていた。その手にはソロモンの杖が握られている。

「貴方が、アインフェリアルのリリーダー……リード、ですか」

「初めまして、ドクターウエル。ベル、ご苦労様」

「それなりに苦労しましたよ」

肩をすくめながら言うベルは苦笑いを浮かべていた。

「人類統一を掲げる貴方の、本当の目的は」

「これはまた、えーと……」

「やぶからぼうに」

「そう、それ。やぶから、ぼう、に聞きますね」

「とてもではありませんが、あの程度で人類が一つにまとまるなどと僕は考えちゃいませんのでね」

「ふうむ。そういうことならば計画を早めようかな……それはさておいて。私の本来の目的ですか。ベル、話していないのか？」

「話していいものか、判断に迷ったもので」

「ああ、そうか。ドクターウエル、並びに控える「ファイネ」の皆様方。私の本来の目的ですが、人類統一。それに限らせていただきませう。というのも、私は「英雄」を育てたい。人類の救済を掲げる貴方達の崇高な目的の後押しになればと」

「ほう？ 実に興味深い。つまり、人類統一は英雄育成プログラムである？」

「ええ。誰かが英雄になれるのなら、誰もが英雄になれるはず。ならば、この困難と苦難と試練を乗り越えた人々はきつと名も無き英雄となる。人が人を救い、ならば星は人を救うはずであると、私は考える」

「その為に人類を敵に回すと」

「この為に私は計画を進めた」

「僕でも英雄になれると？」

「誰でもなれると考えていますよ。行動一つで、思い一つで人は誰かの為の英雄になれる。少なくとも私はそう信じています。私は見たい。人類の可能性というのを。『現代の英雄譚』を記したい」

それは、素晴らしい思想であり理念だ。英雄には、敵が必要だ。弱い人々を脅かす悪が必要とされる。どんな陳腐で拙い絵空事であっても当然のように。その為には、まず自分が英雄の卵である人類の敵となる。実に解りやすく、明白な見当だ。

「その為には、強大な悪が必要だ。何も貴方達が世界を敵に回すことはない。それは私の務めであると考えています」

「なら一体、僕たちはなんの為に宣戦布告したんでしょうかねえ？」

「人類救済の為では？ ベルからある程度の話は聞いています。その為なら我々は協力を惜しみませんよ」

「ありがたい話です。然しながら——」

ソロモンの杖を構えて、三人の周囲にノイズを呼び出す。包囲された以上、彼らはシンフォギアを装着しなければ窮地を切り抜けられない。その独断にはエアキャリア内で行き先を見守っていたナスタールシャ達も驚いていた。

「それじゃあ困るんですよ。英雄になるのは僕なのだからアツ！」

「それも困りますね。私の計画はまだ始まったばかりなのですから」

「ハハハ！ でも彼のシンフォギアは、僅か九十秒！ たったそれだけの時間で何が出来ると言うんだツ！」

「こっからテメエのとこまで十秒もいらねえんだけどな」

ポツリと呟く六道絆に、リードは手で制する。仮にそうだととしても、残されたベルがノイズにやられては意味が無い。ならばどうするか？

「確かにその通りだ。だが、彼の力を借りることはない。これはあくまでも、私と貴方の間で解決するべきだ」

「ならどうする？ 降参するかい？」

「とんでもありません。障害となるのなら斬り伏せるのみ——」

リードがポケットから取り出したのは、装者のペンダント。口ずさむのは、聖詠。

「
Grddlion liven Balmung zizzl
”

シンフォギア・システムが起動する。それは即ち、二課へ自分達の居場所を教えるのと同じことだ。しかし、リードは躊躇しない。会いたいのだ。世界を救ったという日本の装者達と。そのためならば茨の道と知って尚も喜々としてこの道を行こう。

そして、ノイズ達の前に歩み出るのは——全身を騎士甲冑に包んだ、特異な形状のシンフォギア。通常とは異なる出で立ちに、ウエル博士が瞠目する。

「なんだ、そのシンフォギアはツ……!? 何なんだ！ まるで——まるでそれは、御伽噺の英雄じゃあないかアツ！」

青い騎士甲冑の背には色褪せた赤い外套がはためいていた。その手に握るのは柄が黄金の装飾が施され、青い宝玉の埋まった長剣。刃を振るい、ノイズ達が両断されていく。ソロモンの杖による命令で殺到するも、防御性能に特化しているバルムンクを起動したリードには傷一つ付けることすら敵わなかった。

「ノイズは例外なく殺す。躊躇なく、一切の憂いなく。なぜならば人類の天敵であるが故に」

長剣の切っ先を突きつけて、リードは宣告する。

「ソロモンの杖を無闇に振るうならば、私はこの刃を貴方に向けることを恐れない」

「ツ……！」

「ノイズを呼び起こした事により、二課がいずれ此処へ来るでしょう。そして私もまたシンフォギアを起動した。対立は免れられない。そこで、だ。改めて貴方達との共闘を望みたい。こちらからの譲歩出来る戦力と言えば……ロック」

「まーたオレかよ」

「現状でアインフェリアルルの最高戦力と言ってもいい」

「だから過大評価すんなつづの……」

照れくさいのか、それとも謙遜なのか六道絆はリードからの評価に不満を抱いていた。眼前に長剣を突きつけられてウエル博士は歯を食い縛る。

眼前に立つ青い鎧騎士。今まで見てきたシンフォギアとのいずれとも違う技術体系は、ベルの研究していた異端技術も使用されている。日本でもアメリカでもない、また新たな異端技術に最も関心を惹かれていたのはナスターシャだった。

《ウエル博士。その辺りでいいでしょう。交渉はまとまったようですし、もう良いでしょう》

「……クソ！ だけどこちらの協力者である以上、僕の命令には従ってもらうからな！」

「どの口がほざきやがる」

「こちらにはソロモンの杖が」

言うより先に、六道絆はその場から踏み込んで跳躍するなりリードの騎士甲冑を足場に更に跳ぶ。カランビットナイフを取り出すとウエル博士の髪を数本斬り飛ばした。

「それよか先に、オレがテメエを黙らせる」

「——」

「オレに命令するんじゃねえ、分かったか」

「………はい」

間の抜けた声で返事をする姿を、モニター越しに見ていた調と切歌が意地の悪い笑みを浮かべている。

「ぞまみろデス」

「………いい気味」

「そんなことを言っている場合では無さそうですね……二課の装者達が接近しているようです。切歌と調は待機を。此処は彼らに出張ってもらうことにしましょう」

欠けた月の見守る下。カ・デインギル陞地で三つの組織が初めての遭遇を果たす。

特異災害対策機動部二課。立花響。風鳴翼。雪音クリス。

武装組織「ファイーネ」。マリア・カデンツァ・ヴナ・イヴ。暁切歌。月詠調。ナスターシャ。ドクターウエル。

テロ組織アインフェリアル。リード。フルール・ベルモンド。六道絆。

現代に蘇る英雄たちの力を振るう者達が出会うのは、戦場——記憶にも新しいルナアタック事件の現場で。

Tr. 24 拳を握り、道を征く

カ・ディンギル趾地に到着した響達三人の前に立ちはだかるのは大量のノイズ。そして、ウエル博士。六道絆。もう一人。白スーツの男性が並んでいた。

「ウエル博士！ 切歌ちゃん達は!？」

「彼女たちは今、折檻中でしてね。こうして僕達が出張っているんですよ」

男は男同士で仲良くやろうぜ、と言い出しつぺの六道絆はウエル博士の隣で響達を見下ろしている。

「そちらも協力者か！」

「ええ。初めまして、風鳴翼さん。そして立花響さん。貴方は——」

「アタシは雪音クリスだ！ 誰だよ teme ！」

「雪音……?！」

「私達のことを知っているのなら話は早い！ 名乗ってもらおうか！」

シンフォギアを纏う三人に、リードは会釈する。

「私は、アインフェリアルリーダーを務めさせていただいているリードと申します」

「なっ……!?!」

「組織のトップが出てきてくれるなんて話が早えじゃねえか！ ここでお前をぶっ倒せば全部おめでたってわけだな！」

「そう事を急かささないでください、雪音クリスちゃん」

まるで宝物でも眺めるようにその視線は慈悲に溢れていた。

「私の計画はまだ始まったばかりなのですから」

「ならばその貴様の計画、此处で止めさせてもらおうか！ 行くぞ、立

花！」

「はいッ！」

立ち塞がるノイズ達を三人が蹴散らしていく。それを見ていたウエル博士は次々とノイズを召喚するが、足止め程度にしかならな

い。徐々にだが突破されていく。一番に迫ったのは、響だった。六道絆は両手をポケットに入れたまま口をへの字に曲げている。

「……絆さん」

「んー？」

「二課からの呼び掛けに応じないのは、こういうことだったんですか!?」

「出る暇ねえつつうの、こんな状況じゃ」

「おや、ロック。君は二課の方々とも面識が？」

「ワケありだな」

「そうか。ならそれも含めて感謝しないとね」

あくまでマイペースを崩さない温和なリードに、響は拳を緩めそうになるが相手は三人。未知数のリードに、爆発力のある六道絆。そして、最優先でソロモンの杖を奪取しなければならぬウエル博士。気を引き締めて前に立ち、それに追いついた翼が踏み込む。

「はあぁッー！」

「あまり刃を振るうのは好ましくないので、仕方ありませんかー
ーバルムンク」

そして、天羽々斬が空中で弾き飛ばされる。シンフォギアを起動したりリードが翼の前に立ち塞がり、長剣を構えた。

「面白い。防人である私に、剣で挑もうと言うのか」

「僭越ながら、アインフェリアルスのリードがお相手仕ります」

「組織の長とあれば相手にとって不足はない！」

二人の剣戟が重なり、火花を散らす。歌いながら刃を振るうその一方で、クリスはイチイバルの火力でノイズ達を蹴散らしていた。響はまだ六道絆と睨み合っている。

「どうしてですか!? どうして、ウエル博士と一緒にいるんですか！」

それに、師匠から聞きました。バンさんの家で、シンフォギアが起動したって。いっぱい人が死んだんですよ！」

「知ってるし、現場にいた」

「———それ、じゃあ……」

「だが、勘違いするな。ヒビキ。オレは誰も殺しちやいない。自分の

手を汚した覚えはないんだよ」

「そんなの、屁理屈じゃないですか！」

「理屈で筋を通すのがそもそもおかしいんだよ」

そこでようやく、六道絆は構えた。それに響も改めて拳を握る。手を繋ぐ為の指先が、こんなにも固い拳を作っていることに心を痛めながら。

「オレは少なくとも、普通じゃねえんだよ。普通の家に生まれて、普通の生活をして、普通に人生満喫して、不幸な目に遭ったりして——そんな「普通」がオレには分からねえ。ガキの頃からずっとだ。オレが生まれた時から、オレの周りは血生臭エので一杯だった。オレにとっちゃ、殴って蹴ってぶっ飛ばすのが「普通」なんだよ」

拳を握りしめて、六道絆は歯噛みする。独りで世界中歩き回っていた頃もずっとそうだった。何処に行っても喧嘩ばかりだ。まるで自分はその運命であったかのように。申し合わせたかのような生まれの不幸に六道絆は心底ほとほと呆れ果てて怨み辛みを積もらせていた。

それでも、自戒の一念である「不殺」は貫き通す。畜生餓鬼地獄の三悪道、上等だとも。生前に犯した罪を死後に償えるのならばいくらでも罪を背負う覚悟だ。

「家の名前は捨てられねえッ！ 名前も、親も！ ガキの選択肢を奪うのは他でもない、周りの大人達だろうがッ！ そんなオレが、どう生きるかまで他の誰かに選ばれてたまるかよ！」

「だからといってそんなのおかしいですよ！」

「だったら他にどうすりや良かったんだッ！ ああする以外にオレが自由になれる方法があるか!? あるって言うのか、立花ヒビキ！」

「それ、は——！」

「口にしたところで話を通じると思うんじゃないぞ。馬鹿に何言っても聞くはずがねえだろ」

「じゃあ、どうすればいいんですか」

「言って聞かねえなら、ぶん殴れッ！」

六道絆は、ヒビキに見せるように拳を握りしめて笑っている。日本

語の通じないアメリカ人でも、ドイツ人でもフランス人でも、動物でも何でも。結局は拳で話し合えば理解できる事が一つだけある。コイツには敵わない」という上下関係だ。

「テメエのシンフォギアも、おあつらえ向きに拳で語るタイプだろう。オレの性分もそっちの方が手っ取り早い。だから来いよ、ヒビキ。テメエの『普通』で、オレの『普通』をぶっ壊せると思うんじゃねえぞ！」

拳を鳴らして、六道絆は響へと駆け出す。以前のようにベルセルクの起動を強制されているわけではない。十全の実力を発揮できる。確かに、異常なまでの過剰な出力だがそれも時間制限が付いており、お世辞にも使い勝手は良くない。そもそもシンフォギアはノイズ相手にしか使わないと思っっている六道絆からすれば、生身の方がやりやすいのだ。特に、人間相手は。

混戦状態となっている戦場をステルス状態のエアキャリアから見守っているナスターシャ達の背後。ベルは六道絆から受け取った無線と通信機を解体していた。その手元は口に咥えたペンライトで照らしながら、部品を取っている。それを見ていた切歌が首を傾げていた。

「何をしてるデスか？」

「ロックに頼まれて、二課の無線と通信機からGPS機能を排除しているの。四六時中監視されてるようなものだから嫌なんでしょうね」再び組み直して、動作確認。特に問題は無いことを確認すると、ベルは立ち上がった。

「さて、と。それじゃ私も行ってくるわね。あのままじゃ流石に不利だから救援要請は出しておいてあげるけど」

「正気なの？」

「ええ、至って本気よ」

「シンフォギア装者に、生身で戦いを挑むなんて」

「それ、ロックに言っただけじゃないよ」

現に今、ガングニール装者である響と格闘戦を互角に繰り広げている。その画面から目をそらしてマリアは咳払いを一つ。アレはなん

かもう、いいのだ。

「フルール・ベルモンド」

「なにか？ ナスターシャ教授」

「あのシンフォギア。バルムンクには貴方の研究していた異端技術が使用されていませんか」

「ええ、そうよ。元々ドイツで開発されたシンフォギアを私達が奪取した。それをリードが使うために私が手を加えたというだけよ。それが？」

「ならば聞きます。類を見ないシンフォギア。貴方の研究していた異端技術は一体」

「……魔法、なんて言ったら笑うかしら」

自嘲した笑みを浮かべて、ベルは靴を脱いで靴下も脱ぐ。昼間の米国特殊部隊を相手に使用した義足の展開によってスネから下が綺麗に切れたスラックスは今やハーフパンツになっていた。上着を脱いで左手のカフスのボタンを外す。

そんな自分の造り物の左手を見下ろして、ベルは呟く。

「錬金術よ。触れてはならない技術を紐解いた結果が、コレ。私という存在までもが闇に葬られた」

「……では、貴方は錬金術士である？」

「まだ駆け出しもいとところだけだね。櫻井理論には敵わなかったけれど、夢を叶えるくらいは出来るわ。それは私の夢じゃないけれど、誰かの夢物語。錬金術も多岐に渡る、その中でも私が選んだのは人道に反したものだ。魂の錬成、肉体の錬成——人体錬成」

「それは——」

「誰でも使えるシンフォギア。そんな夢の様な話があると思う？」

まるで、自分の行いを卑下するかのような笑みに寒気がした。錬金術の原則は、等価交換。一方的な利益は存在しない。誰でも使えるシンフォギアには相応の対価が必要となる。

「ベルセルクの起動に必要なのは、生命力。心臓の鼓動。ただそれだけ。聖詠なんていらなのよ、アレ。コマンドワードは心音なんだから」

「そんな事が有り得るのですか」

「現に、起きているのだから仕方ないじゃない」

「その対価は」

「……生命力の燃焼。魂の燃焼。聖遺物が扱えないのなら、聖遺物で引き上げる」のが私の理論よ。バルムンクも同様。アレは言うなれば、全身ギブス。神話に出てくる英雄様レベルにまで現代の人間を叩き上げる。適合系数は低くても問題無い。使い込んでいれば勝手に適合系数は上昇していくから」

「その過程で人が死ぬことになってもですか」

「死なないわよ。特に、あの二人はね」

モニター越しに眺める二人は、そんな異端技術など物ともしてはいない。

「ちよつと待って。それじゃあ、ベルセルクを起動した人は、どうなっちゃうの……?」

「死ぬわよ。例外なく。当然じゃない。全生命力を燃焼させて起動して、耐えられると思う? 言うなれば寿命を全部使い切るのと同じこと。だから有り得ないのよ。完全聖遺物の支配力に九十秒も耐えられる人間の存在が」

「起動すれば死んじやうシンフォギアなんて、どうして作っちゃったデスカ!」

「造れたからよ。手元に材料が揃っていたら誰でも作るでしょう? 料理でも、何でも。知識は足りているんだから、後は経験だけ。シンフォギアという材料が手元にあったから、月の落下という知識があったから貴方達は行動を起こした。それと同じよ」

それを言われてこそマリア達は何も言い返せなかった。

Tr. 25 混戦激戦区

「ま、それも逆を返してしまえば聖遺物で引き出すまでもないってことなんでしようけれど」

「それはつまり、あの二人は既に英雄の器であるということ。聖遺物を駆る、かつての英雄達のように」

「そう。まったく驚かされるわ。行ってくるわ」

ベルは手を振って、エアキャリアを後にする。全く、驚かされる。世界はこんなにも広い。

「お笑い草よね——」

自分の研究を否定する男と、肯定する男が二人とも自分のそばにいるのだから。

聖遺物の支配を常軌を逸した精神力で跳ね除ける六道絆。

聖遺物の力を人類栄誉の為に振るうジークハルト。

狂戦士と、竜殺しの英雄。それが今、肩を並べている。ならば自分こそは、悪魔に魂を売り払ったメフィストフェレスに他ならないのではなからうか。

そんなことを思いながら、フルール・ベルモンドは戦場に出る。空を見上げれば欠けた月が浮かんでいた。いつそ欠片ではなく月が落ちて世界が滅んでしまえばよかったのに。

「ほんと、笑える」

ガングニールと生身で張り合えるあの男を見ると、何だか自分の全てを否定されている気がして腹が立って仕方ない。バカで粗暴で野蛮で、何も考えていない癖にここぞという時は口うるさい男に、預かっていた品を投げる。

ベルから二課の無線と通信機を受け取り、手を軽く振って礼を言うなり響の拳を避けてマフラーを掴むと投げ飛ばしていた。つくづく信じられない戦闘能力だ。呆れてため息しか出てこないベルに、ウエル博士は眼鏡を直す。

「貴方まで出てくるんですか?」

「まあね。このまま戦っていたんじゃ罅が明かない。うちの方から救援が来るまで凌いで」

「僕は構いませんが、お腹を空かせたネフィリムはどうでしょうかねえ?」

「勝手にすればいいわ」

最悪、その完全聖遺物があの二人の手で殺されても文句は聞かない。

「リード」

「ああ、ベルか。すまないね、今はちよつと手が離せない状態だ!」

翼と鎧を削っていたリードだったが、あまり旗色は芳しくない。蒼ノ一閃から続く斬撃を長剣で捌くものの、機動性では相手に分がある。防御性能で言えば他の追隨を許さないが、それにも限界はある。軽く息を吐いてから、ベルが素足で走りだす。

義足が展開する。逆関節に折れて、内部に仕込まれている刃が飛び出す。つま先で跳ねるように駆ける姿はまるで肉食獣を髣髴とさせるほどしなやかな走りを見せて風鳴翼へと迫った。リードを飛び越えて、横薙ぎに義足の刃を振るうと背中を反らせて避ける。

着地と同時に反転して、今度は地面を滑るように一息に飛び込んだ。これはたまらないと避けた翼との距離が開く。

「彼女は私が引き受けましょう。どこまで持つかは分かりませんが」

「そうか。それじゃあ私は——ウエル博士の助けに行こう」

いつの間にかクリスがウエル博士の前にまで迫っていた。ネフィリムが出てきたものの、それに響が殴りかかっている。六道絆はと言うと、ノイズの群れが邪魔で思うように動けていない。

イチイバルのガトリングを切っ先で跳ね上げて、肩口からクリスを吹き飛ばす。それに気を取られた響がネフィリムの横殴りの一撃を喰らって同じく地面を転がった。

「そこを退いてもらおうか!」

「お断りよ。カづくでどうぞ。ああ、ちなみに言っておくと左腕と両足以外、生身だから普通に斬れるから」

「……自分の弱点を晒すだど?」

「こんな身体だから、まかり間違つて殺されでもしたら夢見が悪いでしょ？ それに貴方はロツクのお気に入りだもの。出来ることなら、穏便に済ませたいところね」

「ならば、当身にて失礼させてもらおう」

「お手柔らかに」

シンフォギア装者とこうして直接対決するのはベルも初めての経験になる。しかし、時間を稼ぎさえすればいい。

上段から振るわれる刀に、ベルは左腕の義手に内蔵している刃を展開した。折りたたみ式の高周波振動ナイフと天羽々斬が衝突して火花を散らす。

「アンチノイズプロテクター……シンフォギアの防御機能は、ノイズの矛と盾を無効化する」

「ッ!」

「だけどね。私の異端技術は、そんな奇跡も切り裂く為の物なのよー」
掠めた刃の軌跡をなぞるとシンフォギアに傷がついていた。それに驚いている翼の眼前をベルの脚が通り過ぎる。鎌のように反り返った刃が前髪を跳ね飛ばした。

「科学者だからと言って甘く見てると痛い目見るわよ?」

「……ああ、そのようだな」

異端技術の神童、フルール・ベルモンド。聖遺物の研究・解析に携わり、櫻井理論に基づいた『対シンフォギア戦』においては間違いない強敵となる。だが、相手はテロリストと言えど一般人だ。それが今、自分と互角に斬り結んでいる。天羽々斬で両断できない義体の強度には流石に目を見張った。刃を収納した義足の蹴りで吹き飛ばされた翼が着地と同時に体勢を立て直す、ノイズによって動きが封じられる。

クリスのイチイバルとリードのバルムンクは相性の面では言えば最悪と言ってもいい。ガトリングの掃射を鎧の強度で弾きながら突進してくる姿に、両腰のミサイルを発射する。だが、直撃する前に長剣を縦横無尽に振るわれて信管を切り落とされて無力化されていた。

「クツッ! いちいち接近してくんじゃねーよ、ちけえんだよッ!」

「と、言われましてもね。間合いが遠いので」

近づくなど言われて、リードは長剣を構える。柄頭に左手を置いて、一呼吸。

——それは、詩だった。

長剣の鍔が開き、柄が引き伸ばされる。それは最早、剣としての形態ではなく長槍と化していた。

『我が歌を聞く同胞よ。輩達よ。最愛なる者へ別れを告げよ』

紫電を纏い、振るわれる刃が火の粉を散らす。それに巻き込まれてノイズ達が焼き払われていくがリードは構わなかった。

『我らは死せる者となり、戦いへ赴くのだから』

紫電が形を成していく。舞い上がる火の粉が焰となって羽根を広げる。それは、竜だった。御伽噺に出るような、英雄譚の悪役。顎を大きく開けてクリスを呑み込もうと身体を伸ばす。

『空を仰ぎ見よ。悪しき竜が羽撃いている』

「——お、いオイオイオイ!? 冗談じゃねえぞ!」

『その口からは業火が溢れ、その身は紅蓮に包まれている』

長槍となったバルムンクを振り回し、薙ぎ払う。その軌跡をなぞるように灼熱の竜が舞い、ノイズ達を焼き払いながらクリスの後を追った。

「クリスちゃんツ!」

右腕のプロテクターを限界までスライドさせた響がノイズ達を飛び越えて駆けつける。

『我が身を焦がせ、劫火。災厄を祓う焰よ!』

地面を抉り、焦がしながら迫るリードの放つ“竜刃”の前に響が割って入ると拳を引き、絞る。整息すると一気呵成に溜めた力を迫る紅蓮の竜に叩き込む。

「コレが、私のお——雷槌だアツ!!」

鼻先に叩きこまれた拳から、更に打ち込まれるフォニックゲインによって相殺された竜が火の粉となって消えていく。それを見て、リードは長槍を戻す。柄を押し戻すと細身の長剣へと形を変えて、響へと賞賛の言葉を送る。

「流石。お見事」

兜の下の表情は窺い知れないが、その声色から笑みを浮かべているのだろうと推測できた。響が構え直すと、ネフィリムが飛びかかる。それを蹴り飛ばして、響はクリスに背中を預けた。

戦闘の様子を眺めていたウエル博士は、リードの放った技に言葉を失っている。

「……彼は、アレは一体なんだ？」

「シンフォギア。バルムンク」

「英雄ジークフリートの駆る剣くらい知っていると！ 何なんだアレはあー！」

「……」

全身鎧という特異な形状のプロテクターは、言ってしまったらそうでもない扱いきれない代物ということになる。まるで現代に蘇った英雄だ。だが、アレは決して魔法などではない。

リードという人間は、果たして何者なのだろう。六道絆は考えたこととすらない。下衆の勘繰りは性分に合わないからだ。

「見りやあ分かんたら」

ぶつきらぼうに答える六道絆は、リードの救援に駆け出す。ネフィリムを相手にしている響の周りには新たにノイズが召喚されていた。翼は身動きを封じられており、その援護も兼ねてクリスがイチイバルで周囲を薙ぎ払っている。

ベルはと言うと——そんな戦況にありながら、無線で連絡を絶やさない。

「二人とも！ 残り五分、時間を稼ぐわよ」

「ええ、分かりました」

「言われるまでもねえ！」

今の状態で離脱するのは至難の業。仮に出来たとしても追跡の手を免れるのは難しい。

「翼さん、無事ですか！」

「ああ。すまない立花、助かった」

「とはいっても、この状態をどうすつかだな……」

戦況は膠着状態。この状況を打開する為の手段があまりに限られている。ネフィリムまでもが控えていた。ウエル博士の手にソロモンの杖がある限り、無尽蔵にノイズが湧き出てくる。状況は、二課の劣勢だ。その様子を見守っていた弦十郎達だったが、そこへ接近する反応がある。生体反応——戦場に響き渡る狼の遠吠え。

「ヴェオちゃん!？」

カ・ディングル陞地へと駆け込んできた一頭の狼はノイズ達の群れを前にして頭を低くして唸り声を上げている。それを見たウエル博士は思わず笑ってしまっていた。

「たかが犬ところ一匹ッ！ 何が出来ると言うんだ！」

「犬じゃねえ、狼だッ！」

「ワオンッ!!」

「貴方どつちの味方よ……」

ベルが律儀に突っ込む六道絆に呆れている。

確かに——確かに、ヴェオは完全聖遺物だ。信じられない事だが、事実である。生きた完全聖遺物が現代日本の戦場で邂逅を果たすという奇跡にヴェオは目もくれない。あるのはただ強烈な本能。目の前に列挙するノイズ達の群れを絶殺するという本能だけが“彼”を駆り立てる。

「ウオオオオオオオオオオ——!!」

ヴェオが駆け出す。響達を越えて、四足歩行で。その咆哮から検知されるアウフヴァツヘン波形に二課のモニターが慌ただしくなる。

それを確認した朔也がまるで信じられないといった表情で呟いた。

「完全、聖遺物……『ベオウルフ』……起動します」

四本の脚で駆け出していた身体が更なる巨軀へと変貌を遂げていく。跳ねるような足取りはやがて二足歩行で走りだしていた。地面を“手”で叩き、上体を起こしたヴェオがノイズの群れへと飛びかかる。

全長二メートルを越す巨体がノイズ達を蹂躪していく。爪で裂き、牙で砕き、自らの肉体を武器として君臨する人類の守護獣。

その姿は、六道絆のベルセルクに酷似していた。いや、こちらが原種であり、ベルセルクはこの完全聖遺物の贗作でしかない。

それに挑みかかろうとするネフィリムが両腕を挙げて威嚇するが、ヴェオは一瞥もくれずノイズを次々と炭へと変えていた。

「立花、雪音。今こそ勝機だ！ ソロモンの杖を確保するぞ！」

「はいー！」

「やらいでか！」

ノイズはヴェオに任せておける。心強い救援は二課だけではなかった。

迫るバイクのエンジン音に今度は何事かと見やれば、乗り捨てて駆け込んでくるのは黒人男性だった。その隣には白人男性も並んでいる。

「リード様！」

「やあ、ハファエウ。すまないね、君の手を借りる事になりそうだ」
「構いません。この生命、存分に！」

「……ありがとう」

六道絆がそのやり取りに人知れず舌打ちを漏らしていた。

「ベル。テメエは先に戻れ」

「そうね。これ以上戦場に長居すると長生きできそうにないし」

「笑えねえ冗談だ。リード、テメエもだ」

「いいのかい？」

「心配されるほどヤワじゃねえことくらい知ってんだろ」

「そうだね。それじゃあ、君たちに任せるとしよう」

リードとベルは戦場から離脱しようとして、思い出したように駆けつけてきた黒人男性に向けて言葉を送る。

『Sie g heil』

「——オオオオオオオオッ!!」

ベルセルクが起動。それは、六道絆の持つシンフォギアと同じ波形パターンだった。量産型シンフォギアとも呼ぶべき反応に弦十郎が戸惑う。しかし、その時——異変が起こる。

シンフォギアを起動した男性が苦悶の声を上げていた。胸を抑え、ペンダントを取り外そうとさえしている。自らの身体を蝕む言いよりのない暴力的な衝動が全身を黒く染め上げていた。融合症例にしか見られないはずの「暴走」こそが、その正体。

正規適合者である六道絆を除いた人間以外が起動したベルセルクは、例外なく起動した人間を死に至らしめる。だが、その瞬間から肉体が聖遺物に乗っ取られる状態となる。つまりはゾンビだ。痛みもなく止まること無く、聖遺物が人間の器を借りてひたすらに破壊衝動の塊となつて暴虐の限りを尽くす。

そのベルセルクが、二匹。手当たり次第に襲いかかる黒い獣が響と翼に向かっていく。ノイズはクリスとヴェオの二人で片付けているものの、六道絆とネフィリムは手薄となっていた。この状況下で動かないのは六道絆だけ。ネフィリムは同じ完全聖遺物であるヴェオに

向かっていた。

「人類の救済！ その計画を実行するために僕たちは行動を起こした！ それなのに何故計画の邪魔をする！」

「人類の救済……!?!」

「そうだ！ 公転周期のズレた月の軌道！ それは十数年もしない内に地球へと落下してくる！ そうなる前に一人でも多くの人類を救う、それが僕達の目的！ だというのに、何故我々の邪魔をするんだ君たちはあ!! そんなにも滅ぼしたいか、人類を！ その奇跡で！」

「違います！ 私たちはただ！」

「なら僕達に協力する気はないのかあ！」

「ねえよ」

六道絆は断言する。人類の救済も何もかも興味はない。響と翼がベルセルクを撃退するが、その傷つけられた肉体は驚異的な再生速度で全快すると再び二人に襲いかかった。その片方を六道絆が蹴り飛ばす。首を真横から蹴られたベルセルクが苦悶の声をあげながら倒れた。

「人類の救済だあ？ 寝言言ってるじゃねえぞ、ドクター」

「な——」

「テメエ一人で救える世界なんぞ、その程度の価値なんだろうよ。七十億の人類総出でお前一人に釣り合うのかよ。そりえねえな、有り得ねえよ。笑わせんな。脇腹痛くなるほどの笑い話の与太話だ。誇大妄想も大概にしてくれ」

「僕を否定するの catt?! いや、それだけじゃない。人類救済を掲げるマリア達すらも！」

「オレの信念は弱肉強食だ。弱い奴は死ぬ。強い奴は生き残れ——つてのとはちよつと違うけどよ」

人間は、どう逆立ちしても弱い。どう足掻いても弱い生き物だ。人間社会の枠組みから弾き出され、自然界の掟の中で六道絆は生きて、学んだことがある。群れの中から弱い仲間から死んでいく。だがそれは群れ全体を活かすために自ら犠牲となったのだ。

勘違いしてはならない。自分達は「生かされている」のだと。

「強者は弱者ありきの存在だ。だから弱い奴は生かす。弱い者いじめなんぞ格好悪くて出来るかよ。〃自分は強い〃と勘違い甚だしい野郎の鼻っ柱へし折るのがオレのやり方だ。テメエのことだよ、ドクタ―ウエル！」

『ヴォオオオオオッ!!』

襲いかかるベルセルクに六道絆は裏拳を叩き込む。ネフィリムをあしらってヴェオがもう一匹のベルセルクを蹴り飛ばす。くの字に折れ曲がった身体が地面を転がり、悶絶していた。

「テメエに何が出来る？ テメエにオレが殺せるか？ 勘違いしてんじやねえぞ。ソロモンの杖が無けりやあテメエなんぞ、ただの眼鏡野郎だッ！ 犬畜生にも劣る！ 〃英雄になる〃なんて軽々しく言っ てんじやねえ！ 〃ならなきやならない〃奴が、そうなるんだよ！

理想なんぞ口に出すほど遠ざかるんだ、テメエはバカかッ!!」

「君にだけは言われたくない！」

「そりやあごもつともだ！ だったらテメエの力でオレを黙らせてみるよ！」

矛先を六道絆に定めた二体のベルセルクが飛びかかるが、一匹がヴェオに頭を掴まれて地面に力任せに叩き伏せられる。もう一頭はすれ違いざまに六道絆のカランビットナイフによってコンバーターを破壊されて地面を転がっていった。そのままピクリとも動かない装者がシンフォギアを解除すると、そこに倒れていたのは――老齢の域に達した、枯れ木のような老人。

「…………おじいちゃんになってる…………？」

「バカな。先程の装者は、確かに――」

屈強な肉体の黒人男性だったはずだ。生命力の燃焼。否………… 〃生命の絶唱〃とも言うべき代償がコレだ。

生への渴望。 〃死にたくない〃と叫ぶ生命の鼓動こそがベルセルクのコマンドワード。

「煩惱に悩まされるから悟りを開くんだろうがッ！ 口から出る言葉ほど足りてねえ証拠だ！」

「だったら僕に何が足りていないと言うんだああッ！」

「救いが足りてねえんじやねえか？ 祈れよ。心が折れる前に。だが忘れんな。神様なんてのは生きた人間に救いの手を差し伸べたりしねえんだ。死んだ人間の魂が救われるんだよ、コイツみたいにな」

ハファエウの亡骸を一瞥する。その顔は死後の安息からは程遠い苦悶の極みだった。盛者必衰——繁栄は必ずれ衰える。人は生まれながらに老いていく。ならば死を恐れる理由など何処にもない。それは覆せない定めなのだから。受け入れて、どう生きるか——六道絆は自由に生きると決めていた。だからこそ死者の集まりであるインフェリアルでは異彩を放ち、孤立していたがそれを寂しいと思つたことはない。

自分は既に、ヴェオに救われているのだから。死者と手を繋いで踊る稀な趣味も無い。

ベルセルクが響達に襲いかかり、その相手に苦戦している隙にネフィリムが響へと更に襲いかかる。だが——その丸太のように太い腕がベルセルクの首根っこを押さえつけた。

「ネフィリム——？」

そして、次の瞬間には口を大きく開けて頭から丸呑みにしている。その行動にはウエル博士も驚いていたが、なにも当然のことだ。ベルは言っていた、聖遺物で人間の力を引き出すのだと。ならばこれもまた自然なことだ。

聖遺物と一体化している人間、擬似的な融合症例はつまり——ネフィリムの為の撒き餌なのだ。

「フツ、フフフ……ハハハハ！ そうかあ、コレだあ！ 聖遺物を喰らったア！ 彼女の発明は所詮、僕にとつての餌でしかない！ これはずまり、天は僕に味方しているということ！」

聖遺物を喰らうネフィリムが更なる成長を見せるが、六道絆はそれをただ見上げていた。響達もその姿を見上げる。頭から食い千切られた装者は、生存の見込みは望めない。

「どこまで腐ってやがる……！」

「どちらにしろ、無駄死するかアイツの腹に収まるかの二択だったんならネフィリムの腹の肥やしになっただけマシじゃねーかな」

「ロック。貴様は人の命を何だと——！」

「アレはもう人間じゃねえよ。畜生だ。だったら、より強い奴の糧になるのが必然だ。そいつが自然の摂理だろう、風鳴翼」

彼にはきつと、楽しかった幼少時代もあつたはずだ。楽しかった思い出も嬉しかった出来事もあつたのだろう。だが、死んでしまえばそれにも意味は無い。だから六道絆は、それ以上の感情を抱かない。生きていれば死ぬのだから。人生など、死に向かうまでの無聊の慰みでしかない。

ならば地獄に落ちるときくらいは、その今際の際くらいは笑って死にたいものだ。

「ボサツとしてんな、ヒビキ。今度はアレどうにかしなきゃならねえんだから」

「……は、はいっ」

「氣い抜いてると今度はテメエが食われっぞ」

もつとも——そんなこと、ヴェオが許すはずないのだが。

Tr. 27 生命の絶唱こそ我が聖詠

六道絆はヴェオを見やる。『本気』の姿を見るのは、これで二度目だ。完全聖遺物であるのを知ったのは、二年前にベルが検査した時だが、それが何だというのか。

イギリスで発生した認定特異災害に巻き込まれ、荷物も財布もパスポートも投げ捨ててノイズの群れから逃げていた際に、崖から足を踏み外した。山奥にまで追ってくるまでは思わず、死を覚悟した時に出会ったのがヴェオ。地元の住民からは山神様と静かに崇められていた狼。ノイズを蹴散らし、重傷の自分を群れを引き連れて村まで送り届けてくれた。

その恩義がある。命の恩人だ。相手は獣と言えど、返す義理がある。怪我が治ってからその狼に会いに行ったら——なんとまあ、そっぽを向かれた。それが癩に障ったので、なんとしてでも恩を返してやろうと逃げる姿を追った。気付けば山奥で生活するのが当たり前の日々。元々人間社会の爪弾き者。現代社会から隔離されている身分には心地よかった。

寝て起きて、狼の群れと生活して、その日の食事を自分で捕り、過分なく胃袋に収める。そんな野蛮な生活ではあったが、それで良かった。少なくとも、感じたことのない充実感に満たされた日々だったのだ。

ネフィリムの腕を掻い潜ったヴェオが反撃に打って出る。力では勝てずとも、スピードに特化したヴェオに、ネフィリムの腕は空振るばかりだ。

「……圧倒してる、のか」

「いや、そうでもないらしい。さつきも見ただろ」

ネフィリムは聖遺物の力を喰らう。それは完全聖遺物であるヴェオであっても同じこと。ネフィリムからすれば絶好の獲物が目の前に立っていると同義。しかし、ヴェオは違う。

先史文明期の人々が願ひ、祈り、愛した一匹の獣——いつしか人々が神と崇め、偶像としたその狼は人類の守護獣として遥かな悠久の時

を生きることとなった。獣もまた、それを己の使命として受け入れた。

人命の絶対守護こそが完全聖遺物『ベオウルフ』の特性。悪戯に暴食を繰り返すネフィリムは天敵ないし、怨敵と言える。だが、その相性は決して良いとはいえない。

ネフィリムに喰われれば、ヴェオとて無事では済まない。対する相手は、聖遺物を喰らえば成長を重ねる。そんな綱渡りを見ているだけだった六道絆もヴェオに加勢する。それまで決定打を与えること出来なかつたヴェオのフォローに入る六道絆の無謀に響も続いた。結局のところ、六道絆が敵なのか味方なのかはつきりしない事にクリスの胸中はモヤついていたが今は味方として見ていいらしい。

(しつかりしろよ、アタシ！ コイツはテロリストなんだぞ?!)

自分から全てを奪った憎むべき敵。何もかもを奪った。奪い尽くした。略奪の限りを尽くした怨敵、仇敵なのに。それを助けようとしている。さらには加勢している。何の冗談かと疑いたくもなろう。しかし今は寝ぼけている場合でもない。イチイバルでネフィリムを狙い撃つ。その銃撃の合間に六道絆が殴り、ヴェオの蹴撃によって苦悶の声を上げた。更には響のプロテクターをスライドさせた重い一撃によって巨体が宙を舞う。そこへ翼の“千ノ落涙”が追撃する。瞬く間に剣山のようなになったネフィリムが地面に落ちて倒れ伏せていた。その姿にウエル博士がまるで我が身のように苦痛の声を漏らしていた。

「やめろお、やめてくれえ！ ネフィリムは！ 僕達の計画に、人類の救済に必要不可欠なんだぞ！」

「さっきっからごちゃごちゃと御託宣つてうっせえんだよドクター！」

「うるさいッ！ 君の方こそ何なんだ！ 僕達に加勢して、今度は二課に手を貸して！ 君は一体どこの誰の味方なんだ！ 狼少年にしても限度があるだろうに！」

「っせえな、テメエの心配しやがれ！」

六道絆が落ちていた石を拾い、全身で振りかぶって投げる。抜群の

コントロールで投石はウエル博士の手元からソロモンの杖を弾き飛ばした。右腕の痺れよりも、自分のアドバンテージを失う事が恐ろしかったのか、ウエル博士は慌てて宙に飛んだソロモンの杖を追いかける。だが、今度はそれをクリスがボウガンで更に弾き飛ばした。

「クリスちゃん！」

「ッ、くそ！」

ソロモンの杖を一刻も早く回収したい。だが、眼前に立ちはだかるネフィリムがそれを許さなかった。大きく振り下ろす腕を避けてガトリングで蜂の巣にするものの、翼の天羽々斬ですら切断の難しい頑強な身体はビクともしない。

「ウエル博士は!?!」

「捨て置き、立花！ 今はコレを切り抜ける！ とはいえ、どうするか……！」

「……ヴェオ。やれるか」

六道絆の言葉に、ヴェオは深く頷いた。

「今夜はここらでお開きだ。オレは向こうに加勢するし、お前らは二課に戻れ」

「ハア!? なに言ってやがる！ テメエの好き勝手にどれだけアタシ等が迷惑してると」

「んじゃあ、ここで白黒つけるか？ ウエル博士はどつか逃げちまつたし、このままネフィリム相手してもジリ貧だ。そっちが手を引いてくれるならオレもこれ以上お前たちを相手することもないんだがね」

「それなら切歌ちゃん達とお話しさせて！ 私達はその為に」

「この期に及んでほんとバカか！」

「だって！」

六道絆は頭を掻いて、翼を見やる。

「数の不利は至極当然だが……それは、裏を返すと周囲の被害を考慮せずに実力を十全に発揮出来るということだな」

「そういうことだ。ネフィリムはこっちでオレが引き受ける。二課にも落ち着いたら連絡するからよ、さっさと退いてくれ」

「呼び出しておいて帰れたあ随分自分勝手だな」

「忘れんな。オレの後ろにはリードが控えてるってことをな」

シンフォギア・バルムンクを駆るアインフェリアルボス。超常の性能を誇る防御能力に加えて、斬撃の鮮烈さはまだクリスの身体に残っている。此処は退くのが得策だろう。

「考えはまとまったみたいだな」

「ああ。そちらの厚意を受け取ることにしようか」

「それはどうも」

六道絆は暗闇へと去って行く響達の背中を見送り、ヴェオと取っ組み合いをしているネフィリムへと歩み寄る。純粹な腕力では分が悪いようだが——口笛を吹くと、ヴェオはネフィリムの胸に片足を当てて爪を立てながら蹴り飛ばした。その反動で後方に宙返りしながらもヴェオの身体が元の姿へと戻る。

「なあにが完全聖遺物だよ。どう見てもブサイクなサンショウウオにしか見えねえんだよ、オレには」

拳を鳴らし、肩を鳴らしながら六道絆は吠える。欠けた月に向けた咆哮に、ヴェオの遠吠えが共鳴する。シンクロ

生命の絶唱。『死にたくない』と叫ぶ原初の鼓動こそがベルセルクのコマンドワード——否。それは間違いだ。だから暴走する。勘違いだ。そんなのはお門違いだ。

人は生まれた以上は死に向かう。それは覆せない運命だ。なのに『死にたくない』と叫んだところで運命は変わらない。受け入れる他にない。だから間違っている。そんなのは誰だって当然だ。

生まれた者は、死ななければならぬ。栄えた悪は、潰えなければならぬ。盛者必衰の理。天網恢恢疎にして漏らさず。

「オオオオオオオオオオオ——ッ!!!」

だから、どう死ぬか。どんな風に死にたいか。理想の死を迎える為には、生きなければならぬ。不慮の死を受け入れることなど出来ない。そもそも人とは生きていくというだけで奇跡なのだから。どんな軌跡を描いたところで終わりを迎える。だから、間違っているのだ。

ベルセルクのコマンドワードを、ベルは履き違えている。生命の絶

唱。『死にたくない』と叫ぶ生命の鼓動ではない。

その聖詠こそは、心臓の鼓動。生命の鼓動。原初の鼓動——こんなにも胸の中で叫んでいる。

『生きたい』と！

六道絆は叫ぶ。天高く、月まで届けと吼えた。

その異常なまでのフォニックゲインの上昇率にエアキャリアで待機していたナスターシヤが目を丸くしていた。

「……この適合系数は、まるで融合症例です。彼ほど、聖遺物の力を引き出せる適合者はいないでしょう」

「ほんと、笑っちゃうわよね。あのバカ」

「ベル。貴方の錬金術を用いて造られたあのシンフォギアは」

「そうよ。アイツだけ。アイツだけが、私の成功作。錬金術の基礎は分解と解析、再構築。等価交換。魂の錬成や抽出。肉体の再錬成が適合系数を引き上げると私の理論では実証されるはずだったのよ——」
人道に反する。ちっぽけな倫理観と保身の為に自分は全てを奪われた。

それを間違っってなんかいないと声を張り上げてくれたのは、六道絆。

「きつと私には、アイツ以上の肉体と精神を持つ人材に出会うことはないでしょうね」

「それじゃあ、ベルさんの錬金術は」

「ええ。聖遺物で引き出すまでもない生命力も、肉体も精神も全部アイツが持つてる。それどころか自力でねじ伏せてさえいる。あいつは生まれる時代間違ってるのよ。こんな現代社会じゃなくて戦乱の世に生まれていれば出会うこともなかったのに」

モニターを見つめるマリアは、知らず知らずのうちに拳を固く握りしめていた。ガングニールとの適合系数の低い自分とは真逆だ。羨望と、嫉妬の入り混じった感情が胸をかき乱す。

Tr. 28 吼えろ、月まで届けとこの声は謳歌する

「で、でもそれじゃあどうなっちゃうデスか!？」

「どうもしないわよ」

「え?」

「聖遺物の力を引き出すだけ。他のシンフォギアと同じように」

「ですが、それはつまり」

ナスターシヤの疑問にベルが薄く微笑んだ。そこには自嘲の念も感じられる。

「貴方の理論に基づいたシンフォギアでは、聖遺物が人間の力を引き出す。ならば、その逆になったその時。装者はどうなるというのですか?」

「……聖遺物と融合する。或いは、新霊長として君臨するのどちらかね。だけでも今のロックは不完全な状態よ」

ヴェオの力を借りて、その限界点に辿り着いているに過ぎない。

「だけどね、ナスターシヤ教授。私のその理論を突き詰めると最終的に、ヒトは完全聖遺物ですら制御可能になるわ。それが一つの答え。私の研究の到達点」

それこそが「英雄の器」に他ならなかった。その選別の為にインフェリアルを利用しただけに過ぎない。リードにもその全てを伝えてある。彼はそれも是とした。それで良いと。彼自身の目的を助長させるものとして組織は受け入れた。それと引き換えに、自分が願ったのは自分を否定した大人達の抹消。リードは笑みを浮かべて手を差し伸べてこう言った——「その願いを聞き入れよう」と。

そして。フランスで起きたのは聖遺物研究機関の爆破テロ事件。小規模なものであったが、奇跡の解析をしていた大人達は残らず人の手で死んだ。そこには、ベルの両親の名前されも羅列していたが彼は気に留めてすらいない。

「なら、他に答えがあるのですか?」

「そうね。私は知りたい。ソロモンの杖が開くバビロニアの宝物庫。」

位相差障壁、それはつまり別な世界。別次元の扉。つまり異世界への切符よ。私はそれが見たいわ。弱い人間じゃ無理かもしれないけれど、聖遺物ですら凌駕するヒトでなら。新霊長となった人間の手下、きつと」

「……もしそんなものがあるのだとしたら、貴方はどうするの」

「……この世界を捨てて、新世界で生きていく道を選ぶでしょうね」

モニターで見つめていた六道絆がベルセルクを起動する。ヴェオの加護を受けて纏う奇跡の姿は、六道絆の理性によって制御されていた。その感覚を確かめるように爪を開閉する。

ネフィリムが突進してくるが、それを受け止めて逆に利用して投げ飛ばす。歌はいらない。この胸の内を高鳴る鼓動ビートがリズムを刻んでいる。

「——『CODE：HOWLING』」

「なんですって?」

「シンフォギアの限定解除エクストライブに極めて近い状態。完全聖遺物であるヴェオの力を借りた、今のベルセルクのこと。シンパシーとでも言えばいいかしら。お互いの咆哮でより高く、強くフォニックゲインを引き上げる」

ナスターシヤの脳裏に浮かぶのは響達の「S2CA」だ。それを完全聖遺物と引き起こしている六道絆の異常性には研究者として強く惹かれるものがあった。

「では、今の六道絆にはマリア達では束になっても敵わないと?」

「まず普通じゃ勝てないでしょうね。それこそ融合症例でもない」と

目には目を、ということだ。しかしそれで本当に勝てるかどうかすら怪しい。ネフィリムの成長態が口の中から炎を漏らしている。次の瞬間、口から吐き出される火球を六道絆は笑って殴り飛ばした。モニターを見ていた全員が今度は目を丸くする。

「あんなことも出来るの……?」

「あれは単純にバカのセンス」

「……そう」

「どうやってネフィリムを止めるつもりなのですか」

「そんなの、頭空っぽにしてみれば簡単に分かることよ。最も、頭脳労働が主体の私や教授には難しいことだけど」

野生の法則。自然の摂理、弱肉強食——六道絆は、此処でネフィリムを潰すつもりだ。

ヴェオの遠吠えによって昂ぶるフォニックゲインを、ベルセルクの過剰な出力によって吐き出す。火球を握り潰し、今度は顎下を捉えた拳が巨体を打ち上げた。狙うのであれば、心臓を一撃でえぐり出すのが望ましい。

二度、三度と蹴り上げて更に高く打ち上げたネフィリムの下で待ち構える。爪を鳴らして、腕を構えて夜空を見上げた。

「ガアアアアアアアアアアッ!!」

アームドギアなど形成する必要性すらない。この肉体こそが得物、生命こそが何よりも頼りになる武器だ。故にこそ、ベルセルクはアームドギアを形成しない。

体表を破り、臓腑を貫き、抉り出した心臓を握りしめて、六道絆は踏み止まる。ネフィリムは心臓を抉り出されてもまだ藻掻く。心臓を放り捨てて、六道絆は風穴の開いたネフィリムに向けて息を吸い込み、叫ぶ。

“Roar”——その咆哮こそが、六道絆最大の武器。喉が枯れるほど叫ぶ。世界に響かせる。

オレは生きると。死ぬ理由など無い。死んだ覚えもない。ただ自分は、人間社会に馴染めなかつただけだ。それを死人と呼ぶのなら好きにするといいい。それでも叫ぶとも。オレは生きているのだと。

超至近距離からフォニックゲインを乗せた咆哮を受けて、ネフィリムの肉体は四散していく。夜風に運ばれて消えていったネフィリムを確認して、六道絆はベルセルクを解除した。

そして、口を押さえて咳き込むと吐血する。それに口をへの字に曲げて立ち上がると、ヴェオが駆け寄ってきた。心配そうに見上げてくる頭を撫でて、顎で指す。言葉を交わさずとも意思は通じる。

自分がフィーネに残る。だから、ヴェオは二課に行くべきだ。そん

な六道絆の意思を汲み取ってヴェオは一度だけ頭をすり寄せると走り去っていく。そして、六道絆もエアキャリアへと戻っていった。

一部始終を見ていたマリア達が妙な面持ちをして六道絆を迎え入れる。そこにリードの姿が無いことを確認して、身振り手振りで尋ねると、ベルがそれに答えた。

「あの人なら別行動よ。まだ離れるわけにはいかないらしいわ」
「……」

そうなのか、と一応頷いておく。『CODE・HOWLING』の使用後はギアを纏うどころか声を出すのも厳しいのが難点だ。それもヴェオも一緒にいなければ使えない。試しに声を出してみるが、ダミ声にしかならなかつたので止めておく。

「あゝー……」

「ひどい声よ」

「じつでる」

多少喉の調子がおかしくなるくらいのはバックファイアなら軽いものだ。気安く出来るものでもないが、ベルセルクを完全制御下におく為にはこうでもしなければ出来ない。

「ウエル博士は？」

「じるが」

「ソロモンの杖を追って、何処かへ行ってしまったようですね……」

「ッー」

「ママ!？」

咳き込み、口に手を当てるナスターシャの手のひらには血糊が吐き出されていた。

「ちよつと、どうしたの？」

「……ママは、もう長くないの。だから今まではウエル博士の手を借りてなんとか騙し騙し。私なら応急処置くらいはできるけれども、本格的な治療は……」

期待のこもった眼差しにベルは、やんわりと首を横に振る。

「残念だけど、私は異端技術専門なの。医療知識は一般人並よ」

「とにかく今はドクターを探さないと……！ 調、切歌。お願いできる？ 私ほママを」

「分かったデス！」

「うん……！」

「手を貸してもらえるかしら、ベル」

「それくらいしか役に立てそうにないからね。ロック、アンタはおとなしくしてなさいよ。後でメディチェックさせてもらうから」

その言葉に、六道絆は渋々といった様子で手を振った。

ウエル博士は何度も転びながらソロモンの杖を探し、地面を這っていた。ようやく見つけたそれも岩の下に挟まっている。毒づきながらどうにか引つ張りだそうと力を込めるが、ビクともしなかった。「くそッ！ 畜生！ チクシヨウ、なんでだ！ なんで僕の計画をこうも邪魔する！」

月明かりから影が落ちて、驚きと共に振り返るとそこにはリードが立っている。薄く笑みを浮かべた穏やかな表情は、今この時にあつては不気味以外の形容しようがなかった。

「難儀していますね、ドクターウエル？」

「な、なんだ！ 僕になんの用だ!？」

「いえね。貴方が困っているようなので手を貸してあげようかと」

そう言つて、リードはウエル博士と共にソロモンの杖を挟み込んでいる岩を退かす。その僅かに出来上がった隙間から引きずり出すと、ウエル博士は汚れを払い落としていた。

「……なんで僕を助ける」

「はて、何故かと聞かれましても。それは私が貴方の協力者だからです」

「はんつ。信用ならないね」

「——武装組織フィーネ。果たして本当に世界を敵に回せる器ですか？ フィーネを騙ったマリアですら怪しいものですが、貴方も」

「あのダメ女はともかく、この僕ですら疑うというのか!？」

「当然でしょう」

期待はずれだとも言いたげにリードは肩を竦めてみせる。

「私としては、あの組織は理想が独り歩きしているように思えますがね。このままでは、世界に混乱を招いただけに過ぎない。ある意味、史上最悪といえるでしょう。人類に未曾有の危機が迫っている事を知らしめただけでも英断と言えませんが」

「だったらどうすればいいんだ!」

「月の落下という危機を前に人類が一丸となる——それは私が一番望んでいる結果だ。だが、現状ではあまりにそれも叶わない状況です」

「……なら、どうするつもりだ」

「計画を更に進めます。その為には貴方達の計画をより知らなければならぬ。我々に協力していただけですか、ドクター? もちろん、フィーネの方を優先してもらって結構ですが」

——ウエル博士は考える。確かに、今のままマリアやナスターシャに協力し続けていたとしても英雄願望は満たされない。それどころか自分のすることを非難するだろう。このままやきもきするくらいならばいつそ自分がインフェリアルに加担するのが最善策となる。「勘違いするなよ、英雄になるのは僕だ」

「構いませんよ。英雄を育てるのが私の計画ですから」

人類救済と人類統一を胸に抱く二人の男が手を取った。歪んだ理想という点においては共通した思想の下、加速していく計画が明かされる。